
月の舟

ジョゼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の舟

【Nコード】

N4561H

【作者名】

ジョゼ

【あらすじ】

一年に一度の白夜のお祭り、夜無空。月の舟がやって来ると言う言い伝えの生きるこの本日に、カムカヌカは不思議な少年に出会う。天を取り巻いた、それぞれの終曲の旅が始まる……。。

一、夜無空

プリズム
光彩を囲う銀闇の刻

夜を乗せて舟が来る

月を廻るリュヌの天舟
そらぶね

沈んだ魂をひつつかんで

終曲の旅へ出る

スニオン
守二四、冷え込みが増し八花初降りしきるこの本日に

如何いう訳かカムカヌカは星線香を全て失くしてしまつた。

星線香はリュヌの声を聴き入れる苗床として本日の夜無空には
ヤナカラ
欠かせぬ持ち物であつた。

(つくづく運無き腕・・・)
かいな

白い息を吐き出した彼は、適当に羽織つてきた薄っぺらな上着をひ
としきりガサゴソしてみるも、あつたはずの数本の星線香は何処に
も見付からない。

落とした覚えを詮索するも、不透明でもややもやしたものに阻まれた
不思議な感覚にぶつかり

記憶が曖昧で脳が凍っている。

(・・・?)

カムカヌカは脳の異変を深く考えまいと頭を軽く振り、首もとの毛マ暖フルを

一層きつく巻きなおすと、回れ右で降り止まぬ八花ヤツカの中を銀十路メルキクロスとは逆に歩き出した。

カムカヌカは最近常に何かしら煩わしさを感じるようになっていた。小さなこの街でひとりで暮らす彼は、同年代の子達とは違って現実に冷めていた。

黒いバサバサな髪に、何事も冷ややかに映す蒼い瞳。

そしていつも目立たない上着コウトを適当に着て、牛乳を配る仕事をしていた。

今年で18になる。

毎日が退屈な繰り返し、孤独も嫌というほど食い込んでくるもので家の灯りや夕食の香りが

カムカヌカにとっては毒であつた。

この退屈と孤独と決別出来るなら何だってする。死、より、消滅を望んだ。

そういう意味では現実に冷めているというよりも、ただの夢見がちな人間なのかもしれない。

きつといつか、見たことも聞いたことも無い世界に行けるはずだ、そう強く望むことで、不可能はきつと免れる、僕は信じることを辞

めはしない

カムカヌカはいつもこんなことをぼんやり考えては、絵を描くことに没頭していた。

暇を見つけては白板カンバスに向かい、不鮮明な硝子のようなものをひたすら描いていた。

夜無空は街を上げてのイベントなので、丸三日仕事が休みになる。

これを利用して配達寮に籠り、今日も描きかけの油絵ヴィエを仕上げる予定だったのだが、人恋しさが勝ってか気が付けば街に来ていたというわけだ。

この小さな街の中心広場に真っ直ぐに突き刺さるどの家よりも巨大な剣、銀十路メルキクロス。

遙か太古にやって来た月の舟の使徒の剣とかで、この街の印点シルボとなっている。

夕焼けは銀十路メルキクロスに跳ね返り、カムカヌカの背中を焼いた。

すれ違う楽しそうな若者や家族は、みな祭りの中心である銀十路メルキクロスへ向かっている。

夜無空の灯は間も無く街を照らすだろう。
賑わう声が心を蝕む。

・・・嫌だ。

ト。」「！」

^{ノアクロス}古十路の曲がり角、小さな衝撃。

「逆光を飲み込む薄闇に、逆境を吐き出す白昼夢よ、
何処かで自らに捧ぐ偽岸華^{ガレイ・コタン}を見かけませんでしたか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は」

少年だった。

街一番の名門校・世勉^{ゼエベン}の制服を着た十にもなっていないであろう、
幼子。

澄んだ黒い瞳に、ベレエ帽から少しずつ覗く栗色の髪は夕日を受けて
ところどころ金に光って見えた。

逆光を飲み込む薄闇の・・・・・・・・なに？

「急いでいるんです、僕」

焦った様子で彼は一歩、目が点のカムカヌカに近付いた。

そのとき、カムカヌカは少年の手の星線香に気付いた。

「夜無空はきつかけです、信号です、」
ヤナカラ サイン

「・・・・・・・・・・」

「夜が来るんです、舟で」
ヨル

「・・・・・・・・・・」

意味は、わからなかった。
だけでもカムカヌカには何か確信があった。

寒気に頬を赤く染めたこの不思議なことを言う少年に、
ガラス玉の様に煌びやかな夢への入り口を診る気がする。

自分でもよくわからない、何を犠牲にしてもここではない何処かへ
還りたい、という純粋な欲望を抱くカムカヌカを縛る、この世界で
は誰にとっても当たり前前のつまらない鎖。

それが今まさに断ち切られんとしている、という予感がカムカヌカ
の背筋をこわばらせた。

それは本当にただの直感で思いつきだったが、カムカヌカは自分を
信じて疑わなかった。

ほんの少しの沈黙が流れた。

じつと言葉を待っていた少年に、カムカヌカは慎重に声をかけた。

「・・・・君の偽岸華は、見ていないな、」
ガレイ・コタン

ガレイ・コタン
偽岸華は死んだ者に送る花。

この花の名前を口にするのを忌み嫌う者は多いが、カムカヌカはそんな事思ったりしない。
なのに何故、こんなにも心臓ハルトが激しく脈打つのか、自分でもわからなかった。

「もしかして葬儀ヒユウラにでも行くのかい」

カムカヌカの言葉に少年は首を振り、「葬儀ヒユウラだなんて、贅沢です、と小さく呟いた。

その意味を詮索せずにカムカヌカは続けて口を開いた。

「じゃあ、きつかけだと言うのなら、夜無空ヤナカラを見に行ってみる？
一緒に、探してあげる、」

手の汗を感じながら、カムカヌカは慌てて付け足した。

「迷惑かい」

どぎまぎするカムカヌカをぱっと見上げ、少年は嬉しそうに微笑んで「いいえ」と言った。

そして手にしていた星線香を一本差し出した。

「あげます、星線香が無いと帰れなくなってしまうから・・・」

「有難う、」

カムカヌカは星線香を受け取って、ポケットに入れた。

一瞬触れた少年の手の異常な冷たさと、ちら、と自分を見た哀れむような彼の眼差しになにか恐ろしい妄想を抱き始めている自分があった。

それでも気付かないふりをした。

――僕は何処にも帰らない

僕の帰りたい場所など命を燃やしてみたところで

この次元の何処にも在りはしないのだから。

カムカヌ力はポケットの中の星線香を粉々に折り、謎の少年と連れ
立って、

メルキウロス
銀十路へと歩き出した。

底の見えない不安と、初めて味わうふつつと沸き上がる希望が同居した、

何処か気味の悪い心持ちに対する不安に静かに蓋をして。

すっかり日が暮れた銀十路は、メルキウロス 明紫と蜜柑色の風船球で幻想郷と化
していた。

星線香に灯った緑色の柔らかな光が、点々と人々の位置を強調する。
広場から街じゅうへ伸びる四本の大通りはそれらで揺らめき、吐く
息も白いというのに、守二四ではなく我令暖スニヨンの熱夜を連想させた。

「ネイン」と名乗ったこの謎の世勉ゼエベンの少年は三本もの星線香を揺らし、
静かに俯いていた。

二人はとりあえず大剣の真下の台の緩階段ステエチに腰掛けていた。

（もう花のこと、いいのかな、）

カムカヌ力は横目に、星線香をただ見つめ続けるネインを見て、決心したように口を開いた。

「舟、」

「えっ？」 ネインは敏感に目を上げた。

「言つたら、先刻。」 カムカヌカはネインの反応の良さに驚き、動揺しながら続けた。

「舟つて如何いう事、いつたいこの街の何処に来るの」

「^{プリズム}光彩を囲う銀闇の刻です、とっても巨きな舟！
輪廻の線です、何時^{いつ}までも続く終曲の旅に出ます。
今夜、です、」

弾かれた様に立ち上がり、空を見上げたネインは、不気味なほどうつとりとした表情を浮かべてそう言った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「月を廻るんです、リュヌの天舟^{そらぶね}」

「ぼく、如何しても乗らなければ」

本物だ、カムカヌカは未知なる混沌^{カオス}へ足を踏み入れんとするこの現状に、

ただただ鼓動を高鳴らせるばかりだった。

ネインの黒い瞳が、静かに哀しみに満ちていた。

- - - - - ヤナカラ 夜無空は魂を失くす日だと云う。

この世界、緑刻ラ・ヴーとそれを周遊する天体、冥月リュヌ。
そして全てを照らす絶対のひかり、盟天塔ソレスト・ソレユ。
この三つの天体の動きと反射によって、緑刻ラ・ヴーのこの街では一年に一度、

決まって闇の無い夜が訪れる。

白夜だ。

これが夜無空ヤナカラの科学的でつまらないまことの正体である。
しかし、そんな解明がなされる以前から、夜無空ヤナカラに纏わる神話のよう
なものが存在した。

夜無空ヤナカラは魂を失くす日だと云う。

星線香無しで白夜を徘徊すれば、命灯ユエを目下感知出来ぬ魔物に引
摺まれ、

喰われるのだと云う。

星線香を手にしていれば、冥月リュヌの声が届き、もっとも強力な命灯ユエ、
緑ヒリチアンに護られ帰ることが出来るのだと云う。

この話を詳しく知る者はもういない。
しかし伝統だけは脈々と続いていた。

ここではない、何処かへ……

そう求めるカムカヌカは、勿論この逸話を心の底から信じていた。臆病なカムカヌカにとって、星線香無しでこの夜を向かうのは初めてのことだった。

別に魂を失うのが怖かったわけではない。

ただ、皆と同じことがしたかったただだった。

でも、今年は違う。

何かが違う。いや、何もかも違うのかもしれない。

疎ましい自己と他とを否定し、すべて投げ捨ててここから発ちたい。

カムカヌカは心にずっと暖めていた言葉を、ついに口にした。

「俺も舟に、乗れる、？」

無言で夜無空ヤナカラの人波をふらつきたしばらく、突然立ち止まったカムカヌカから

これまた唐突に発せられた呪文にも似た言葉。

真後ろを歩いていたネインは、急に立ち止まったカムカヌカに追突し、

慌てて星線香が消灯していないか確認した。

カムカヌカはネインを振り向き、込められる限りの願望の念を注入して力強く言った。

「舟に、乗りたい」

その言葉にネインは少し困ったような表情をした。

しかし悟られまいとする様に、さつと笑顔を作って見せ、カムカヌカの手をとった。

風船球で蜜柑色に染められたネインは、じっとカムカヌカを見つめた。

その手は相も変わらず冷えていた。

人波は不思議と二人を避けて進んでゆく。

黙って応えを待つカムカヌカにネインは今にも泣き出しそうな顔で微笑み、何か言おうとして口を開いた。

その時だった。

「歌……」

二人は目を上げた。

心地の良い速度でゆったりと流れ来る。

如何やら大剣直下の台で歌っているらしい。

流れる人波に乗って、吸い寄せられるように、カムカヌカとネインも夜無空の中心部へと移動した。

銀十路には幾つもの星線香の灯りがゆらめき、まるで緑の大海原を予感させた。

カムカヌカとネインはだいぶ遠くから爪先立ちで歌手を見た。
台から垂れるほど長い鮮やかな真紅髪の女は、蝶細工の拡声器の前で両腕を広げ、

天を仰いで歌っていた。

頭頂から幾重にも上乘せされた白い刺繍布で顔は見えない。

ドレスのいたるところに縫いつけられている金属の飾りが、光を反

射して休むことなく輝いていた。
不気味な歌手は歌う。シンガア

ちかづいてみては はなれてゆく
つながってみては ほどけてゆく

つきをまわるるふねに
どうぞのせてください

みえないの
あるときしつたこたえ

はなれてもわかるの
あのとこのつみだけ

ゆめのなか あとかたもなく きえる

つめたいの あたしので
つきのふね どうぞ のせて

――――如何かしている、カムカヌカは冷静にそう思った。
ちらりと見えた歌手の眼は、シンガア 淡白闇の空の一点を見つめたまま、ま
ばたきもせずに黒い涙を流していた。
天に伸ばされた白くほっそりとした腕先が、やけに彼女の髪の色を強調していた。

（今年の夜無空はおかしい）
ヤナカラ

カムカヌカは歌手から目を逸らし、隣で化け物と対面したのかという程に怯え石化しているネインを向いた。
シンガア
その顔は恐怖より、憎悪をうつしていた。

（やっぱり、何か得体の知れない門が開いたのだ、）

得体の知れない少年、ネインのその曇りきった表情は気にも止めず、カムカヌカはただ静かに興奮するばかりだった。

氷の様に冷えきった、不思議な興奮だった。

二番目の歌詞と思いきや、繰り返しを歌い始めた歌手に視線を戻した瞬間。
シンガア

カムカヌカのごく背後に、誰かが立った――――――

「舟への権利を有するのならば、如何ぞこの病的な脳裏を以って
チケタ
拒絶と愛しみに欺瞞してみせるがいい。絶対的な自由を、僕は拒みはしない、」

「ヨル！」

謎の言葉を発した声主を振り向くカムカヌカより数段はやく、ネインが背面の人影に飛びついた。

「やっと来た、行きましょう、すぐに」

「まだだよ。勿体無いじゃないか、せつかくの夜無空ヤナカラなのに。
僕は緑刻ラ・ヴィへ降りたのも久々なんだ、」

「貴方が来たら終わりでしょう、ヨル」

ネインがとても懐くその人物は、カムカヌカより若干年上と見受けられる、少年だった。

発光綿はっこうわたの様に白く透き通る肌に、少し伸びた髪は、幻鳥・羅Ⅱシルヴに勝るとも劣らぬ美しい銀色をしていた。

右目にはなにかの紋章が彫り込まれた金細工の眼帯をしていたが、空気に触れる左の瞳は、燃える様な紅だった。

痩せた身体にきつちりとした臙脂色えんぢいろの軍服の様な上着コウトをびしっと着ている。

その頭には、上着コウトと同じ色の、海賊帽に似た煌びやかに金細工された、大きめの被り物が深めに乗っていた。

その整った顔立ち、普通では無い薄い色素、誰がどう見ても、文句無しの美少年だった。

・・・しかし、ただひとつ狂おかしい点があった。

それは立て続けに起こる不思議な出来事に希望を持ち、慣れや余裕さえ産まれ始めていたカムカヌカにも無関心ではられないものであった。

美少年は、人間らしきものを背負っていた。

如何なる肌も見えぬ程ぐりに巻かれた包帯は、その「人らしきものの」の輪郭さえ隠している。

死体とは思えぬそれを、彼はリュックでも背負うみたいに平然と

おぶっていた。

重みはあまり無い様にみえた。

「乗客、？」

ヨル、と呼ばれたその美少年はカムカヌカの穴を開ける様な視線に
気付き、包帯人間を背中から下ろしながら目を上げた。
綺麗な紅い瞳。闇が燃えている。

右目の眼帯の金細工が、細かく揺れて光を反射する。

じつと正面から見つめられると、精神が硬直し、肺が萎むのを感じ
た。

「カムカヌカです、ヨル。^{ビリチャン}緑賭し者です、」

ネインはカムカヌカを振り向き、紹介する仕草をした。

カムカヌカは、^{ビリチャン}緑賭し者^{ビリチャン}つて、何だろう、と考えるよりも、ヨルの
鋭い眼光に怯み、式・参歩下がった。

「ふーん」ヨルはつまらなさそうにじろじろとカムカヌカを見つめ、
ニヤッと笑った。

「変な名前」

ヨルは吐き捨てる様に言い、腕を組んだ。

ネインは黙って顔を逸らし、肩を小刻みに揺らした。恐らく笑
っている。

カムカヌカは微塵も気にしていない風を装い、ヨルに言った。

「・・・君が、月の舟の船長^{ギンダ}かい、」

「ああ、」

ヨルは短くそう応えた。

カムカヌカの言いたい事は全て解っているという瞳をして、すらりと立っている。

「沈んだ魂を、引っ掴む、

そして再び、永い永い旅に出るのだ、」

ヨルは自嘲の笑みを浮かべ、ほんの少しだけ辛そうにそう言った。

何か感情を押し殺している様な装いに、カムカヌカは気付いていた。ネインはヨルの腕にしがみついたまま、心配そうにヨルを見上げる。

しかしもう、何も考えたくなかった。

彼らの瞳を曇らせる不安定な何かが存在する意味や、深まる所の神髄や事情など、もう、そんなもの、何だって良い。

異次元への、脱出を――――！！！！

カムカヌカは意を決してその言葉を口にした。

「、俺を、月の舟に、乗せてくれ」

・・・少しの沈黙が流れた。

言ってしまったすぐ後に、急に二人の反応が恐く成り、カムカヌカを冷や汗がつつた。

あまりにも長く感じられるこの沈黙に耐えられなくなったカムカヌ力はゆつくりと身を振り、あの狂^{おか}しな歌^{シンガ}手を視界に捕らえる事に成功した。

夜無空の灯に星線香の緑色が浮かんで幻想的な広場では、相変わらず真紅髪^{ヤナカラ}の女が黒い涙を流して歌っていた。

なんとなくその涙^{ステエチ}が台から溢れるのを見ていたカムカヌ力は、歌^{シンガ}手の歌が八回目の繰返^{ルウフ}に入ったとき、声を発せぬ二人に再び向き合うべく、視線を戻した。

「夢映像^{ドラムチヨン}、負いて昂^{すばる}鳥^{どり}」

「 - - - - - 」

先刻は数間^{すんたいル}はなれていたヨルの顔が、鼻が擦るか擦らぬかの距離にあつた。

その整った顔も、綺麗な紅い瞳も、近くで観るには、刺激が強すぎる。

カムカヌ力は反射的に歩を引き、距離をとった。

「解る？月食の眠りに、濃闇^{ノクタンチジオ}夜を飛翔する昂^{すばる}鳥^{どり}が、何故、僕の意識を蝕むのか、」

「・・・解らない」

君^{オラワアド}の全言葉が、と喉まで出かかったがカムカヌ力はそれを飲み込む

事にした。

解る、僕にきいてという顔をしたネインが、ヨルの上着じウツを引っ張っている。

ヨルは詰め寄っていた身を引いて、薄く笑った。

「当然だね、」

然して邪魔に成らぬ前髪をわざとらしく手で払いながら、ヨルは肩で溜め息をついた。

白い息が空気に消える。

「解らないだろう、うん、

何故灯り無き窓辺に、招く白き手が見えるのか、

何故血を枯らし骨を剥き出しても尚、明日に輝く黄泉を求むのか、何故禁じられし術すべと共に封印された骨髓を捜し歩くのか、

ねえ、如何してなのだか、解らないだろう、カムカルナ、」

「カムカヌカ、」

間違いの訂正をしたのは、カムカヌカもネインも寸分の狂いも無く同時だった。

二人は目を合わせた後、ヨルの顔を見た。

ヨルは腕を組んだまま不機嫌な表情をして、カムカヌカを見、ネインをねめつけた。

「御免なさい、」小さく呟くと、ネインはヨルの死角の真後ろへと身を引いた。

その時突然、拍手が鳴り響いた。

歌手シンガアが終曲したらしく、辺りの人波がゆっくり蠢きだす。

ヨルは素早く後ろのネインの手を掴み、カムカヌカに囁いた。

「何処まで行く、」

「えっ、」

ヨルの急な早口に、カムカヌカは戸惑った。

ヨルは一瞬、台で深く頭を垂れる歌手に目をやった。
そして再び囁いた。

「舟に乗り、何処まで行くのかと、」

一層冷え込みが増したのを感じながら、カムカヌカは目を閉じ、考えた。

培った下らない自尊心と孤独、無意味な朝。
全てを捨てても、この世界を断てるなら。

どんな事がこの身に起ころうとも一向に構わない。

至って正常な精神を持て余している自分をもう抑えなくても良いと、
そう云われている様な気がする。

呼ばれている……

「何処までも、」

カムカヌカは静かに答えた。

自らに語りかける様な穏やかな口調だった。

「行ける限り、何処でも行く」

「帰るつもりは、」

ヨルが急ぐ如く即言する。

ネインは心配そうに上目遣いでヨルとカムカヌカを交互に見た。カムカヌカはポケットの粉状の星線香に触れ、意を決してヨルを見た。

「無い、帰らない――――絶対」

ヨルは浅く頷き、意味深に微笑んだ。

目深にかぶられた帽子の奥で、真紅の瞳は無表情だった。

「急ぎましょう、ヨル。ノクタンジョ濃闇夜に吞まれます、！」

ネインが声を上げた。ステエチ何かに怯えて左右を見回している。
ふ、と目をやった台からは歌手シンガアが消えていた。

「もう少し居よう、接触がある筈だ」

「駄目です！これ以上は憑かれます、さあ行きましょう、」

肩を竦ませながら忙しなく視線を走らせるネイン。
その手を握るヨルの視線も、人波を泳いでいた。
それは獲物を探す狩人ハンタの様に、鋭いものだった。

状況が解らないカムカヌカも何か有るのかと視線を動かしたその時

だった。

「見つけましたよ、^{カエラ}墮帝」

凜とした声が聴こえた。

ありとあらゆる雑音を縫って、脳に届いた反響する声。

ネインが息を飲んだ瞬間、その人はカムカヌカの真後ろに現れた。

それは先刻まで台に^{ステエチ}居た、あの不気味な^{シンガア}歌手だった。

カムカヌカが振り向くより早く、ヨルがその腕を引き寄せた。

余りの勢いに体勢を崩したカムカヌカは、ヨルが下に置いたままの
包帯人間の隣にしりもちをついた。

そんなものに近付きたくないカムカヌカは慌てて腰を上げる。

入れ替わる様に^{シンガア}歌手の前に立ったヨルは、背中でネインに言った。

「舟を呼ぶ、カムカヌカと^{テスタ}遺証を頼む」

ネインは跳ねる様に姿勢を正し大きく頷くと、右手でカムカヌカ、
左手に包帯人間を掴み、

唾を飲んだ。

^{シンガア}歌手の細く白い手が、ヨルの頬に触れかけた。

瞬間、光の風が三人を包んだ。

凄まじい光源力エネルギアを感じる。

歌手はヨルとの間に出現した光の壁に弾かれ、見えなくなった。

これだけの光なのに、夜無空ヤナカラの人々は一人としてこちらを向かなかった。

ああ、見えていないのだな、単純に自分達はいま、存在しないのかもしれない、興奮の裏側の冷めた観点で、カムカヌ力はそんな事を考えていた。

歌手シンガアが消えていった方向を凝視したまま、ヨルが言った。

「行くよ、」

ネインは「はい」と答え、目を閉じた。
ヨルはちらとカムカヌ力を見た。

「……別れを、カムカヌ力。
必要無き後悔を覚悟せよ、最期の忠告アウェイだよ、月は寒い、」

「良いから」

カムカヌカは念を押すと、目を閉じてみせた。

ヨルはその様子に目を細めると、黙って光の壁の向こうを睨んだ。
あの女が来たという事は・・・

「もう時間が無い、さようなら、^{ラ・ヴー}緑刻」

ヨルはそう小さく呟き、海賊帽を深くかぶり直した。
少しだけ、カムカヌカを羨ましく思う自分が憎かった。

「死んだ街へ、病んだ^{そひ}宇宙へ」

二、蟲籠

「死んだ街へ、病んだ^{そび}宇宙へ」

その瞬間、カムカヌカは弾かれた様に身が倒れるのを感じた。恐怖を覚え、途端、目を開くとそばにいたはずの二人がいない。

物凄い速さで背から落ちている事に気づいたカムカヌカは、何時下に叩き付けられるのかという事よりも、自らの後ろから遙か高みへ吸い込まれてゆくあの日の時の記憶画像に心を奪われていた。^{ロフト・メア}
今までの人生の、自分の記憶。

それらが白い光の粒となって、幾つも筋を創^{うつ}っては、天へと消えてゆく。

懐かしい沢山の大切な過去達。

けれども二度とは還って来ない幻の様なあたたかい過去がカムカヌカは大嫌いだ^{ストル}った。

物語の主役の様に記憶を失い、異次元を旅することを夢見た。

カムカヌカは再び眼を閉じると両腕を大きく広げ、祈った。

（僕の探す答えが、ある筈の明日が、もしもその手に凶器を持っていたとしても、

それらを待ち構える価値を、どうぞ月の舟に見出せます様、

カムカヌカは気付かないままでいたかった。

再び開かれた自分の蒼の瞳が、もはや期待よりも後悔の色を映し始めていることに、。

間もなく、カムカヌカは背から柔らかな漆黒の宇宙コスモに突っ込んでいった。

・・・どの位眠っていただろうか・・・。

カムカヌカは甘い香りに咽返り、がばりと身を起こした。

眩暈を感じ、額を抑えたカムカヌカの視界が、一瞬黒い点で覆われる。

眉根を寄せたまま重たい眼球をめぐらせ辺りを見回したカムカヌカは、目を見張った。

一面の花畑だった。

花畑が美しいものとは知ってはいたが、実際に見るのは初めてだった。

というのも、カムカヌカの住む星、緑刻は汚染化が進み、自然の植物はほとんどが死に絶えていたからである。

しかし、先刻迄の経緯を考えると、状況が状況なだけにカムカヌカを冷たい不安がよぎる。

（、、まさか、黄泉世界？）

ラカネル・アテリノア

顔がひきつりかけたその時、反響する無邪気な笑い声が耳をついた。カムカヌカは驚き、辺りを見回すと共に素早く立ち上がった。

何処にも人影はない……。

花畑は一面、真っ赤に上揃い、満ち満ちる鮮血の海を淀わせた。起立し、初めて天を仰いだカムカヌカは息を呑んだ。

例えるならばここは鳥籠だった。

美しく複雑な造形を成す籠目が遥か頭上迄閉じていた。

例えるならばというか、鳥籠でしか無い、カムカヌカは意味の無い訂正をしつつ、自分を囲う巨大な枠をひたすら見つめた。どうやら今いるのは中心部らしく、前後左右、等しく6、7間マイルはある。

非常識な鳥籠の上の方には、電線ドノマの様な黒紐が幾つも垂れており、

- - - - -

・・・多分、良くは見えないが、恐らくの域を脱せぬ推測だが・・・

- - - - -白骨が吊るされていた。

しかも如何考えても巨人だとしか思えない大きさであることが解つてしまい、如何にも背筋が寒くなった。

とりあえず目線を逸らし、枠の外を見た。

美しい青空。

入道雲が立ち昇り、自由な影をもたらしていた。

そんな青空には不釣り合いな天体が、自分を、鳥籠を挟んで浮かんでいるのが見えた。

向かって左手に赤い天体、右手に黒い天体。

(惑星、?)

カムカヌカは裾に付いていた幾つかの花刺を払い落とし、赤い天体を見ようと籠の左端へ動いた。

遠い、遠い場所でそれは浮かんでいる様に見えた。
呼ばれている、そんな気がした。

「月リュヌを求むか、海メエル アスランの夜明けよ」

突然の二重声コリテオにカムカヌカは危うく内臓を吐き出す所だった。
180度、回転していそうな胃に傷みを覚えたがなんとか持ち応えたカムカヌカは更にぎよつとした。
先刻迄誰も居なかった花畑で、カムカヌカは両腕をそれぞれ捉まれている。

濡れた様に黒い髪、金に光る悪戯っぽい瞳、身体はなんというか、実態無き者、とでも言うのだろうか、薄い青と緑に点滅しながら、中が透け、ゆらゆらしている。
人間ではないが、双子としか思えぬそっくりな姿形をした、幼い娘たちだった。

「其れは紅い月」

「あれは黒い太陽」

二人は左右を指差して重なる様に口々に云った。

「神デテオが住むのは呼び声の優璃音ユリオン、」

「巨大宇宙マクロコスモスのゴシツプを頂戴、」

「連なつて輪廻、連れてつて廃都、」

「立つ事不可なら、歩む事腐敗説、」

二人はカムカヌカの腕をよりきつく絞め、にじり寄った。

何か言おうと思うカムカヌカであったが、全ての事柄において疑問が生じている為、言葉が見付からない。

「貴方が食されし魂か、」

「皇帝^{シエラ}がお許しに成る筈も無い、」

「哀れ人よ、家路を失くす灯よ、」

「脳も脊髄も、二度とそこには還らない」

「そこ」で一斉にカムカヌカの身体を指した二人の言葉^{ワード}に何か真実味と恐怖を感じ、
渴いた喉から今に発声せんとした、その時だった。

「カムカヌカ！」

一面真紅だった花畑が突然黒く成り、空間を切り取ったかの様に鳥

籠の真ん中に、ヨルとネインが降り立った。

ヨルは相も変わらず、嫌な感じの包帯人間を背負っていた。

ネインの手を引いてずんずん近付いてくるヨルが、カムカヌカには子守最中の兄に見えた。

「……何が可笑しいんだ」

「いや、何も、」

腕の自由無き直立不動のカムカヌカが笑みを押し殺しているのを見て、ヨルが不機嫌そうに尋ねた。

世^{ゼエベン}勉の制服をきっちり着た小さなネインは、カムカヌカに纏わり付く双子からなるべく遠い位置で立ち止まり、不安そうな表情を浮かべている。

ヨルは、チラ、とカムカヌカを睨み、包帯人間を地に下ろして肩を払った。

そして無言で双子の首筋を乱暴に掴むと、そこいらに放り出した。まるでただの物を扱うかの如き手荒さだった。

「見るから、こう成った！」

投げた双子には目もくれず、あっけにとられたカムカヌカに、凄^{サイ}い剣幕でヨルが言った。

「………意味が解らない、」

「ドラマチック
ロウト・メア夢映像の記憶画像を見たらう！」

眼帯の金細工を揺らしてヨルが怒る。

カムカヌ力は少し考え、ここへ来るまでの経緯をなぞって、背から落ちた時の事に思い当たった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・見た」

「如何して見たんだ、駄目だと言ったろう！」

何故、僕がこんな場所へ来なくては成らないんだ！

薄気味悪くて最低な夜を刻む、血を濁したこいつらの巢なんかへ
「！」

ヨルはきつ、と後方の双子を睨んだ。

双子は目の色も変えずに黙って立ち上がった。

「見ては駄目、なんて聞いてないよ、」

「そんな訳はない、僕は、」

「・・・言ってます、ヨル・・・」

ついに背を向けて逆端へ逃げてゆくネインを見て、双子は愉快そうに笑った。

そんな双子をヨルは背後から容赦無く蹴り飛ばすと、包帯人間を背負い、カムカヌカを向いた。

「そうだな、出よう、……来なよカムカヌカ、あんまり長居すると蟲臭さが伝染る、」

ヨルは少し疲れた顔をしていたが、素早く身を翻し、ネインの方へ向かった。
カムカヌカはまた黙ったまま立ち上がった双子を見てから、ヨルを追った。

「行つては駄目、喰われて啼くだけ、」

「血と成り、骨と成る、でも違つ、」

「助けは来ない、」

「存在^{サイン}も、無い」

「五月蠅いな!」

再び振り返りヨルが怒鳴った。

ずり下がった包帯人間を背負いなおすヨルの後ろでネインが嫌悪感を丸出しにした顔をしている。

少し背間タイルを歩みたカムカヌカもヨルのすぐそばまで到達したときだった。

「死体それを戻せ、困る果てが見えよう、」

「証として持つならば許さぬ、戻せ」

双子は今度はヨルに詰め寄り出した。

だが、なんだろう、カムカヌカはこの双子の発言が、実は自分を守る為のものではないかと、うつすら思い始めていた。

少しずつ、距離を縮めてくる双子にヨルが仁王立ちでねめつける。

「近付くなよ、お前らは死神イデオ配下、幻想談の下僕、
天体団に追い詰められ、天球法議会に裁かれた者だ、
あんまり寄ると緑が伝染ヒリチアンる」

ヨルはもう1度、包帯人間を背負いなおした。

「緑がまだ、怖いヒリチアンか」

「我令暖ガレノンの森井戸モイドにお前を引きずり墮としてやろつか、」

双子は淡々と言った。

ヨルは余裕と言わんばかりに邪悪な笑みを浮かべて応えた。

「……………ユルバ夜葬おさの蝶フランジの長に花束と祝福を、」

「栄光無き死の舟に償いと敗因を、」

双子の応えに更に気を害したヨルは無理矢理に笑顔を作り、再びずかずかとネインに向かった。

急に腕を引かれたネインは遠心力で大きく回され、ヨルにつづいた。

カムカヌカはヨルと双子の対話の中で、幾つか理解できそうなものが有った様な気がしていた。

考中、もう一度左右の赤と黒の天体を見つめ、双子の方に目をやった。

しかし、双子が今迄居た場所に、二人の姿は無かった。

（そういえば、ネインは二人のことを“蟲”、と言っていたっけ、
）

カムカヌカはじゃあ鳥籠じゃなくて蟲籠だな、などどまたもやあまり意味の無い訂正をしつつ、
ヨルとネインに向かって歩き出した。

三、甲板

「カムカヌカあ早く来なよ、^{ダ・ルマスク・ノルエ}天球法議會に召還を騒がれてしまつ、」

ヨルの侵入によつて真つ黒の不気味な花畑になつてしまつた鳥――
――蟲籠に、苛立つた声が響き渡つた。

死の舟などと呼ばれてしまつた、月の舟の船長のヨルは、常にそば
におく怪しげな包帯人間を下ろし、腕を組んで、少し根暗で後ろ向
きな少年、カムカヌカを待っていた。

カムカヌカは物思いにふけていたが、はつと我に返り、少し遠く
から声掛けしたヨルへ歩く。

「最悪、^{ハルト}心臓提出及び、^{デソルサ}ここみたいな刑籠行き、何十年科せられ
るか、

たまつたもんじゃないぞ、果てには――ああ^{そらぶね}天舟の全否定が可決
されて……………」

ぶつくさ独り言を並べるヨルはそこまで喋り、今言わんとしている
事態を想像して顔を歪めた。

「そつだ…………全否定が可決されたら、」

「森井戸行き？」
モ二下

「しかも我令暖の、」
ガレノン

「言つな。」

先程の“蟲”という双子の話を思い出していたカムカヌカの台詞に、
タイル
間良く付け足したネインをヨルは素早く遮った。

うだるような暑さに成る我令暖。
ガレノン

その季節の森井戸という場所は、カムカヌカは知らないので、かな
モ二下
りの憶測ではあるが、それはそれは鬱蒼とした緑で溢れるような場
ヒリチヤン
所なのだろう。

しかし、何故それが怖い？

「嘘罪夜の処刑台なんかに来るから、そんな最低な言葉が闊歩する
ワアド
んだ、」
ランタンデオ

肩をすくめ、ヨルはやれやれと大袈裟に体言してみせた。
ジエスチ

栗色の髪の子、ネインはそれをみてくすくす笑っている。

「二度と僕の前で、あいつらのつまらない入れ知恵使つなよ、」

ヨルはカムカヌカをその紅い鋭く光る瞳で一瞥すると、足で地面を
ドン、と踏み鳴らした。

カム力ヌ力はヨルが地団駄を踏む程、怒っていると思ったのだがどうやら違つらしい。

その瞬間、黒かった花畑が、途端にもとの一面真紅に戻つたのだつた。

暖色なのに、何とも悪寒のする空気が停滞する絨毯である。

「不条理な、蜜蜂一ト飛行不能な血墓^{フロデヤ}か、」

たつぷりの毒つばさを含んで言い吐^すてたヨルは、フンと鼻を鳴らしてふいに手を伸ばした。

そのまま宙を掴むような仕草をしたヨルの指先が、チリチリと小さな雷^{いかづち}を纏^{まと}つて、紙でも破くかの如く空間を裂いてゆく。

ビリビリという裂ける音と共に、あつという間に空間に穴が開いた。しかしそれはどう見ても人ひとりがやっと通過できる程度。

「此処に入るの、」

まさか、という言葉を呑み込んで、カム力ヌ力は不満げな声を上げた。

狭き門を潜るのは嫌だ。

「電線^{ドノノマ}で吊るされたいなら別に良いけど、」

御好きな様に、とひらひら手を振るヨルは、あの包帯人間を適当に穴へ押し込み終わった所だつた。

ヨルの手荒さに再度、目を細めつつ、天を仰ぐまでも無い、吊るされた白骨が鮮明にカム力ヌ力の脳裏を支配していた。

「瑕疵への守護、妄想の咎、それが嘘罪夜」
ヴァルカ オブセシオ ランタンチオ

ヨルは静電気で踊る銀の髪を頬から払い、カムカヌカにそう告げ、
ネインに目合図した。
ウインカ フラスタ
そして楽しそうに跳間で空間の裂け目へ飛び込んで行った。

「ぼくも行きます、」

ネインがそそくさとヨルの後を追おうと、穴に近付いた。

「待つて、ネイン、」

カムカヌカはネインの肩を掴んで、穴の端から引き離すと素早く質問をした。

「先刻の双子は、何者？」

カムカヌカは出来るだけ優しい声で尋ねた。
ネインがきよろきよろしながらぼそぼそと応える。

「……蟲です、蝶々。……夜葬ユルバの、蝶、です……。」「

「夜葬^{ユルバ}?、」

ネインは黙って首を横に振った。

「・・・違う質問をしよう、森井^{モリノ}戸^ドって、何?」

早くこの場を離れたいネインは、焦った表情でそわそわし乍ら手先を遊ばせている。

「緑^{ヒリチヤン}の大海原です、月の舟が唯一、停泊出来ぬ港、生命^{イノチ}の息吹です、眩し過ぎます、、」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「じゃあヨルが背負っている、あれは、」

「急ぎましょう、ヨルが待っています、此処に居過ぎては標本に成る、」

ネインは抑揚の無い読みで口早にそう言い、電光石火で裂け目に逃げて行った。

カムカヌカは溜め息をつき、二度と来る事の無かろう異次元なこの空間を見納め、少し躊躇しつつも、裂け目に飛び込んで行った。籠の中には双子の不気味な笑い声が響いていた。黒い太陽が一層強く燃えていた。

一瞬、ほんの一瞬でカムカヌカはそこに居た。

空間の裂け目に入り、瞬きをする秒を挟んで、カムカヌカは立って
いた。

真白の床に真白の壁、天井。

それは神話に出てくる、半日の儚き生命を持つ、幻蟲・プヴェル・トロントの肌を想わせた。

ゆったりと精神を呪う病的な灯りは、眠りを誘う速度で点滅を繰り返し、棒立ちのままのカムカヌカを冷たく照らし出す。

ふと、視界の淵で動くものが見えた。
ネインだった。

彼は世勉ゼエベンの制服の一部であるベレエ帽の位置を直しつつ、カムカヌカから死角の通路へ滑る様に曲がって行った。
嫌われたかな、しかし他に行く当ても無い。

これから先はヨルに着いて行く他無いであろうカムカヌカは、少し

重い気持ちでネインの後を追った。

真白^{ペイトウ}の急な螺旋階段が続く。

ネインの昇り切った足音と共に、話し声が聞こえる。

カムカヌカは一步一步、色々な事を考え乍ら上っていた。

包帯人間、証、喰われる、死の舟、、、

ひとつの結論は持論として既に出来上がりつつあった。

夜無空^{ヤナカラ}の朝の記憶が曖昧で、脳が痛むのも、合点のいく、非常に気の利いた回答がある。

（確かめなくちゃ、）

確かめてそうだったとしても、もう自分は反抗したりしない。
来たかった世界には違いないのだから。

（此処には全てが有る、今迄の全ての“僕”は無いけれど、僕が望んだ“全て”が有るのだ、）

再び胸を膨らませたカムカヌカが螺旋階段の先に見たのは、広大な銀河だった。

見渡す限り、星、星、星。

点滅する真白^{ペイトウ}の甲板は向こう先が見えぬ程で、この舟の巨大さを物語る。

漆黒のビロウドに宝石箱をひっくり返した様な星々が瞬くなかで、

不規則に弧を描いて次々に消えてゆく星もまた多々存在した。
流星群だ。

なんと美しいのだろう。

「初めて見るだろう、ああして生命は沈み、いのち 違い空を壊るゆく鳥に
成るのだ、」

天を夢中で見上げていたカムカヌカは、背後からしただいぶ聞き慣
れた声に振り向いた。

そこは丁度、舟の正面だった。

振り向いたカムカヌカに瞳を落とす事無く、同じく天を見上げたま
まヨルが言った。

ビリヂヤン

「緑無き者なら、気が向いた僕がひつつかんでやるよ、」

そらふいね

舟よ、リュヌの天舟よ、退路は有さず、月を廻れ」

ヨルは満足気な笑みで、甲板の一番先に有る椅子に腰を下ろした。
ヨルの隣はネインが素早く陣取ったため、カムカヌカは仕方なく、
ヨル達と向かい合う位置の椅子に座った。

この椅子の先客（先刻からヨルが持ち運んでいる包帯人間）にあま
り近付きたくないカムカヌカは、なるべく離れて座っていた。

「お似合いだね、」

ヨルがくすくすと笑い乍ら首を傾げた。

「何が、」

「その画^え、だよ、きみと、其れの、」

包帯人間を指してヨルは笑った。

カムカヌカは少し気を悪くしたが、真正面から見られると、ヨルの瞳には畏縮してしまう。

まだ慣れない、冷たく美しい、ヨル。

ネインは椅子の縁に顎を乗せ、二人に背を向けて星を見ていた。

カムカヌカは気を取り直し、ヨルを見据えると、包帯人間を顎で指した。

「此れは、何、」

「特等機密」

用意していたかの様な間^{タイル}で、ヨルは即答した。

歯を見せて不自然な笑みを造るヨルに、これ以上聞いても無駄と見たカムカヌカは別の、おそらく答え易しと考うる問いを振ってみた。

「じゃあ、^{ダ・ルマस्क・ノルエ}天球法議会って、何」

「ええ、そこ知りたいの、」

大して驚いた風では無い声を出したヨルは、足を組み替えて続けた。

「ダ・ルマस्क・ノルエ天球法議会は最低な機関さ、何時いつだったか、リーベン・ローエ天体団に潰された事がある。集団による魔術師の攻撃よりもひどい、修復と処理作業にウイザド優李音ユリオンから地流孫迄かった。何回、ユルバ夜葬の蝶に黒髓を捕らわれたことか、今思い出して も許せない、カーチダンリ母至団離も規制された僕に、砂礫を血を枯らしても歩けと言った、酷いだろ、？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ヨルは一人で頷き、再び続けた。

「骨を剥き出した痛みが解るかい？」

「この舟は僕ダ・ルマस्क・ノルエの精神なんだ、防御は最大の攻撃だと証明する存在サインを天球法議会ルダの最高評議会に叩き突けてくれる！それなら未完の条令パだろうが、闇を欺瞞する下らない偶像ベベキも、何ひとつ恐怖の対象には成らないと、そう思わないか、カムカヌカ、」

ヨルの早口にカムカヌカの頭は真つ白だった。

同時に深く後悔と反省をしていた。

知らぬ言葉の意味を知りたかったのに、彼の口からはそれ以上に新テ言葉が淹の様に溢れ出て来たからだ。

聞いてるのかと問いながらもまだまだ弾丸の様に話すヨルに、カム
カヌカは気の無い適当な相槌を打って天を見上げた。

星は相変わらず、不規則に沈んで行った。

赤や蒼や紫の美しく尾を引く星々を見ると、つい先刻の夜無空ヤナカラ
の灯が、既にカムカヌカの中で懐かしい過去に昇華されている事を
思い知らされた。

ぶる、と身震いをするカムカヌカが、僅かな空気の冷え込みを感知
した、その時だった。

「此処、良いかしら、」

凜とした声。

この声には、聞き覚えがある。

振り返った三人の目に映るその人影は。

「……シンガア歌手………」

四、將軍

「此処、良いかしら、」

突如響いた綺麗な鈴の音の様な声、だけど、何処か攻撃的な声。
三人の視線が一斉にその声主に集中した。

近付いて来る音、この広い甲板で気配すらしなかった声主を見て、
思わずカムカヌ力は唾を呑んだ。

「……夜無空^{ヤナカラ}の……、歌手^{シンガア}……、」

前頭部分の大きな赤い薔薇細工から幾重にも頭部を覆う、細やかで
美しい刺繡^{レエス}布。

それは鼻の辺りまでを隠し、顔は良く見えないが、紅いルージユが
引かれた口元は微笑んでいる。

そこかしこに縫い付けられた金細工はきらきら揺れて、白いドレス
と真紅の長い髪を強調した。

そう、それは紛れも無い、夜無空ヤナカラ ステエチの台で歌っていた、歌手シンガアだった。近くで見ると、その細さ、白さ、冷たさを一気を感じる事が出来た。

先程、街を後にする際、歌手シンガアがヨル達に接触してきたのを、カムカヌカは思い出していた。

あの状況は、穏やかとは言えなかった筈だ。

少しの間、ヨルもネインも彼女も、まったく微動だにしなかった。みなヨルが何か言うのを待っていた。

ヨルは腕を組んだまま、じっとりと歌手シンガアを見つめるだけだった。

睨み合い、沈黙……。

星の流れる音が、小さいながらも耳に痛い。

ふと、カムカヌカは歌手シンガアが手にしている、黒いハンケチに気が付いた。

（ああ、そういえば、黒い涙を流していたっけ、）

ぼんやりと見つめるその視線に気付いて、沈黙を破り、歌手シンガアが口を開く。

「ああ、御免なさい、今夜のわたくしの涙の雫は、こんなにも黒く濁ってしまった、」

「如何して、」

自然に口について声を出してしまったカムカヌカは、直ぐに何かい
けない事をしてしまった様な気持ちに襲われた。

ヨルとネインの冷たい視線を無視し、彼女は回答した。

「信じられない、ワータンチオ淡闇夜なのに魂がひつつかまれてしまったの、
リーベン・ローエプリズムわたくしたち天体団は光彩に弾かれてしまうから、お役目も果た
せずに、

ヒリチヤン罪の無い緑が、また舟に喰われてしまうのだわ、」

彼女はわざとらしく、黒いハンケチを目に押し当てた。

その時、実に瞬間的に、銀河の星々を絵の具で塗り潰した如く、全
く別の景色が舟を包んだ。
舟が、停まった。

ワイテフト淡夕色に沈む太陽、飛蟲の鳴き声・・・

見渡す限り山と草原の、ガレン我令暖の夕暮れだった。

静寂に頬を照らす陽光は力無く、生暖かい風が、カムカヌカの肌を
撫でる。

舟の外には点滅光球ででかかと、ジバンデ・ラボ「東和夕焼港」と映し出され、
シンガアネインも物珍しそうに景色を見渡していた。

しかし、ヨルと歌手は、お互い目を逸らす事は無かった。

此処で降りてみたい、少し歩きたい、カムカヌカは状況に反し、心
を躍らせていた。

しかし僅かな停泊を終え、舟はゆつくりと滑り出す。
余韻を噛み締めた所だが、そんな隙も無いまま、また一瞬にして
世界は銀河に彩られた。

「・・・そういう事、」

港を抜けるのを待っていた様に、ヨルが静かに口を開いた。
腕組みをしたまま不適な笑みで、ゆつくりと立ち上がる。
シンガポ
歌手は黙ってヨルを見据えた。

リーベン・ローエ　ハッキング
「天体団自ら僕に侵入とは、徘徊する暇も無かったのかな、
バドルマギヤ
將軍」

「随分苦労しましたよ、墮帝、
カエラ
このリュヌの天舟、そらふね 実に良く出来ているわ。
ガニユ
位球ですら感知出来なかったもの、チテオ 神の慈愛よ」
ランランタ

バドルマギヤ
將軍と呼ばれた彼女は、嬉々として応対した。
まるでヨルの事を、好いているかの様に。

その後ろでネインは、怯えと言うより、憎悪を押し殺した表情をしていた。

「誉めてあげよう、バドルマギヤ
將軍、」

よくこの舟に近付けたものだ、天体団には呆れ返る。
黙って聖母マルダの床で眠っておれば良いものを、」

心の無い拍手をし乍らヨルは目を見開いて將軍にそう吐いた。
その台詞はどうやら癪に障ったらしい。

彼女は齒を見せたと思うと、胸の前で何かを渡す仕草をした。
刹那の出来事だったが、その動作は実に優雅で、優しさと慈悲に満ちていた。

何をしたのか咄嗟にはカムカヌカには理解出来なかったが、それは
攻撃であつた。
チルダ

彼女が優雅な動作をしたと思うやいなや、ぎらぎらと艶めくヨルの
眼帯目掛けて、光の矢が放たれた。

キン、

ヨルは避ける事もせず、円状の金細工を縫い付けた眼帯に、まとも
に矢を受けた。

眼帯には何か術が施されているのか、矢はヨルの脳を貫く事無く、光は行き場を失くして滞り、有り余る光原力^{エネルギー}は彼の被っている豪華な帽子を引き裂いて宙に散った。

眼帯を軽く擦って余裕の笑みを見せるヨルの紅い瞳は煌々と燃え上がる。

出会ってから初めてあらわになった銀の髪的全貌は、恐ろしく眩しいものだった。

あっけにとられたカムカヌカを他所に、ヨルは素早くネインと包帯人間を掴み、足元にいつの間にか開けた空間の裂け目へ消えていった。

咄嗟にネインがカムカヌカの手を取ったので、三人は再び裂け目による転送^{ワープ}へと廻舞^{ランド}していく事と成った。

五、個室

再び瞬きの秒を挟んで降りた此処は、恐らく舟内だった。

列車の様な長い長い通路の左右に、小窓を設けた客室が対称に並んでいる。

後ろを振り向いても、青白く点滅する長い通路が、ずうつと先まで延びていた。

まるで巨きな合わせ鏡の世界に迷行した予感を覚え、カムカヌカは生きた心地を失った。

「天罍を展開していたと、有り得無い、」

ヨルは包帯人間を背負い、通路を駆け出した。
ネインとカムカヌカも後を追って走り出す。

「あのひと・・・如何するつもりなのでしょう、」

ネインが走りながら不安な声を漏らす。

「奴等の狙いはひとつ、舟への攻撃・沈没、欲しい物を奪った末、僕を如何にも這い上がれぬ緑海へ潰す事、」

「ひとつじゃないじゃないですか！」

ネインが泣きそうな声で叫んだ。

ヨルは真正面のみを見て、齒を食い縛る。

「どんなに強力な殺意で緑を翳しても、僕は止まるつもりは無い、
リュヌラ・テテム・ダーガン ソウテロン月を越えて宙論天文台の幻想全をこの身に焼き尽くすは、
絶対に、」

あまりにも早口だったので、カムカヌカはヨルの言った言葉が、
ワアドほとんど聞き取れなかった。
ネインは頷き、ヨルの上着を握り締めた。
ユウト

「それに証なら既に手中にしている、僕らが空腹を弱る事は無いだ
ろっ」

走り乍らネインを見てヨルが言った。

ネインは少し俯くと、黙って走り続けた。

（空腹を弱る事は無い、・・・・・・証、か、）

カムカヌカは蟲籠の双子が証が如何の、と話していた記憶を辿って
いた。

それを考えたいのに、空腹を弱る事は無い、という言葉の意味が、
ワアド

脳を先走ってくる。

（まさか、この包帯人間を、）

荒々しくも、わりと自信の有る造り上げた例の持論に、衝撃の予測・。

カムカヌカはこれ以上考えると恐ろしく成る事を察知し、忘れようと努めた。

ヨルとネインが、敵だろうが味方だろうが、もうどうでも良い。

二人の向かう先に、ただ、着いてゆくだけだ。

左右の客室は中が垣間見える小窓がついており、時折、乗客と思われる黒い影が見えた。

扉には番号がふられており、数字の形で、やはりカムカヌカには見慣れぬ形状をしていた。

ひとりひとり背負っているにも関わらず、ヨルの足は速かった。

やがて見えてきた突き当りの個室に、三人は雪崩れる如く滑り込んでいった。

ヨルは早急に包帯人間を降ろすとぴしゃりと戸を閉め、膝をついた。ネインが心配そうに駆け寄る。

三人の中で肩で息をしているのはカムカヌカだけだった。

呼吸を整え乍ら個室を見回すと、再び悪寒がカムカヌカを襲った。

ごく狭いこの個室には、ゆっくり点滅する真白の天井から壁、床一面全てに、どす黒い赤で細かな模様が記されていた。
ペイトウ

模様というより、魔法陣ウィザ・ルタに近いかもしれない。

円陣や数式や、不可思議な図形、小さな文字の羅列。

カムカヌカにもすぐ解った。

これが血で描かれたものであること、。

頭痛ヘドエクがするこの空間でヨルが呟く。

「追憶の祝福を、呪うなら呪え、彷徨う天翔ける使徒よ、夜の、夜の追悼式を、

両の腕かいなで許しを諭すなら、偽岸華ガレイ・コタンで埋めてみせろ、、」

ヨルは唱える様に瞼を伏せた。

そのまま目を閉じてしまいそうだった。

膝をつき、息を潜めるヨルが、カムカヌカには気体の様に見えた。

何か此処には無い痛みに、必死に耐えているようにも見えた。

「境界を逆巻かれよ、天体団リーベン・ローエは貴方を殺す、」

凜とした声と共に、扉が勢い良く開いた。
ヨルは悲鳴をあげたネインを庇って後ろに跳ね退くと、左拳で力い
っぱい壁を叩いた。

ヴォン、

その瞬間、内臓に響く重たい電子音ウネッと同時に、全ての赤い模様から
激しい闇が溢れ出した。
どろどろ渦巻く闇は剣の切っ先かたちに容を変え、扉口に立つ女に、真っ
直ぐ突き刺さる。

「反撃は呼応するわ、！」
フリマ

一斉に注がれた闇の剣は弾かれ、扉から室内に入ってきた將軍バドルマギヤたしなが嗜
める様に叫んだ。

と、同時に何か緑色の筋が、ヨルの肩に命中した。
後方へ向かって鮮血が糸状に伸び、ヨルの瞳は静かに闇を燃やし始
める。

「ヨル！」

ネインが悲鳴をあげた。

「何て事を、^{ヒリちゃん}緑を放つなんて！」

ネインはヨルの身体を支え、怒りを露にして叫んだ。
カムカヌカは理解出来ぬこの状況を、ただただ胸を押さえて見るばかりでいた。

「殺す、と、宣言した筈です、」

僅かに刺繍布の隙間から見えた^{バドルマギヤ}將軍の瞳は、真紅。
ヨルと、同じ、目の色、、、。
カムカヌカは呼吸が荒くなるのを感じていた。

^{バドルマギヤ}將軍は眉ひとつ動かさず、^{ティチ}圧力と共に、室内へ進み入った。
ヨルは流血する肩を押さえ、ネインと包帯人間を背陣に、一步前へ出る。

「……………^{ヒリちゃん}緑、御礼に値するよ、^{ラン・リュムゼン}月団戦争を思い出す、ねえ、ア

ラン、」

「名を、呼ばないでくだる、カエラ墮帝」

バドルマギヤ
將軍は薄い布を翻らせて、ゆっくりヨルに接近した。
白く細い手が、ヨルの頬に伸ばされる。

「貴方は何故、デイル泥を胎動するの、みなも水面を漂う腐ったカアテン熱風に至るのよ、
敵は多いわ」

「カアテン熱風？

・・・・・・は、リーベン・ローエマリオネタ天体団の人形は相も変わらず僕には・・・」

ヨルは深く息を吐いた。

「理解出来ないね！」

「、！！！」

ヨルは頬ぎりぎりまで伸ばされた將軍の腕を払い除けた。
そして彼女の白く細い首を、血のべつとりと付着した手で、何の躊躇も無く、絞める。

ネインもカムカヌカも顔を引き攣らせて行く刻を見つめる他、成す術が無かった。

將軍は瞬きもせず、夜無空の夜の如く、一点に瞳孔を開けたまま、天井の向こうを仰ぐ。
やがてその紅い瞳から、黒い涙が零れはじめた。

ヨルは力を緩める事無く、親指で彼女の喉元に魔方陣を書き殴り、囁いた。

「舟は殺させない、天球法議會を屍で埋め尽くす事に成ろうとも、神が破壊的に緑を推奨しても、僕が存在を嘘罪夜に永久に封じられたとしても、」

「、舟は、舟は、死なせない、」

ヨルはより一層きつく首を握った。
將軍の喉に描いた血紋陣が、彼女の身体を腐食し始める。

乱雑に描かれた陣から上へ下へと呪われた文字が溢れて、蟲の様に蠢き、這いずり回った。

「哀れな夜よ……自ら太陽^{スウ}を拒絶するとは……………」

黒い涙を流したまま、途切れ途切れに將軍^{バドルマギヤ}が呻いた。
ヨルは鼻で笑うと、足元に再び転送^{ワアテ}を創った。

二人はそのまま穴へ落ちて行き、個室には静寂と固まったままのネインとカムカヌカが残された。

突然の無音が、鼓膜を、心臓^{ハルト}を、眼球を、いっぺんに痛ませて、しばらく瞬きすらも、カムカヌカの脳から消し去るところだった -
-
-
-
-
-
-

六、対話

「ヨル!!」

我に返ったネインは塞がってしまった床に這い蹲^{つくば}って、必死に叫んだ。

カムカヌカは未だ呆然と立ち尽くしていた。
心臓^{ハルト}が狂った様に早鐘を打つ。

ヨルと、^{バドルマギヤ}將軍の關係はいまいち解らない。
だが、非常に嫌な事態なのは目の前のネインが物語っていた。

訳も解らぬ冷や汗を感じるカムカヌカは、突然の舟を揺らす大音響と、窓の外の銀河に広がる光の衝突に反応した。

「ネイン、上だ!」

泣きじゃくるネインの腕を掴んで、カムカヌカは個室を出かけた。
ふと思い出し、カムカヌカは投げ出されたままの包帯人間を振り向
いた。

ネインが小刻みに頷く。

カムカヌカは溜め息をつき、包帯人間を背負うと、再び長い通路を
駆け出した。

「ヨルは、^{リーベン・ローエ シエラ}天体団の皇帝だったんです、」

険しい顔つきで走るカムカヌカに、ネインが鼻をすり乍ら呟いた。
包帯人間に全く重さを感じない事に気を取られていたカムカヌカは、
危うくネインの言葉^{ワアド}を聞き逃すところだった。

「なんだって、？」

カムカヌカは自分だけ色々と蚊帳の外な事にいい加減苛々していた
為、眉根にしわを寄せて尋ねた。

ネインは少し躊躇^{ためら}って、唾を呑み込んだ。

「ヨルは、叛乱を行ったんです、皇帝なのに、天体団を、潰すと」
チャッチ

「とんだ皇帝だな、」
シエラ

最初からろくな奴には見えてなかったけど、とカムカヌカは言いかけて、喉の奥に仕舞い込んだ。
ネインが瞳いっぱい涙を溜め、泣き出したいのを堪えていたからだ。

ヨルの事が心配で堪らないのだろう、駆ける脚も早まっている。

「、ちゃんと理由があります、ヨルは、優しいから、だから、、」

ゼエベン
世勉の制服の袖でぐい、と涙を拭くと、ネインは悲しそうに続けた。

「天体団も天球法議会も、何ひとつ解っていません、何ひとつ・・
ヨルだけが、正しいのです、今はこの舟に乗って耐えるしかない
と、僕は無力だけど、傍にいたいのです、いつか必ずヨルの助けに
なれるから、、」

カムカヌカは齒を食い縛るネインを見て、今のが出会ってから一番
解り易い返答だったな、等と如何でも良い事を考えていた。

カムカヌカは真実を求めていた。

それはとても切実で、急を要するもの。

初めて触れているこの包帯人間もそうだ、温もりも、心臓ハルトの鼓動も、脈も、有る。

でも、命灯ユエは感じられなかった。
これは抜け殻、死んで、いる、。

此の儘ぼんやりと彼らの側についているわけには、もう行かないのだと本能が訴えている。

「、、君達は、この舟で、一体何をしているんだ、何に耐えているんだ、何の為の天舟そらふねだ、！」

カムカヌカは強い力でネインの弱々しい肩を掴み、乱暴に壁に押し付けた。

ネインは細い肩を驚きで震わせ、濡れた黒い瞳で真っ直ぐカムカヌカを見上げていた。

すが縫う様な目をしている自分が憎い。

だけど無力なのは自分の方だ、この銀河では目の前の小さな少年より、自分の方が遥かに無知なのだ。

虚しさで喉を痛めるカムカヌカに、ネインが何か言おうと口を開い

たその時だった。

薄暗かった通路に左右の客室から、一斉に金極光^{ゴホルト}が差し込んだ。

「港です、」

二人は、甲板への螺旋階段に辿り着き、一気に駆け登り乍らネインが焦った。

正直、いくら重さを感じないと言っても、やはり息切れのカムカヌカは、ネインより遅れて甲板に踊り出た。

甲板の人影はひとつだった。

七、金炎

甲板の人影はひとつだった。

こちらに背を向けて立っている、ヨル、ひとり。
ネインは仁王立ちで微動だにしないヨルに勢い良く駆け寄ると、悲鳴を上げた。

「ヒリチヤン ヒリチヤン緑を、ヒリチヤン緑を避けなかったのですか、」

ヨルの足元には濃緑の液溜りが広がっていた。
動揺を隠せないネインには目もくれず、ヨルは正面に散らばった大

量の紅い花卉はなびりを睨み付けていた。
カムカヌカは包帯人間を背から剥がしつつ、あれが將軍バドルマギヤなのだと理解した。

つい、と、ヨルが視線に気付き、カムカヌカを振り向いた。
冷たい、冷たい瞳だった。

無表情のヨルの輪郭を、“金天郷港”ギ・ルシエン・ラボと点滅光球の示す、此の世界の妖艶な金炎ゴレが、ひどく退廃的な仮面ベルソナに映し出していた。
金を跳ね返す緩やかな銀髪は神々しく、眼帯の金細工がきらきらと光を反射して眩しい。

良く見るとヨルの脇腹は激しく抉えぐられており、臍脂色えんぢいろの上着コウトが血を吸って、太ももに向かう濃い染みを創っていた。

絶句しているカムカヌカと目が合うと、ヨルは笑みを浮かべた。

ヨルの紅い瞳が、カムカヌカの影を踏んだ。

背筋に誰かが触れた様なぞわりとする感覚に襲われ、硬直する。

ヨルが、恐い、。

「・・・・・・・・」

無言で近付いてくるヨルにカムカヌカは恐怖を覚え、歩みを退く。
緑の足跡を遺し直進するヨルを、ネインも黙って見つめた。
金天郷の黄金虫が、金粉を撒いて舟上を飛行している。
ヨルは虫を避ける事をせずに、真っ直ぐカムカヌカと包帯人間の前
に向かった。

お互いの瞳孔が見える程、接近したヨルは、身を振り小さく咽た。
指の隙間から、緑の液状が滴り落ちる。
すっかり青ざめたネインは手で口を押さえ、カムカヌカは息を呑
んだ。

「・・・崩壊する、かつての皇帝は現・月の舟、天体団は冥月を夜か
ら奪う最後の砦とは、神の下した最終宣告が此れか、」

虚ろな目でそう吐いたヨルは、上着の袖でぐい、と唇を拭くと、カ
ムカヌカを脇に押し退けて包帯人間を見下ろした。
走り寄ってきたネインと共に、ヨルが胸元から刃を取り出すのを見
たカムカヌカは、思わず声を発した。

「刺すの、その人は息をして無いけれど、還って来るものが在るんじゃないのか、」

自分でも驚く、言い草だった。

「同然さ、魂は僕が引つ搦んだ、終曲の旅を承知したから、何処にも降りずに、巨大宇宙を永迷するのだ、」
マクロコスモス

ヨルは言葉^{ワード}を切り、カムカヌカを見た。

「帰らないと、言ったらう、」

カムカヌカは心臓^{ハルト}が搾られる様に痛むのを感じた。
足元が地震みたいに揺れ、ヨルの瞳が幾重にも重なって見えた。

再びこちらへ背を向けたヨルは、ぐったりと泥の如く舟のへりに寄りかかる包帯人間の目の高さに膝をついた。
ヨルは哀しげな笑みを浮かべ、刃を高く掲げた。

「やめろ、！、」

カムカヌカの擦れた静止の号をもともせず、ヨルは銀に光る刃を、
包帯人間の首根に振り下ろした。

何か太い筋が切れる音と共に、勢い良く血液が噴出してゆく。
それは囂々《ごうごう》と燃え滾る金炎の激光の中で、特別美しく
惜しみなく煌いた。

「、、う、」

全く同時にカムカヌカの首にも痛みが走った。

凄^{ヒリ}い勢いでカムカヌカの動脈から噴出したのは、鮮血では無く、^{ビリ}緑^{チャン}だっ^たた。

緑^{ビリ}が血の如く体内から溢れ、^{ゴレ}金炎の空に不気味なアーチを描く。

ヨルが刺した包帯人間の首元には、深々と刃^{ナル}が沈んでいた。
そこから、はらり、と包帯が腐れ落ちる。

そこにカムカヌカが見たのは自分自身の肉体だった。

「毒で充足された夜に、共犯者を、」

八、刃

「毒で充足された夜に、共犯者を、」

神々しく滾り^{たぎ}は静ま^たつてを繰り返す金炎^{コレ}の港、金天郷^{ギ・ルシエン}。
その黄金の灯りに照らされた美しい顔の色ひとつ変えず、再び緑^{ヒリデヤン}を
吐くヨルが言った。

「如何いう事なの、・・・・・・・・ヨル、」

カムカヌカは自分でも驚く程に冷静だった。

普通の人間である自分の体内から緑が^{ヒリちゃん}抜け出てゆくのを鮮明に感じていたが、特に動揺も起こらなかった。
首を押さえた右手の中の大量の緑を^{ヒリちゃん}見ても、鮮血を噴出す包帯で巻かれたた自分を見ても、もう、何も、感じなかった。

「^{ラ・テチム・ダーガン}宙論天文台への証が要る、君の肉体は犠牲、
^{アワイ}忘却を恐れぬカムカヌカよ、忠告を逃した脳に、^{ヒリちゃん}緑を格納せしめ
んとは、」

ヨルはそう応え、意味深に微笑んで見せた。
^{ゴレ}金炎の光の中に包まれたこの舟で、ヨルだけが銀に鈍く^{キルエ}照還して
いた。

ネインは黙りこくったまま、包帯の取れた肉体を嫌悪の眼で観察している。

「逆光を飲み込む薄闇に、逆境を吐き出す白昼夢よ、死んだ街にも
病んだ空にも、

肉片が遺るなかれ、迷う事に迷え、」

聞き覚えの有る言葉^{ワアド}だった気がした。
遠い目をしたヨルが、本当に小さな声で独り言の様に言った。

何かに侵されているとしか思えぬヨルに、カムカヌカはそつと近付いた。
膝を折り自分を見上げるヨルが、なんだかとても哀しい存在に見えた。

勢いが収まりつつあるとはいえ、どくどくと自分から溢れ続ける緑ベリチャンが、ひどく冷たく背をつたう。

「失くすものなど何も無い、何も、」

ヨルはカムカヌカを見て目を細めると、抉えくれた脇腹を押さえ乍らゆつくりと立ち上がった。

二人はお互いをじつと見つめた。
腹の底を探る様に、動揺を映さぬ様に、哀れむ様に、だが、無感情に。

数歩離れたネインの緊張が伝わってくる。
祈る様な眼差しを向けるネインを他所よそに、やがてヨルは斜め後ろのカムカヌカの肉体の首元から刃ナルフを引き抜いた。
同時に倍近く出血した肉体を巻く包帯は、白色ホルウの面積を見る見るうちに減らしてゆく。

首根に再び激痛を感じたカムカヌカは奥歯を噛み締めた。
流るる緑ベリチャンが青青しくて、何故かそれが、心を安定させた。

「希望^{レエサ}は叶ったかい、カムカヌカ」

ヨルは引き抜いた刃^{ナルフ}でカムカヌカの心臓^{ハルト}を真っ直ぐに指し示した。
金炎^{コレ}が渦巻く港の黄金虫^{オーマ}が二人の頬をかすめて飛翔^{ナルフ}する。
ヨルは辛そうにカムカヌカの薄っぺらな上着^{コウト}へ、刃^{ナルフ}の先端を押し当てた。

「平凡を呪おうが、君の明日はその手に必ず凶器を持っている、」

「……この舟は好きだ」

カムカヌカが応える。
静かな、静かな、精神状態。

「帰らないと云うのは嘘じゃない、刺すなら刺せよ、僕は緑だ、
ヒリちゃん」

カムカヌカは無表情でそう告げた。
沈んだ蒼い瞳に、ヨルを映し込んで。

やがてヨルは唇を噛み締め、刃を引いた。
ナルフ

そして力いっぱい、攻撃した。
チルダ

痛みは、無かった。

代わりに覚えの有る紗羅紗羅しゃらしゃらという耳障りな細音と、視界をいつぺんに塞ぐ白い刺繡布レースが靡くなびのを確認した。
そして、咽返る様なあの甘い香りが、カムカヌカの胸を襲った。

「眠れぬ夜よ、無意味な演技力よ、」

白い視界に無造作に爆発する、甘い香りを発して散舞する無数の花はな弁びん。

こちらに背を向けたその存在は、ヨルに対して攻撃的だった。

「貴方の様な躊躇ためらいの時刻ウーフに、取引カルエは満たせないわ、」

「アラン、」

カムカヌカとヨルの間に現れたのは、リーベン・ローエバドルマギヤ天体団・將軍、
アラン・コリアンスだった。

九、訪問者

バドルマギヤ
將軍アラン、その人は、カムカヌカをヴァルカ守護した。

ヨルの振り下ろした刃をカムカヌカの代わりにその胸元に受け、傷口から舞い散る甘く紅い花弁は、はなびら舟の外へ飛ばされていった。困惑するカムカヌカの視界をアランの長い髪が遮っている。

アランは右腕の肘から先を失っていた。
恐らく、先の戦闘で甲板に落ちていた花弁が、はなびらそれだったのだろう。

ビリチャン
「緑を傷憑く事は、わたくしたちは許しません、」

カムカヌカを庇い立ちはだかるアランが、ヨルにきつぱりと言いつつ放った。
強い口調だった。

「笑わせる、お前らも緑には拒絶されよう、」

胸元に刺さる柄を握ったまま、近距離で睨めるヨルが馬鹿にした声で囁いた。

八花の様に舞う花弁だけが、純粹にこの場に存在した。

「そういう高飛車な態度が僕は、大嫌いなんだ、
畏怖するものは、素直に、恐れたら良い、！！」

ヨルは皇帝を連想させる圧力でそう叫んだ。
それでも冷たい表情のままアランは無数の金細工を鳴らし、ヨルの腹部を真っ直ぐに蹴り飛ばした。

「、！ぐっ、っ」

負傷している脇腹にアランの蹴りを食らったヨルは、痛みを噛み潰して踏み止まる^{とど}。

足技と同時に、アランは胸元の刃^{ナルフ}を自ら強引に引き抜くと、ヨルの後方で縮み上がっているネインに向け、高速で攻撃^{デルダ}した。

刃^{ナルフ}は何か魔法をかけられたのか、光を纏い、空を裂いた。

咄嗟^{ウァルカ}に守護出来ず、ヨルを掠めた光弾刃^{カス}は、硬直したままのネイン^{ゼエベン}の世勉のブレエ帽を粉々にした。

同時に初めてあらわに成ったネインの長い巻栗毛が、金炎^{ゴレ}に光り輝いた。

息つく暇も無くヨルが走った。

ぼたぼたと赤黒い血液を淋漓させるヨルは身を低くしてアランに近付くと、光彩^{プリズム}を放つ。

鮮やかな虹。

とても激しい毒で構成された光だった。

まともに受けたアランが舟外に吹き飛んで行った瞬間、一面が濃紺の銀河に呑み込まれた。

舟が港を発^でたのだ――

静寂が、耳鳴りを呼んだ。

真白^{ペイトウ}の甲板は何事も無かったかの様に不気味に静まり返り、眠たくなる速度で点滅を繰り返していた。

カムカヌカはしばらく放心状態だった。

走ってもいないのに、呼吸は浅く、じっとりと汗をかいている。

甲板には立ち竦^{すく}むカムカヌカと、しゃがみ込んだネイン、両膝をつき肩で息をするヨルと、血溜りに動かぬ、肉体が存在していた。

「突然の乗舟、まことにご無礼^{つかまつ}を仕ります、」

聞いた事の無い声が甲板に響き渡った。

甲板の空間が奇妙に歪み、その刹那で三人の訪問者が姿を現す。背格好はそれぞれ異なっていたが、皆同じ更衣を纏まとっていた。深い蒼の長上着ロウフは頭頂から爪先迄を隠し、肌は一切見えなかった。

その中の一人がヨルの前に進み出る。

「事態は把握しております、船長・ユイルアロウ殿、」
ギフダ

「……その名で呼ぶな……舟を、保てなく成る、」

ごぼごぼと咳をし乍らヨルが呻いた。
面倒くさそうに長上着ロウフの男を見上げ、目を細める。
そんな酷く手負いのヨルを労わりもせず、男は続けた。

「今日の戦闘により此れ以上の舟転ツオルは不可能と判断し、現時刻を以つて、月の舟は我々、
ダ・ルマスケ・ノルエ
天球法議会の監視下に置く事が可決されました。」

ダ・ルマस्क・ノルエ
・・・天球法議會。

ヨルの口から何度も聞いた機関だった。

「ふん、何時だって下らない事を議題にするんだね、」

ヨルが皮肉たつぷりに吐いた。

「噛み付かないで下さい、ユイルアロウ、貴方は負傷しています。
此の儘では舟もろとも嘘罪夜行きですよ」
まま ランタンチオ

「・・・はいはい・・・だが君達は僕が噛み付くのを期待して要るの
だろう、?・・・」
ダ・ルマस्क・ノルエ

天球法議會の専属魔術師が直々に、しかも三名も其れだけを伝え
に来るものか、
ベガ・ウイザド

ヨルがにやりと笑みを浮かべる。

ロウラ
長上着の男も恐らくあの布の下で、不適に笑っているのだとカムカ
ヌ力は思った。

「、まあ、其れは又、別の話、
現在いまは血腥ちなまぐさ過ぎましよう、兎に角早急に、議會衛星サテライトへお越し戴
きます。」

結局ヨルの了承を得る事はせず、長上着ロウフの三人は甲板に散って行っ
た。

そして直ぐに、三方向で舟を覆う程の巨大な魔方陣ウイザ・ルタが展開され、銀
河を潰してゆく。

とりあえず胸を撫で下ろしたネインは、心配そくにヨルに走り寄っ
た。

それを見たカムカヌカも、反射的にヨルの側へ向かう。

「大丈夫ですか、ヨル、……………」

「……少し、疲れたかな、」

緑ヒリチャンと赤い血でどろどろのヨルが力無く応える。

ヨルは苦しそくに息をついて、側に来たカムカヌカを見上げた。

「カムカヌカ、君は、魂だ、強力な緑ヒリチャンだ、……僕には、触れられな

い、
カルエ
取引を望む事、天体団の黒髓を、払拭する、、忌々しい、儀式
なのだ、
」

カムカヌカは黙って頷いた。
勿論、意味など、解らなかった。

ヨルはネインの頬の傷を指で撫でた。

先程アランが投げた刃が、実は少し当たっていたようだ。
カムカヌカは気付いた。

此の栗色の髪の少女の、僅かな頬の擦り傷から、真紅の花弁が零れ
舞っている事に、。

間もなく三人の魔術師が展開した魔方陣が完成し、月の舟は議會衛
星へ向けて転送を開始した。

十、議会衛星

本日の天球法議会は欠員が目立っていた。
ダ・ルマスク・ノルエ

全宇宙でこの最高議会に名を連ねるは十九名。

普段から全員が揃う事はまず無いのだが、この日は何時に無く会議室が広い。

ダ・ルマスク・ノルエ マオフエイ
天球法議会議長・望飛は、何時もの様に腕組みをして議員を待っていた。
ド・フューラスタ

天在軍で軍人をしていた事のある彼はがたいも良く、頭も切れる男だ。

彼の耳に、先刻入ってきた情報・・・其れは月の舟に関する事だった。

今こちらへ舟が向かっているという。
マオフエイ
その事を思い出し、議長・望飛は堂々と頭を抱えた。

縦42間、タイル横17間の巨大で頑丈な扉は開け放たれ、開始予定時刻を待っていた。

顔が映る程に磨き上げられた窓の無い薄暗い蒼色の部屋で、既に着席している帝達は声を潜めて噂する。

「聴かれたか、ユイルアロウの中継、
ルオツ」

「嗚呼、勿論。將軍と対峙したと」
バドルマギヤ

「しかしあの舟は位球ガニユすら欺くそうだな、条例違反では無いのかね？」

「・・・呪われた運命テネイスの元に自ら鎮座する旨、奴も馬鹿ぢや有りませんよ、」

「！、之は、皇帝シエラクタニス、本日は欠席では、？」

ユイルアロウ・・・ヨルを若干擁護する発言をした若い声。
皇帝シエラクタニスと呼ばれた彼は、闇に紛れ、空席だったはずの椅子に影の様に現れた。

「急な報せしひで明日、ユイルアロウが出席為さると聴きつけ、飛んできたのです。」

そしたら意外に早く着いてしましましてね、」

立派な帽子の深い陰りによって顔は見得ないが、非常に若い声の皇帝エラクタニスは淡々とそう言って王着の装飾品を揺らした。

社交辞令の挨拶もそこそこ、先に着席していた議員らが噂話に戻っていく中で、皇帝シエラクタニスは数年前に別れたきりのヨルの事を考えていた。

（墮帝カエラユイルアロウ、盟天塔ソレスト・ソレユはあの日から濁崩ヴァイトして居る・・・、）

それから数人が駆け込み、やがて扉が重々しく閉め切らると欠員の多い会議は開始された。

カムカヌカは清潔な部屋に居た。

窓からは爽やかな空気が流れ込み、暖かい風が頬を撫でた。

出窓の外には庭師に整備された美しい花壇が広がっており、空は蒼かった。

そして、部屋も、蒼かった。

椅子も、寝台も、天井も、容器も、何もかも、蒼かった。

カムカヌカは部屋を見回し、溜め息を吐いた。

首には（ちゃんと）白い包帯が巻かれている。

痛みが無いので包帯をほどいてみたカムカヌカは、再び肩を落とした。

ヨルに刺され、おぞましい量の緑ニロキヤンが溢れていた傷口は、もうすっかり塞がっていた。

カムカヌカは嫌でも、今の自己が魂魄こんぱくである事を思い知るしかない。得体の知れない喪失感に苛まれるカムカヌカは鏡から目を逸らし、横を見やった。

隣の寝台ではネインが眠っていた。

疲れきって寝息をたてる幼子の顔は、時を経てはいないが初めて会った時より少し痩身してみえた。

蒼い布団に栗色の髪は目立ち、改めてネインが少女だった事にはつとめる。

そしてその、色を失った頬に貼られた療布ガアゼが目に残った。

彼女の傷口からも零れた花弁はなびら・・・。

ネインの中身は、あの、將軍アランと同じ、なの、か、？

カムカヌカは窓の外を向き、別室に連れて行かれたヨルの事を考えた。

月の舟は一瞬でこの天球法議会の本陣、議會衛星サテライトへ到着した。

議會衛星港へ舟を着け、カムカヌカ一行は緑刻を発してから初めて降舟した。

傷が酷いから集中治療室へ、と魔術師たちに引つ張られ、文句を言い乍らも抵抗する力も失っているヨルは、緑色と血の赤でぐちゃぐちゃのまま、人形みたいに抱えられて遠くへ運ばれて行った。

確かに凄い大怪我えぐだった。

人間が腹の抉れ居る様は、見ているこちらにも痛みを感じる。つて、俺も首、刺されたけど、。

だがカムカヌカは恨んだりしていない。

ヨルを責める気持ちは全く無かった。

ただ何故、こんな事に成っているのか、正しい真実だけが欲しかった。

た。

理解出来ぬ儘^{まま}、先刻の戦闘の様な目には、もう出会いたく無い。
カムカヌカには解らない事が多過ぎるのだ。

だいたいヨルがあんなにずたずたにした自分の肉体は何処に行ったのか。

カムカヌカは窓の外の明るい世界を覗いた。

もう肉体は諦めよう・・・などと考え乍らぼんやり飛翔する蜜蜂を眺めていた。

（、、！）

ふいにカムカヌカは油の匂いを感じ、目を上げた。
絵を描く^{えが}為の油の匂い。

リンシイド？

・・・いや、シツカチーフ？

ヴィ・エ^{たしな}
油絵を嗜むカムカヌカにとってそれはとてつもなく懐かしく、心地良い香りだった。

やがてカムカヌカは蜜に誘われる蜂の如く、匂いの先を求めて、ネ
インの眠る蒼い部屋を後にした。

十一、退出

そろりと、カムカヌカは寢台を降り、ネインを起こさぬよう抜き足差し足で部屋を出た。

閉扉時の消音に神経を巡らせ、一息ついてカムカヌカは辺りを伺った。

- - - - - 誰も居ない。

広い広い廊下が前方と左右に広がっている。

如何やら今居た部屋は通路の突き当たりにあるようだ。

カムカヌカは鼻をひくつかせ乍ら自分に頷くと、匂いの漂う方へ歩き出した。

ぴかぴかに深い蒼に輝く廊下は右手に幾つも扉が並び、左手は壁を規則的に曲線状に^{アーチ}くり貫いた風通しの良い造りに成っていた。

中庭と見られるその外には青々と若葉が茂り、カムカヌカが見た事の無い花で溢れている。

時折風に乗ってむんわりと甘い香りが胸を満たし、中央に僅かに見える豪華な噴水^{しぶき}からの飛沫も届く事があった。

歩けば歩くだけ等間隔に飾られた彫刻や絵画が静かにカムカヌカを出迎えてゆく。

(此処は樂園^{レイ}なのだ、)

カムカヌカは美しい美術品に目を細めて油の香りを追跡した。
通路の天井に描かれた星図デヤン ヤ・エロフと神神が、彷徨うカムカヌカを見詰めていた。

「もう良いつて、言ってるだろう、！」

ヨルは怒鳴った。

途端に眩暈が襲い、座り込む。

其れを見て怒鳴られた男は穏やかに話す。

「大人しくして下さい、貴方は血を流し過ぎています。舟がその灯火を鈍らせているのを、港係ラベルが訴えておりましたよ、」

「僕が大丈夫と言えば大丈夫なんだよ、全く、一体何時からそんなに世話焼きに成ったのだ小蓮シャオレン、」

ヨルは痛みで苛立ちを抑制された事に更に腹を立て、噛み付いた。

シャオレン
小蓮、と呼ばれた長身の男は宿める様に促した。

「血墓に迷われては冥月が悲しみますよ、我儘も大概に。」

「・・・天球法議會を百刻中に天獄へ突き出してくれよう、」

困った様に笑う小蓮の後方で、扉に斜に構えていたもう一人が口を割った。

「懐に風穴を開けられて何とする、弱り切ったブヴェル・トロンタ
よろしく、」

今のお前には天体団も価値を見出すまい、」

舟上に現れた時の長上着のまま、刺す様な口調で男は言った。
怒りを瞳に押し込んで小蓮越しに目を細めたヨルは、首を傾げた。

「・・・、小蓮、あいつ、誰？」

「ああ！初対面ですか、彼は貴方が議會にお越しにならなく成った
後に、専属魔術師へ入属した、五明です。」

「へえー・・・」

ヨルは興味無さそうな返事をして寝台を降りると、五明ウメイと紹介された男の前に立った。

腕組みして五明ウメイをじろじろ見詰めるヨルを前に、小蓮ショレンが挨拶を、と促すと、彼は長上着ロングの頭布フウドを捲まくって床に方膝をつき、深々と一礼した。

初めて顔を見せた五明ウメイは小蓮ショレンより若く、強く波立つ濃い黒の髪と緑の澄んだ瞳をしていた。

「冥月リユヌの天舟そらふねに乗せてやるよ、五明ウメイ、特等席だ、」

不適な笑みで紅い眼光をぎらつかせ、銀の髪を風も無いのにわざわざわと浮き上がらせたヨルを見て、小蓮ショレンはやれやれと小さく首を振った。

五明ウメイは無言で立ち上がり再び一礼すると、蒼い壁に吸い込まれて退出した。

常に目元を和ませている小蓮ショレンは息をつくと、肩で一括ひとくりにしている焦茶色の髪を手で払い声をかけた。

「彼には後で言うておきます、さあユイルアロウ殿、点滴ロキが未だですよ。」

薬品の詰まった袋をがさがさする小蓮シャオレンを見て、ヨルはしばし考え、にやりと笑った。

「緑ヒリチヤンが貴方に与える蝕撃ダムフェイスはそれはそれは恐ろしいものです。

吐く程に受けたのですから、この様な議会サテライト衛星の小さな集中治療室イトでは充分ではありません。

今迄に受胎した取引カルエの事も有りますし、一度、医癒合アリア・スエズへお出向きに成り、精密な検証を……」

小蓮シャオレンが点滴ロキの針を手に振り向いた時には、既にヨルはそこに居なかった。

優しかった小蓮シャオレンのこめかみに、小さく青筋が浮かんでいた。

十二、女王

懐かしい、油絵^{ヴィ・エ}の匂い・・・

何処かから漂ってくるその香りを追って、カムカヌカは議会議^{サテライト}衛^{サイコエ}星^エの宮殿をうろついていた。

油の匂いは意外に強いもので、中庭の花壇の甘い香りすら掻^かい潜^{くぐ}って鼻に届く。

カムカヌカは何度目かの足元のふらつきを感じ、一旦、壁にもたれて歩を休めた。

半日程前に、首を刺され体内の緑^{ヒリヂヤン}が多量に失われたカムカヌカは、胸から心臓^{ハルト}の鼓動が失われていた事に気付^{ハルト}き、肺を押さえた。

芯から息を吐き出して呼吸を整える。

そうしなければ何処までも今の自分の存在^{サイン}に疑問を抱き、這い上がれぬ深い深い後悔^{さいな}に苛^{さいな}まれてしまいうだったからだ。

眉^{ひそ}を顰^{ひそ}めたまま顔を上げたカムカヌカはその視線の先に、ついに開け放たれた一枚の扉を発見した。

油の匂いは如何やらそこからのものらしい。

カムカヌカは息を潜め、足音に気を配って、ゆっくりと扉との距離を詰めた。

途中にあった人の背丈ほどの彫刻に隠れ、また一息つく。

そつと首を伸ばし、部屋の中を覗くと、その中央で誰かが背を向けて座っていた。

腰まである真白^{ペイトウ}の髪は豊かで、複雑な髪飾りが幾つも頭脳^{いろこ}を彩っていた。

肌も服も白いその少女が向かっている白板^{カンバス}には、黒い何かが荒々しく描かれている。

あまりにも儚いその後ろ姿に、カムカヌ力は寒気を覚えた。

と、白板^{カンバス}の向こうの窓布^{ラインダ}が揺れたほんのその刹那、カムカヌ力の見ている目の前で、少女は消えた。

カムカヌ力は反射的に、部屋の中へ駆け込んでいた。

(、、、居ない、)

窓からの爽やかな通り風が髪を撫で、傾きかけた陽光が不気味さを募らせる。

部屋は殺風景で、此处^{サテライト}だけ議会衛星お得意の蒼基調では無く、壁も床も、真白^{ペイトウ}で有った。

カムカヌ力は部屋全体を伺う様にして白板^{カンバス}に近付いた。低い机の上には散らかった濃色の絵の具と、開けっ放しの油壺^{ウイ・ポ}が載っている。

カムカヌ力は描きかけの油絵^{ウイ・エ}を興味深そうに見つめた。

黒と紺で塗られている此れは、・・・・・・・・

「、蝶？」

カムカヌカは首を傾げて呟いた。

「それ以外に如何う観えると申す、」

突然振つて来た偉そうな声に、カムカヌカは飛び上がった。

白板カンバスの向こう側に白い脚を見つけ、声にならない声を呑み込んだカムカヌカは机に当たり、絵の具と油壺ヴィ・ボを派手にぶち撒けた上に尻餅をついた。

白板カンバスの陰から先程消えた少女が姿を現す。

白い身体からだは向こう側が透け、窓の外の青い空との対比コントラストが見事だった。

「、、キ、・・・・幽霊、、」

腰を抜かし唇を震わせるカムカヌカを見下ろし、少女が憤慨した。

「失礼な輩め、驚いたのは此方だ、勝手に部屋に侵った上に、幽霊などと、何処まで無礼を働く、阿呆が！」

カムカヌカと同年程の見た目の少女は、光り輝ける大きな金の瞳をしていた。

この眼には見覚えがある――

気の強そうな彼女は身体の透け浮きの点滅を繰り返す乍ら、ふ、と目を細めた。

「・・・お主、緑、か？」

カムカヌカは無言で頷くと、机に？まっつて立ち上がった。尻面を軽く払うと、ひとつ咳をしてから口を開いた。

「勝手に入って、悪かった・・・です。油絵の匂いがしたから、此処まで来ました、」

「……こんな場所で精神の有る緑に出遭うとはな、」

少し驚いた様子で、少女は金の瞳をみはった。

彼女の瞳は人間のものでは無い、黒い小さめの瞳孔は、横に一直線にのびていた。

少女はつまらなさそうに続けた。

「どうせ月の舟の客人だろう、？」

「はい、カムカヌカといいます、」

「魂魄のみとは云え、此処に居るだけお主は幸運だ。魂は直ぐに吞まれ、舟を燃やす糧と成る。」

カエラ
墮帝は冷血な壊鬼、誰も良く想っていない」

少女はふん、と鼻を鳴らし、落ちた絵の具を拾い出した。

カムカヌカも慌てて手を伸ばす。

（そういえばヨルを良く言っているのは今のところネインだけだな、）

カムカヌカは少しヨルが哀れに思えた。

どんな理由で今が在るのかは解らないから、それ以上の感情は持ち出せない。

「あの、貴女は、誰ですか、」

絵の具を拾い乍らカムカヌ力は少女に目をやった。

今まで居たその場所に、彼女は居なかった。

カムカヌ力は机に拾った絵の具を丁寧に載せ、呆然と立ち竦む。

また、消えた――――

窓布が風に揺れ、カタカタ音を立てた。

「済まない、陽の在る内は如何にも駄目なのだ、」

また急に声がして、少女は透け乍ら窓際に姿を現した。

豊かな白髪が揺れる風の中で、彼女はカムカヌ力を見据えた。

「わたしは夜葬の蝶の女王・アマカケルオボロノコハク、」

名乗った彼女からは近寄り難い、神気とでも呼ぶべき純粋な力が放たれていた。

（夜葬の蝶……、）

彼女の神々しさを肌に染み感じつつ、カムカヌカは瞬時にあの蟲籠の双子を思い出していた。

目を丸くするカムカヌカを見て、コハクは薄く笑ってみせた。

「、緑刻^{ラ・ヴァー}で生まれ育ったお主^{ぬし}に夜葬^{ユルバ}の蝶などと名乗っても解せぬまい。

我々、夜葬^{ユルバ}の蝶は陽光差す日中は姿形^{すがたかたち}を保つ事が不可能な存在。保つ、というと語弊^{ゴヒ}が有るな、昼間は存在^{ザイン}亡き者なのだ、そして月の煌く夜の間だけ、其の命が許されて居る、」

コハクは顔を曇らせ、透け浮きを繰り返す掌^{てのひら}に目を落とす。

「最も力の強いわたしですら、このざまなのだがな、」

不満そうに眉を顰^{しか}める彼女に、カムカヌカはあの双子の事を話そうと思った。

だが、話して良いものか否かの判断がカムカヌカには出来なかった。あの双子はたぶん、あそこに捕らえられているのだ。

「まあ、お主^{ぬし}には関係無い存在^{ザイン}なのだがな、
其れより何だ、油絵^{ウイ・エ}に興味^{サイン}が――――、」

彼女が白板^{カンバス}のもとに居るカムカヌカに近付いた時、足音が聞こえた。それはだんだんこちらに向かっている。廊下をひた走る静かな足音に二人は耳を澄まし、人影が部屋の前を通るのを待った。

開いている扉が此処にしか無い事はカムカヌカも知っていた。きつと息遣いを殺してこの部屋に飛び込んでくる。

ば、っ！

思っていた以上の速度で侵^{はい}つて来た人影が、既に部屋にカムカヌカ達が居るのを察知し、懐^{ふところ}から何かを構えた。

ほぼ同時に、カムカヌカの脇をコハクが飛ぶ様にすり抜け、両手を大きくかざし、相手の胸元に魔法を構えた。

ほんの、刹那の出来事だった。瞬きする間にカムカヌカの少し遠く、部屋の入り口で、コハクと侵入者が向かい合い、お互いの急所を狙ったまま睨みあっていた。

「げっ、っ、蟲、っ！……！」

「ユイルアロウ、！？」

「……ヨル、」

カムカヌカは無駄に緊張した胸を撫で下ろし、ヨルに対して少し恨みがましい怒りを覚えた。

十三、舟・蝶・議

ヨルは構えていた小型の銃ピスタを下げ、大きく息を吐いた。
夜葬ユルバの蝶フレイヤの女王コハクもそれに次いで腕の緊張を解く。
数歩下がったヨルが寝巻ジャモアを着ているのに気が付いたたカムカヌカは、
所帯染みた彼の様相が可笑しく思え、小さく吹き出した。
それを見逃さず鋭い眼光でヨルが睨みをきかせる。

「誰かと思えば、なんだカムカヌカ、こんな所で蟲と御喋りおしゃべとは、
趣味、悪いね、」

毒っぽくそう吐くヨルに、コハクが詰め寄った。

「お前が連行ヘアした哀れな緑ヒリチヤンだろう、もっと労わいたってやるべきだ、
相も変わフツキらず壊鬼フツキだな、ユイルアロウ」

「だゝから、寄るなつて、！蟲は寄り集まるから、嫌なんだ、」

ヨルはわざとらしく身を掀よじってコハクと距離をとった。
コハクは口を曲げ、片眉を吊り上げて怒りを抑制している。
金眼の瞳孔が横に大きく伸び縮みするのを見て、ヨルが面白そうに

続けた。

「此れ程に陽光が差すのに、良く在^いられるな、盟^{ソレスト・ソレユ}天塔は照らす者を
選べない、

全く、天球法議^{ダ・ルマस्क・ノルエ}会も蟲を温存せしめんとは、実に滑稽で浅はかだ、
緑^{ヒリチャイト}を勞われたと、？笑わせる、貪^{むさほ}る対称と診ているのは舟と蝶と
同じ事、一体どちらが如何異なると言うんだ、

議^{サイン}会に席が有るぶん、まあその何倍もだけれど、舟の方が価値有
る存在だと云えるね、」

馬鹿にしてやれやれと首を振るヨルにコハクは遂に我慢できなくな
り、反論しようと口を開いた。
拳を握り締め、何か言いかけた彼女は、そのまま空気に溶ける様に
薄くなり、消えていった。

「・・・不憫だな、」

眼帯の金細工を揺らして、ヨルが呟いた。

「、怪我、もう良いの、」

扉の外を伺うヨルに、カムカヌカは問いかけた。

心配していたのは真実だった。

理由はどうあれカムカヌカをあのつまらない世界から連れ出してく
れたヨルとネインに、静かな感謝の念が燃えていた。

「ああ、」

ヨルは短く答え、カムカヌカを振り向いた。

「君も、もう平気だろう、緑は命灯ヒリチャンユエそのもの、常に生み出される其
れを、宇宙エウレンは求め続けている、」

ヨルは真っ直ぐに、カムカヌカの蒼い瞳を見つめた。
そして意を決した様に、静かに告げた。

「精神の在る緑は不死無敵、ヒリチャン
ヒリジャンエイア至高の緑宝を手中にと、皆が其れを狙うだろう、」

「、、、、如何したら良い、ヨル、」

カムカヌカは目の前のヨル自身も、緑である自分ヒリチャンを求める者である

ことを知り乍ら、彼に頼る他、術^{すべ}を持たなかった。
彼はカムカヌカに向けていた眼差しを伏せ、長い溜め息をついた。

「見つけた！！！！！！」

「、！？、う、わっ、、、！」

陽気な声を振り返る暇も無く、物憂げに床へ落としていたヨルの視線が揺れ、ヨルはそのまま地に叩きつけられた。

白い床に伸びきったヨルの上に、ネインより1、2間^{マイル}大きいだけの背丈の少年が乗っかって居た。

紺色の髪は柔らかそうに跳ね上がり、前髪は斜めに分けられていた。無邪気にヨルを尻で押し付けるこの少年の長上着^{ロウフ}に、カムカヌカは見覚えが有った。

舟にやって来た、ダ・ルマस्क・ノルエ天球法議会の専属魔術師^{ヘガ・ウイザド} - - - -

「重い、っ！」

腕を回す遠心力で背面を向いたヨルは、急に空間移動した少年のせいで勢いを余らせる。

筋を捻^{ひね}つたらしく、しばし声を殺して震えた後で、何事も無かったかの様にヨルはすりと立ち上がった。

呆れ顔で傍観するカムカヌカの横で、何時の間にか再び現出したコハクが左右に首を振る。

ヨルは涼しい顔のまま、にっこり笑う少年の首根っこを掴むと、その額に血文字で陣を描いた。

どうやら今の衝撃で傷口がぱっくり開いたらしい。

魔方陣が黒い雷^{いかづち}をうねらせたと思うと、少年は部屋の窓から吹き飛んで行った。

「ふん、」

ヨルは得意げに手を払い乍らカムカヌカに歯を見せて笑った。

開いた口が塞がらないカムカヌカの前で、今度はヨルが、扉の向この中庭へ飛ばされて行った。

窓の向こうから光弾^{プロズル}を放った少年が、軽やかに部屋に舞い戻る。

「幾ら此処が規制されてるとは云え、鈍ったね、ユイルアロウ、！」

「………^{ランファン}藍煌……、、、、、」

中庭から葉に塗れたヨルが姿を現し、何やら再び血で陣を描き出す。怒りを湛えた紅い瞳はらんと光り、強い光源力が集まったその瞬間だった。

「わたしの部屋で暴れるな、！！！」

苛立ちを押さえていたコハクが何か強い魔法を放った。感情で放たれた其れは誰も居ない場所へ、威嚇として打たれたものだった。

ド、ン！

地から湧き上がったコハクの白炎トウアの中で、誰かが燃えているのを力
ム力ヌ力は発見した。
他の三人も目を見開いている。

収まった炎の中で不機嫌そうな顔をしていたのは、ヨルを探してい
た小蓮シャオレンだった。
酷いとばかりを受けた彼を見て、全員その場に静止した。

十四、翌日

「、、小蓮、」

静まった炎のまだ残る煙の中に立つ人影を見て、ヨルと藍煌から笑みが失せた。

コハクは自分に責任は無いと言わんばかりに、間^{マイル}良く、再びその姿を光に溶かして消える。

カムカヌカが初めて対面するその長身の青年は、煙が収まるのを待つと、につこりと微笑んでみせた。まるで聖母^{マルダ}の様な優しい笑顔。その額に青筋が浮いているのを、その場の誰もが認識していた。

小蓮は煤^{すす}けた服を軽く払い、ヨルに向けて深々と一礼した。

礼の意味を悟り、ヨルが歩を退きかけた瞬間、小蓮は滑^{シヤオレン}るように近付くと、じんわりと血の滲^{にじ}むヨルの脇腹に思いつきり手刀^{ハンド}を食い込ませた。

ヨルがその場にくずおれると同時に、彼は藍煌^{ランファン}に向けて指を弾く。困惑するカムカヌカを前に、藍煌^{ランファン}はこの空間から音も無く消え失せた。

「手荒な真似を失礼しました、ユイルアロウ、全て貴方の身を案じての事、ご理解下さい」

蹲うすくまもんぜつり悶絶モンゼツするヨルに、小蓮ショオレンが再び頭を垂れた。

そして笑顔のまま、硬直しているカムカヌカを向く。

びくりと身構えるカムカヌカを見て、小蓮ショオレンは吹き出した。

「・・・緑ヒリチヤン、カムカヌカ、貴方も部屋へお戻り下さい、
ダ・ルマスダ・ルマス・ノルエク・ノルエ
天球法議会はユイルアロウ含め、遺証テスタである貴方を歓迎してはおりません。」

此の宮殿サイコエの至る所に、緑喰ビインは潜んでいます、夜明けアスランも宵ルエも、その
隅々まで緑刻ラ・ヴィを滅吞メイする事を夢見ているのです、」

訝いぶかししげに睨むカムカヌカに小蓮ショオレンは優しい眼差しで笑いかけた。
では、と軽く会釈すると、彼はヨルを担ぎ上げて部屋を去って行った。

「魔術師ウイザドは何を考えているか解らぬ、」

少し離れた壁に寄り掛かる体勢で再現出したコハクが、実に面倒そうにそう言った。

カムカヌカはその言葉に静かに頷くと、数滴、滴り落ちていたヨルの血液を眺めた。

赤黒い其れは、しばらく自己の範囲で生き物のように小さく蠢き、やがて動を失った。

「カムカヌカ、と云ったな、お主に此れを与えよう、」

偉そうな物言いにカムカヌカが目を上げると、コハクがひとつの絵の具を差し出していた。

カムカヌカが疑いの視線を向けているのをお構い無しに、コハクはそれを強引に鼻先に押し付ける。

その白い手に握られている絵の具には、舟室に記されていた物に似た、カムカヌカには全く読めない文字が刻まれていた。

「ありがとうございます、」

「其れは饒別だ、何時までも縁に恵まれますよう、夜蝶女仏のご加護と祝福を、」

コハクは絵の具を受け取ったカムカヌカにそう言つと、胸の前で手を合わせ、深く深く一礼した。

そのまま再び光に消えゆくコハクに、カムカヌカもそつと頭を下げた。

翌日の天球法議會はここ幾百年間で、一番出席率の良い日と成った。
ダ・ルマス・ノルエ

暗く蒼い会議室は全十九席中、十六席が既に埋まり、着席した星団、機関、組織、帝国の代表による囁きが、宙を駆けていた。
マオフエイ

議長の望飛は満足そうに顎をさすり乍ら、着席した皆を臨んでいた。
あじ
秘書が運んで来た淹れたての珈琲を飲み、整頓された書類に目を通すべく手を伸ばす。
カルファ

書のとっぺんに記された文を一目見た途端、珈琲に舌鼓を打っていた彼の瞳から生気が失われた。

そつだ、この皆の集まりの良さには理由が在るのだ、あまりにも優秀な出席具合に盲目していたが、本日と云う日を拒めるのなら、わたしは石に成つても良い――――

「本日の議題・月の舟 u w i l l A r o w」

マオフエイ
望飛は深い溜め息をつき、こんにち今日も全力で頭を抱え込んだ。

其の時、今まで囁き合っていた帝達の声が一斉に止んだ。
マオフエイ
望飛は、はっ、と顔を上げる。
来た・・・・・・・・・・!

静寂に包まれた会議室。

十六人全員の神経は、巨大な蒼い扉の、其の向こうから姿を現した、
月の舟の船長・ヨルに集中していた。
ギフダ

銀に燃ゆる髪は薄暗い会議室に光を齎し、刺す様に注がれた紅い瞳
は其の視線の先を焼いた。
もたら

上品な臙脂色えんぢいろの軍服にきっかりと身を納め、きらきらと煌く右目の
眼帯の金細工を揺らしたヨルは、誰よりも優雅に会議室へ歩み入っ

た。

其の腕に点滴^{ロキ}が繋がっているのを発見した望飛^{マオフエイ}はじめ出席者達が、露骨に嫌そうな顔をした。

偉そうに進むヨルに次いで、出席を促されたネインとカムカヌカも続く。

それを見て、何人かがひそひそと囁き合う。

緑^{ヒリチャン}だ何だと話しているのだろう、カムカヌカは少々居心地の悪い^{てい}体で、ヨルの右隣に用意された椅子へ腰掛けた。

ヨルを挟んで左側に座ったネインも、居辛そうに目を泳がせている。

三人が着席した後に、蒼い長上着^{ロウフ}を全身に纏った専属魔術師^{ヘガ・ウイザド}が五人一礼と共に入室した。

五人はそれぞれ会議室に散らばると、壁に溶け、気配を絶った。内、二人がヨルの背後に憑いていた。

見張り、といったところだろう、カムカヌカは眉根を寄せると、憂鬱^{ロキ}そうにヨルを見た。

ヨルは自身たつぷりの笑みを浮かべ、会議室を眺めていた。点滴^{ロキ}を吊るした細い鉛棒が三人を冷たく映し込んでいた。

やがて扉が重々しく閉じられ、議員十七名による天球法議會^{ダ・ルマस्क・ノルエ}が始まった。

十五、天球法議會

「皆様お揃いです、」

「………其の様な、」

わざわざ耳打ちしてきた秘書に、ダ・ルマ・スク・ノルエ天球法議会議長・マオフエイ望飛は怪訝そうな顔で返答した。

間も無く、手の平を適当に振って秘書を下がらせると、ひとつ咳について立ち上がり、この薄暗く蒼い会議室を見渡す。

皆、水を打ったかの如く静まり返り、十七名の代表達が号令を待つて、マオフエイひたすら望飛を見つめていた。

その中でもひとときわ煌煌と注がれる刺す様な視線に、コウコウ大柄の望飛ですら冷や汗をかいた。

直立したままヨルに蛇睨みされた議長は自らを奮い立たせるべくまたひとつ、咳払いをする。

「……えー、此れよりカルミ・ガデリク・ヤー巡星刻曆七十三曆、ノスト第癸軸連に寄る、ダ・ルマ・スク・ノルエ天球法議會を開始致します、デテオ・ランランタ神の慈愛のもと、感謝致します、」

全員が勢い良く起立した。

カムカヌカは何も解らないので一拍遅れて跳ね上がり、ヨルを睨む。
そして当たり前のように全員が同じ間タイルで胸に斜はすに片手を添え、厳おごそかに頭を垂れた。

すると今まで薄暗かった会議室がぼんやりと浮かび上がってゆく。

壁に規則的に掲げられた電燈ラトが、蒼い部屋に更に蒼を齎もたらした。

皆の顔が青白く見えるだけじゃないか・・

蒼色に不気味さを覚えてしまったカムカヌカ達の、次々と着席する
室内に望飛マオフエイの重い声が響く。

「本日の議題は、月の舟について。」

舟、
？

眉根を寄せ困惑するカムカヌカと、急に不安な表情に成るネインが、
せせら笑うヨルを挟んでいた。

「先ずは状況報告を、ユイルアロウ。貴方は此の幾歲月、議会に籍
を置き乍らも出席されていませんでしたね、又、本日は何故出席に

至ったのかもご説明願います、」

マオフエイ
望飛は出来るだけ言葉を選んで声にした。
マオフエイ
ヨルは優雅に起立し、望飛に向かう。

「僕は月の舟として存在を全うして居ただけです、議会と命ならば
サイン
命が大切と、神もそう、仰るでしょう、僕は僕を保つのに必死で、
サテライト
議会衛星なぞには到底来れずに居ました

最も、この議会が毎暦、有意義な談話をされていたのでしたらまた別ですが、」

この人は言葉がいちいち余計なのだ、カムカヌカは内心ヒヤヒヤし乍らヨルの発言を傍聴した。
議員達がひそひそ言い出したのもお構い無しに、ヨルは淡々と続けた。

「本日、この場に来ているのは、傲慢な天球法議会の専属魔術師に
ダ・ルマスク・ノルエ
ベガ・ウイザド
よる強制連行の為であり、此の様に議題にされるのも、全く意味が解らないのですが、」

ヨルの背後に気配を絶っていた専属魔術師の一人が現出して、ヨルに何かを仕掛けようとした。

それをもう一人が素早く腕を掴み、静止する。

気が付いたネインが小さく悲鳴を上げ、議員達がどよめく向こうで、
マオフエイ
望飛が早速か、と云わんばかりに首を振った。

疲れる会議になりそうだ……

敵を造り過ぎだ、カムカヌカはヨルのそういうところに少々苛立ちを募らせていた。

「……小蓮^{シャオレン}、その血の気の多いの何処か避けておいてよ、」

議員が息を呑む中でヨルは長上着^{ロウフ}の下で見えない人物に向かってそう囁いた。

深い青色の長上着^{ロウフ}を纏った二人は静かに頭を下げると、再び壁に溶けていった。

ヨルは眼帯の金細工を揺らし、
マオフエイ
望飛に向き直り口を開く。

「早い話、僕の処分について、が、議題なんだろ、？
言い難くとも月光下リユウライトに引っ張り出せよ、臆病者、」

紅い瞳を細めて、自嘲したヨルが辛さを押し殺す様な表情をしたのを、ネインもカムカヌカも見逃さなかった。
一瞬の沈黙の後、早くも疲労を感じる議長・望飛マオフエイがのろのろ注意する。

「・・・着席ください、船長・ユイルアロウ、其れは・・・」

「小僧、言葉は良く吟味してから舌に乗せるのだな、以後、気を付けろ、」

望飛マオフエイの言葉を遮さえぎって、肌の浅黒い議員が怒鳴った。

筋骨隆々のその男は、顔の前で組んだ手の向こうの瞳孔で、ヨルを睨にらんでいた。

カムカヌカは再び一触即発に成るのではと気が気では無い。
そうなるとまた可哀想なのはこの幼いネインだ。
ネインも不安な視線をヨルに送っている。

「これは此れは、ド・フューラスト天在軍のアルフォンゾ大将ではありませんか、お
久しゅうございます、」

ヨルは笑顔のまま丁寧にお辞儀して見せた。

「ふん、虚像でなければ血が流れていたな、まさに神のデテオご守護だ、ヴァルカ
感謝しておけ、」

毒づく男にヨルはにっこりと微笑んでみせた。

虚像、、、？

カムカヌカは注意深く男の姿を凝視してみた。

遙か右手側にいる色黒の男は、面白くなさそうに鼻を鳴らしている。
この部屋が薄暗いせいもあってだろうが、カムカヌカはその男の輪
郭がぼやける……と言うより、不安定な事に初めて気が付いた。
男の着ている真黒の布地に金の釦ボタンが光る、高級な軍服が良く良く見
ていると微かに、波打っているのがみてとれた。

男は、あそこには、いないのだ、。

カムカヌカが呆ほうけていると、手を叩き、仕切りなおす声が聞こえた。

「、、アルフォンゾ大将、申し訳ありませんがお控え下さいまし、ユイルアロウも穩便に、」

マオフエイ
望飛の仲介に、二人の視線は途絶えた。
それを見てネインはほつと肩を落とす。

「それでは、、本題に入りましょう、
月の舟について、質疑応答の後、その所存を可・否決致します、」

マオフエイ
疲労がみてとれる望飛の告いだその言葉に、着席したヨルが口を尖らせた。

「質疑応答つて、何なんだ、たまに出席したからただの珍味感覚のつもりか、厭あきれる、

ラ・テチム・ダーガン

一刻も早く宙論天文台へ即けたいというのに……
如何せ面倒ごとは抹消したいだけなのさ、人気者バブレストの道化ドルダの身にも成れよ、」

大きく溜め息をつく、ヨルはカムカヌカに身を寄せて囁いた。

「な、ダ・ルマスク・ノルエ天球法議会つて、下らないだろ、」

カムカヌカは黙って頷いた。

勿論、何処がどう下らないのか、釈然としなかったのだが、。

十六、天球法議會？

蒼白にぼやぼやと揺れる電燈^{ラト}に、カムカヌカは胃を押さえ始めていた。

十六名の視線がほぼ継続的にこちらに注がれている為の威圧感、いや、居心地の悪さは異常だった。

その視線は議長・望飛^{マオフエイ}が言葉を発しても、三人の身から剥がれる事は無かった。

「では、月の舟への質疑応答を、開始致します、」

「七面倒な、」

ヨルは心底恨みがましい声で小さく呟くと、背凭^{せもた}れていた身を起し、机上に頬杖をついた。

用意されていた席間よりもだいぶヨル側につめたネインが、胸の前で祈る様に手を握っていた。

ネインはこの電燈ラトによるものではない、天然の蒼い顔色で、ヨルに囁いた。

「否決に、なったら、どうしましょう、ヨル、」

「成るね、それが目的なのだから」

ネインが一層瞳を潤ませたのにも間髪入れず、ヨルが続けた。

「天球法議こじ会がまともだった事が一度たりともあるかい、？」

ネイン、何も期待しちやいけないよ、此処ランタンデオに出席して居るのは皆、嘘罪夜ザネリで欲賊の審判を下されても可笑しく無い者ばかりなのだから、

「

わざとなのか、ヨルの声は囁きなのにも関わらず、静かな会議室に良く響き渡った。

帝達は全員、黙ったままだが、見えない顔のその仮面の下に小さな憤慨を浮かべているに違いない。

（何故こんな空気にするのだ、助かるものも助からない、）

カムカヌカはいいい加減に募った苛苛と、神経の捩れよじによる腹痛に、この場に居る帝達と似た感情をヨルに対して持ちつつあった。
マオフエイ
望飛マオフエイが大きく、咳をした。

「ユイルアロウ、丁寧な応答を、願います、」

「ふん、」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・では、皆様、質問は拳手で受け付けます、どうぞ。」

途端に、ヨルを除いた十六名全員が、一斉に手を挙げた。
ネインはあまりのその勢いに驚き、身を跳ね起こしそびれて、椅子から床へ尻餅をついた。

カムカヌカもそんなネインを嘲笑する余裕は無く、自分の右隣で拳手をする、巨大な飾り帽をかぶった厚化粧の中年女性の、急に荒くなった鼻息が気になって仕方ない。

ヨルは頬杖をついたまま、目を細めて帝達を見回した。

「、では、議長席から時計回りをお願いします、。」

マオフエイ
望飛がそう言うのと、拳がっていた十六本の腕が降り、議長席の右側の人物が起立した。
グリーン マントン
落ち着いた深緑の羽織物を纏ったその男性は、杖を頼りに曲がった背を伸ばすと、天井まで届きそうな縦に長い帽子を脱いで、ヨルに一礼した。
顔を起こす時に彼のまん丸な遮光眼鏡から黒い液が糸を引く様に垂れるのを目撃して、椅子に戻りかけていたネインが、再び床へ尻餅をついた。

「お久しぶりです、ユイルアロウ、総合創暦録館・館長、アルレッキーノです、」
オー・ローヤ・ンフ マスト

「ああ、久しぶりだね、館長、借りっぱなしの図書があっただけれど、どうも失くしてしまったみたいなんだ、悪いね、」
マスト

アルレッキーノと名乗った彼は、遮光眼鏡の位置を調整し乍ら、不気味に笑った。
グ・スラス

「いえ、構いませんよ、いずれ代用を戴きに上がりましょう、それはまた別の話、。、。

さて、ユイルアロウ、貴方は先の舟転ツオルで天体団の將軍と接触されたそうですね、彼らは貴方を天体団の恥として、抹消を目的に動いています、

これに対して貴方も真つ向から対立、戦闘に至っておられますが、今回接触の有った將軍は、バドルマギヤ当時、皇帝シエラであった貴方の右腕だったアラン氏だと聴いています、なんとも悲しい事態では有りませんか、？
このような悲劇の渦中である貴方の彼らへ対する考えと、貴方と彼らのこれからの関係の構築について、ご意見を伺いたく存じます、」

アルレッキーノはゆっくりそう言い、真つ黒に淀む遮光眼鏡越しにヨルを見据えた。

ヨルは反対側へ頬杖をつきなおし、口を開く。

「あんたらの考えは解っているよ、カエラ墮帝である僕が何時迄も舟で在

る事が、邪魔なのだろう、

だが僕は天体団リーベン・ローエに屈するつもりは無い、悲劇、？笑わせる、ア
ンが何だ、

僕があそこを棄でた時から、あの団体と僕の関係は永久に此の儘だ、
デテオ神に誓って、修繕される事は無いと思え、」

ヨルの燃ゆる紅い瞳が、アルレッキーノの遮光眼鏡ゲ・スラスを焼いた。

アルレッキーノは唇を真一文字に結び、しばらく押し黙っていたが、
やがて静かに礼をして、着席した。

ネインとカムカヌカが同時に肩を下ろしたのを目の端で捕らえたヨ
ルは、誰にも判らない程、小さく微笑んだ。

十七、天球法議會？

一触即発寸前の張り詰めた空気を払拭したくて、だがしかしヨルは非協力的で、何故か直接関係の無い自身が何処かを痛ませているのは、腹痛を感じるカム力ヌ力だけではなかった。

先程から頭痛が止まない議長・望飛マオフエイがそのもう一人だ。

大柄の癖にか細い神経の彼は、定期的に合う月の舟の船長の冷ややかな片眼が恐ろしくて堪らなかった。

「では、次の方どうぞ、」

望飛マオフエイはこめかみをしきりに揉みながら搾り出す様にそう促した。

すると気味の悪い老人、アルレッキーノの右側に掛けていた瘦身の女性が、衣擦れの音も無くすらりと起立した。

カムカヌ力は未だかつて見た事の無いその女性の出で立ちに、目を見張った。

彼女は、そう、彫刻のようだった。

いや、モネン・ケン忠再人形に近い・・・でも青魚にも見える、。

何処から見ても無駄の無いしなやかな身体は、衣類、と、見て取れる物は纏ってはいない。

その代わり、全身が何か光沢の有る銀色の布で覆われていて、生肌は一切露出されていない、実に不思議な格好をしていた。

それは勿論、顔面すらも覆われており、両目の部分は巨大な飾り物で隠されていた。

そういう肌の色なのかもしれない、でなければ、息が出来ない、カムカヌ力はひとり浅く頷いた。

デルボルド・デルボルド・デルダ
「闘討伐和迎船団・暗部第二皇女ビョーク・ゼ・デルダ、御機嫌よう、ユイルアロウ、」

「相も変わらず、舌を噛み千切りそんな船団名だね、ビョーク、」

不思議な声が響いた。

彼女から発せられた声には違い不大的が、頭の中に直接響く、反響する電子音ウネンを思わせる声だった。

丁寧に首を傾げた彼女に対し、ヨルはやはり冷たく返した。
彼女は肩を竦すくめて微笑むそぶりを見せると、再び乾いた電子音ウネンを響かせた。

「お元気そうで何よりですわ、ユイロ、

我々が貴方へ干渉した時は本当に惨劇でしたもの、まるで神教伝デテオ・ロウ最大の恐怖、ドドの嵐夜を髣髴ほうふつとさせる一夜でしたわ、」

ヨルはわざとらしく懐かしそうな顔をした。

「ああ、その節は大変な世話になったねビョーク、

頼んでもいないのにしゃしゃり出てきた君達のお陰で、こんな銀髪に成れたんだっけ、」

ヨルは豊かに煌く銀の前髪を引っ張り、勢い良く背凭れに身を預けると、大袈裟に脚を組み乍ら皮肉たつぷりに笑ってみせた。

また、そんな、波風を、立てるような、、

どという事情や因縁があったとして、大人気ない対応は善くない、この場には幼いネインもいるし、そういうのは外に出てから・・・

ヨルがもとも銀髪では無かった事実^{マオフエイ}に素直に驚きたいのに、何故か油汗をかくカムカヌカと、こめかみを激しく揉みだき始めた議長・望飛の考えは、このときっ^{リンク}かり共通していた。

「あら、素敵ぢゃない、天体団らしさが、少しでも失われたのだから、喜ぶべきですわ、」^{リーベン・ローエ}

「……………本当にごくごく微かな気休めだけだね、、まあ、良いよ、」

時折見せる悲しそうな笑みを一瞬浮かべ、ヨルは溜め息を吐いた。
リーベン・ローエ
天体団らしさ、ネインもその言葉を聴いて、身を強張らせていた。

リーベン・ローエ
(ネインも天体団だったのだろうか、?)

カムカヌカはネインの頬の傷口から、バドルマギヤ將軍アランと同じ、はなひら紅い花弁
が零れ舞っていたのを思い出していた。

何にせよ、この会議に同席している事で、少しずつだが二人の事が
暴かれつつあるのは、期待出来る。

そんな事を考えていたカムカヌカを連れ戻したのは、ネッビョークの電
子音声だった。

「ユイルアロウ、わたくしは、貴方が連れている其の子供について、
お伺いしたいのです、」

ネインはびく、と反応した。

^{ゼエベン}世勉の制服は着ているが、ベレエ帽を失ったネインは、出会った時とは異なって、完全に少女だった。

性別を隠していたのは事実だろう、でも、何故、？

「其の子は、貴方が連れていて良い子ではありませんわ、
^{ピリチャン}隣の緑も決して良くはありませんが、、、」

ビョークはちら、とカムカヌカを向いたが続ける。

「月の舟で在る以上、^{ピリチャン}緑は致し方ないもの、今は目を瞑りましょう、
しかし其の少女はお返しするべきですわ、
^{リーベン・ローエ}其の子を連れているから、天体団は貴方を狙うのです、」

ネインが小さく震えている。
ヨルは腕組みしたまま応える。

「それもあるだろうね、だが、あの団体が僕を追うのは、もつほば私怨とか自己満足の域だろう、

もしかして別の理由が、あるのかもしれないけど、」

「、別の、理由、？」

「例えば、僕が、ネイン以外にも、何か彼らの大切なものを、奪^もっているとか、」

会議室が急にざわつき始める。

カムカヌカの隣の厚化粧のオバサンの鼻息が、また一気に荒くなつた。

「お静かに、！ユイルアロウは必要な事だけを、お応え下さい、。」

マオフェイ

望飛が頭痛のあまり目を閉じたまま叫んだ。

議員達のどよめきが僅かに小さくなる。

面白そうににやにやするヨルの向こうで、ネインが縮こまっていた。

リーベン・ローエ

「其の子を天体団へお返ししてくださいまし、！」

ビョークの声が狭い脳内にわんわんと響いた。

「だって、如何する、ネイン、？」

他人事の様にヨルはネインに尋ねた。

しかし、ネインを向いてはいない。ネインの答えが、解っている、のだ。

ネインは両手を膝の上で握り締め、深く項垂れたまま、動かない。

「其の子は、天体団の、とても重要な、娘ですわ、！
カエラ
墮帝である貴方が連れていて良い存在では、ないので、
さあ、其の子を、わたくしにお預け下さい、我が船団が責任を以
て、天体団に、」
リーベン・ローエ

「嫌です、、、、！！！！！！！！！！」

今まで黙って聴いていたネインが、大声で叫んだ。
と、勢い良く立ち上がると同時に、両の拳で机を殴りつけた。
激しく打ち付けられた拳の先から、この豪華な机に入った亀裂は、
恐ろしい剣幕で喚きたてた青魚の様なビョークへ真っ直ぐに向かっ
て行き、彼女の席を一瞬で粉々にした。

瞬間、壁から専属魔術師五名が現出し、二名がビョークを守る光盾
ヘガ・ウイザド
を展開、三名がネインを去勢するべく、光源魔法を喉元に構えたと
エネル・マゼク
バルア

ころへ、同時に何時の間にか起立したヨルも、ネインを庇うように
フロ・ルタ
魔術師たちに血紋陣を構えていた。

カムカヌカも、他の議員も、皆、呆気に取られていた。

机の碎けた破片が床に落ちる音が終わると、睨み合ったまま微動だ
ベガ・ウイザド
にしないヨルと専属魔術師が構えた、微かな魔法音マギアが空気を揺らし
ていた。

ドスン、

皆、一斉に音のした方へ視線をやった。

ついに神経性頭痛に耐えられなくなった議長・望飛^{マオフエイ}が、椅子ごと後ろへ倒れたのか、床の上へ伸びていた。
この蒼く照らされた会議室よりも、遥かに蒼い顔をしていた。

蒼の中の蒼だった。

十八、休会

「議長、！」

急な展開にしばし微動だにしなかった専属魔術師ヘガ・ウイザド五名全員が我に返り、頭痛で倒れた望飛マオフエイに駆け寄った。

すぐさま奥の扉が開くと、待機していた秘書達が担架を担いで現れた。

望飛マオフエイを抱き起こしている専属魔術師達ヘガ・ウイザドを退けしりぞ、何かぶつくさ云い乍ら、大柄な彼を手荒に担架へ乗せる。

秘書達は議員に目もくれずそれを担ぎ上げると、一目散に扉の向こうへ消えて行った。

「
.
.
.
.
.
.
.
.
、
」

その場にいた全員が目を瞬^{しはた}かせ、ただ乱暴に閉じられた扉の向こうを見詰めていた。
砕けた机の破片を肩から払い乍ら、銀色に光るビョークが嘲笑した。

「、
無様だわ、
」

ヨルも鼻で笑い、やれやれと首を振ってみせ、着席した。
ネインは顔を真っ赤にして、拳を握り締めたまま、視線を落として黙っていた。

専属魔術師ヘガ・ウイザド五名が何やら小さく会話しているのを、カムカヌカはじつと観察していた。

如何するのか相談しているらしく、蒼い長上着ロウフを纏った五名は、首を振ったり、顔を見合わせたりしている。

深く被られた頭布フウドで皆、顔は見えないが、カムカヌカはひときわ背の低い魔術師ウイザドが、昨日、コハクの部屋で出会った藍煌ランファンという少年なのだろうな、という事に考えを巡らせていた。

そうしているほんの一瞬で何かが決められ、一人が静かに議長席に進み出た。

議員の視線が一点に集中する。
進み出た彼は頭布フウドを脱ぐと、深々と頭を垂れた。

結われた焦茶色の髪が頬をかすめる。
小蓮シャオレンだ。

「議員の皆様、この低身イエンの発言をお許し下さい、
わたしは天球法議会専属魔術師タルマス・ノルエ・ヘガ・ウイザドは壹番陣大将イチモ・デオ、
黄小蓮コウシャオレンと申します、

この度は議長・帳望飛チヨウマオフエイの至ら無き所業、まことに失礼の極み、此処に深く謝罪致します、。」

小蓮ショオレンとその後ろの四名が、一斉に礼をした。

「続会を促したく存じますが、容態も明確では御座いませぬ、貴重なお時間を戴き申し訳無く存じますが、この会議も実に貴重な宝刻トレイチヤの旨、何卒、続会まで、今しばらくこちらにてお待ち下さいます様、お願い申し上げます、。」

専属魔術師ヘガ・ウイザドたちはもう一度深々と頭を下げた。
和ませた目元を再び頭布フウドで隠すと、小蓮は望飛ショオレンが運ばれて行った扉へ音も無く溶けて行った。
残った四名はそのまま室内の見張りに着くらしく、現出したまま、その場を動かこうとしない。

「・・・下らない、」

吐き棄てる様にヨルが毒づいた。

起立したままのビョークが肩で溜め息をつき、無駄の無い動作で腰掛けた。

徐々に会議室がざわめき始める。

隣と囁き合う者、熱心に何かを書き始める者、よく解らない装置で此処には居ない誰かと会話を始める者など、議員達はやっと、月の舟一行から興味が薄れたようだ。

「ネイン、大丈夫かい、」

立ったまま拳を震わせているネインに、堪らずカムカヌカが声をかけた。

唇を強く噛み締め、眉を吊り上がらせている、。

「、、、僕は、あそこへは、帰りません、・・・。」

「、帰らなくて済むさ、ね、ヨル、？」

カムカヌカは期待を込めてヨルを覗き込んだ。
ヨルは椅子に深く凭^{もた}れ、少し疲れた顔で肩を竦^{すく}めた。
その紅い瞳からは先程までの輝きが失われており、点滴^{ロキ}の刺さった
腕は、しきりに脇腹の傷口を摩^{さす}っている。

議員達にあれだけ元気に嫌味を吐露していたから忘れかけていたが、
そうだ、彼は怪我をしているのだ、。

急に心配になるカムカヌカを余所に、上着^{コウト}で隠した包帯箇所を撫で
乍ら、机上に大胆に脚を乗せたまま、ヨルが口を開いた。

「帰る、帰らないも何も、これに出席する限り、議会で可決されて
しまったら僕は如何にも干渉出来ない、続会されてビョークが食
下がるのならば、多数決を取る事に成るだろうね、

勿論、勝ち目は無い、此処には馬鹿しか居ないんだよ、・・・。」

「ネイン、とりあえず座りな、」

「はい、」

ヨルに着席を促され、ネインは素直に椅子へ座った。

着席時の勢いの強さが、ネインの収まらない怒りを感じさせる。

ネインが帰らなくて済む方法は無いのかを考えるうちに可決や否決という言葉聴いていて、カム力ヌ力は以前、ヨルが話していた事を思い出していた。

ハルト、心臓提出だとか、森井戸行きだとか何とか・・

「ねえ、ヨル、前に巨おおきな蟲籠へ入ってしまった時、天球法議会の事、話していただろう、召還を騒がれてしまふ、と言つて、確か、む、っ！、？・・・・・・、」

瞬間、カムカヌカの口はヨルの右手で力いっぱい、塞がれていた。と、いうより、挟まれていた。

ヨルは片手でカムカヌカの両頬を搾り上げ、それ以上喋る事を許さなかった。

決して口で息をしていた訳では無いが、途端の事だったので、非常に呼吸が不便で苦しい。

ぎりぎりと握力を増加させ乍ら、ヨルが笑顔で迫ってくる。

真紅の瞳はらんと光り、口元とは違って、少しも笑みは浮かべられていない。

「二度と議会議衛星で嘘罪夜の話をするな、
サテライト
ランタンデオ
次は喰らうぞ、カムカヌカ、」

ヨルはそう言い、悪戯っぽくにと、笑ってみせた。

……つもりなのだろうが、青白い下からの光で照らし出されたヨルの顔は、眼帯の複雑な金細工によって不気味な模様に彩られた効果も付加され、この世のものとは思えぬ悪魔^{デモロラ}の如き恐ろしさだった。

しかし同時に冷酷な美しさも湛えている事に、カムカヌカは素直に感心していた。

「喰らうだとは、実に残念な言葉^{コトバ}を灯^{とも}すぢゃないか、魂^{ヤナカラ}まで夜無空へ墮^リとしてしまったのかい、？
天体団元・皇帝のユイルアロウ、」

不意に何の気配も無かった背後から声がした。
ヨルもネインも、目を上げた。

ヤナカラ
夜無空
- - - - -

既に懐かしい響きを持つその言葉を発した声主にカムカヌカは振り
向けないで居た。
ヨルが頬を挟む力は尋常では無かった。

十九、衝突

「――――シエラ皇帝クタニス、」

そう呟いたのは、すっかり怒りの色の褪せたネインだった。
その声主に怯える様子は無く、真っ直ぐに彼を見詰めている。
それだけでカムカヌカはその人物が、この月の舟一行に敵対する者
では無いと推し測る事が出来た。

一瞬、眉を顰めたヨルは容赦無く握り続けていたカムカヌカの頬か

ら手を離すと、椅子から立ち上がるべく、その青い椅子の肘掛を押した。
しかし、首の不自由を解消されたカムカヌカが背後の人物を捉^{とら}える間も無く、起立し損ねたヨルが盛大に床に膝をついた。

「ヨル、！」

カムカヌカが手を差し出すより早く、ネインがヨルへしゃがみ込んだ。
だ。

「余程、体液を欠いたと診える、貴方を議会の老人達が条例違反^{ント・バルダ}だと噂^{うさ}していたが、

^{バドルマギヤ}將軍も舟に縁^{ヒリチャン}を放つ旨、裁かれるべきであろう、」

^{ヤナカラ}夜無空、と、先ほど口にした彼を、カムカヌカは初めて振り向いた。
影の様にしつとりと其処^{そこ}に佇^{たたず}む皇帝クタニスと呼ばれた男は、門番の様に三人を見下ろしていた。

良い身形^{みなり}なのはすぐに解った。

豪華な黒色の絹^{シルク}地で幾重にも重ねられた王着の彼は、その声から若者さを伺わせるが、立派な飾り帽子を被っている為、表情が見えない。

その手には自身の背丈をゆうに越える、美しい魔法杖^{マギ・ステク}が握られている。
た。

遙か頭上の杖の先できらきら光る垂飾りがぶつかり合う音が、やけ

にカムカヌカの耳に届いた。

「取引の行為過ぎだ、ユイルアロウ、何だかんだ反論して、デルボルダ闘討伐で水銀を被り、卑しい天舟に成り下がるも、今でも貴方がこの天で頂上の天体団なのだ、世界が、終わっても、永遠に、。」

ぴかぴかに磨かれた青い床に映る自らに視線を落として呼吸を整えていたヨルは、淡々と話す皇帝クタニスシエラのその言葉を受け、じわじわと眉根に深いしわを刻んでいた。ヨルは浅く溜め息を吐くと、まだ重たい脳を押し上げ、ネインの助けを借りずに、ゆらりと起立した。

「有難う、クタニス、僕には勿体無い過大評価だよ、……心
底、虫唾が走る、」

言い終え乍ら椅子へ雪崩れ込むヨルの顔色が悪いのをみて、カムカヌカは何故だか、ほら見る、無駄な牽制をするからだ、と心で呟いていた。

ネインと自分を不安にさせ続けた罰だ、怪我人のくせに、何故大人しくしない、結局、ヨルも、馬鹿だ、。

カムカヌカが口には出せないヨルへの罵倒で心を充満させていた其の時、何の前触れも無く、皇帝^{シエラ}クタニスがカムカヌカを向いた。

「、緑^{ヒリチヤン}は素直だな、何の濁りも無くて、美しい、わたしも貴方と同意見、ユイルアロウは馬鹿だ、もう少し、大人しくする事を学んだ方が良い、」

「っ、！、？」

カムカヌカは驚きで反射的に、急に空気を飲み込んでしまった。胸元を激しく殴りつけ動揺するカムカヌカに、ヨルとネインが揃って白い目を向けている。

心を、読まれた、？、、

「あつそう、・・・そんな事考えていたんだ、カムカヌカ、そんなの直接、僕に云えば良いじゃないか、！今更、水臭いなあ、」

ヨルはこれ以上無いくらい、愛嬌のある笑顔で微笑んだ。後ろに薔

薇が咲く効果すら見え隠れしている。

カムカヌカはヨルの造り笑いに十分な知識があつた為、一步後退しかけた、が、

そんな隙を許す訳も無く、カムカヌカの胸元はヨルによつて乱暴に掴まれていた。

「緑喰の巢窟へ旅行してみようか、はたまた囚惑星の監獄へ緑です
という看板を首から下げ――――」

ゴ、「だつ、！」

皇帝クタニスの長い長い魔法杖がヨルの脳天に降打された。
ヨルは頭と脇腹を押さえ、椅子に丸くなり、悶絶している。
心配して寄り添うネインの顎に、今度は痛みで暴れるヨルの肘が殴
打した。

「・・・・・・・・」

「お気楽な連中だな、」

呆然とするカムカヌカに、シエラ 皇帝クタニスは二人を視界に入れる事もせず、淡々と続けた。

「ファウ・ロ 読心をして済まなかった、この腐ったサテライト 議会衛星では、ヒリチヤン 緑の貴方の声ラ・ヴーが、最も良く聴こえるのだ、」

緑刻から来られたのだろう、？精神が在る限り、やり方ひとつで何者も貴方の優位に立つ事は出来ない、ユイルアロウを心配するその心優しさ、如何か可能な限り、彼の傍そばに憑いてやってくれ、」

そう言つてシエラ 皇帝クタニスは、カムカヌカに丁寧な挨拶をしてくれた。
(ああ、この人は、味方なのだ、)

舟に乗ってからというものの、ヨルを庇うのはあの小さなネインだけだった。

ヘガ・ウイザド 専属魔術師のシャオレン 小蓮も、ヨルを大切に扱っていたけれど、それは議員だから、というのがあつてこそなのかもしれない、だが、この人は、
・
・
・

「シエラ 皇帝クタニス、貴方は、」

少し遅れて一礼し返したカムカヌカの小さな質問は、痛みから復活したヨルの怒号によって、無残にも掻き消された。

「クタニス、！傷口が開くところだったろう、三途園^{ラオ・ルスタ}へ到達しかけた、！

いま再び弱ると、本気で舟を保てなく成るぢやないか、っ！」

吼え乍ら、やはり今殴られた頭部よりも挟^{えく}られた脇腹が痛むのか、しきりに腹を摩^{さす}るヨルが、皇帝クタニスに詰め寄った。
^{とほ}恍ける様に適当にヨルを交わすと、彼は声を低くして囁いた。

「そんな事より、ユイルアロウ、天体団^{リーベン・ローエ}の現・団長がここ十数年、全く出席してこないそうだが、何か知らないか、？」

びく、とヨルとネインが反応した。

ネインは唾を飲み込んで、急に不安を瞳に映しだす。

その空気に、カムカヌカは交互にヨルと皇帝クタニスを見やった。

やがてヨルは鼻を鳴らすと、再び椅子に沈み込んだ。

「・・・・・・・・知らないね、」

ヨルは暴れた所為^{せい}で遠くへ離れてしまっていた点滴^{ロキ}吊るしを引っ張ると、片側の肘掛に

凭^{もた}れ、長い溜め息を吐^ついた。

冷えた手で額を押さえ、睫毛^{まつげ}を伏せる。

「僕はあの日以来、あの男には会っていないし、天体団^{リーベン・ローエ}の誰ともまともな接触をしていない、」

ヨルはそう言って、議長席の左隣の空席に視線をやった。
カムカヌカは、全十九名のこの天球法議會で、本日、欠席をしている二名が密かに気になっていた。

（そうか、一人は、リーベン・ローエ天体団、）

議長席の左隣、あそこにかつて、リーベン・ローエ天体団の皇帝シエラだった頃のヨルが、鎮座していたのだらう。
じゃあ、あとのもう一人は、？

「……などと云いつつ、クタニス、君も久しく出席していなかったよね、」

「……え、」

ヨルは得意げに、シエラ皇帝クタニスを見上げた。

「確か僕が舟に成る以前から来ていなかっただろう、そう、ちょうど、天在軍の医師の肺を取引してやった曆だ、此れは馴染むのにとっても苦勞したよ、毎日息も吸えぬ程に痛むからラブフカラの元に半分、棲んでいたつけ、その時の会議以来、君は出席していないだろう、他人を気にするより、自らを律したら如何なんだ、」

「僕は、！」

誰も何も言っていないのに、ヨルは皆を制止する体言ジェスチをしてみせると、続けた。

「僕も出席率が悪いとか云われているけれど、舟に成ってから今日が三度目の出席だ、

クタニス帝国はそんなにお忙しいのかい、？」

ヨルはふー、と肩を落とし、勝ち誇った目で笑ってみせた。
カムカヌカの知らない世界が、またひとつ、垣間見えた気がした。
だが、それ以前に、ヨルの発言はいちいち、鬱陶うっとうしい、。

皇帝クタニスシエラはしばらく沈黙した後、くす、と身体で笑うと、静かに立派な飾り帽に手をかけた。
優雅に髪の毛を振り払い乍ら帽子を脱ぎ、眼前に露あらわに成った彼の素顔は、賢者の様な、強したたかな顔立ちだった。
昼間の明るい日差しを思わせる、活発な蜜柑色オレンヂに輝く髪は、ばらばらの長さでところどころ結われ、ちらほら真珠パールが散っていた。
今までに見た事の無い髪の色に、カムカヌカは目が釘付けだった。

「・・・ああ、我が帝国は盟天塔直下の由緒正しき、太陽スウの守、貴方よそさまみたいに他所様の魂を引っつかむ様な卑しい乞食こじきとは違い、常に正規の勤めで、忙しいのだ、」

まさに南国を連想させる褐色の肌の皇帝クタニスは、ヨルに負けずとも劣らぬ、毒々しい笑みでそう言った。
額に青筋を浮かべたヨルが、悔しそうに引き攣つった微笑で、対抗する。

不自然に笑い合う二人に、ネインは涙を零し始め、カムカヌカは呆れ返っていた。

二人の過去が見える気がした・・・。

しばしそつして睨み合った後に、シエラ皇帝クタニスが仕切りなおすように両手を鳴らした。

「……と、まあ、リーベン・ローエ天体団のお嬢さんがまた爆発する前に、本題に入るう、」

「本題、？」

少し顔を赤らめたネインを宥めて、なだヨルが訝しげに尋ねる。
シエラ皇帝クタニスは、身を低くして真剣な眼差しで言った。

「ソレスト・ソレユ盟天塔の女神・ソラ・ソレイユについてだ、」

ヨルが顔色を変えて、クタニスを見上げる。

「まさか、天体団^{あいつじ}、・・・！」

クタニスは静かにに頷いた。

「本日は、貴方が出席為さるから団長も来られると踏んだが・・・、
此の儘では真意が解らない、」

「しかし、あの日確かにソレイユは・・・。」

突然、物凄い衝撃が会議室を襲った。

地響きの様な爆音が身体を貫き、激しい風が吹き荒ぶ。

建物の破片が風と砂煙に混じって、議員達を襲った。

伸ばした手の先すら見せない砂埃が、周りに居たヨルやネインを遮り、カムカヌカを孤立させた。

それでもカムカヌカは強風に押され、引っくり返りながらも必死に視界を確保しようと、腕を眼に翳して視線を巡らせていた。

だが煙や飛んでくる瓦礫に、全く太刀打ち出来ない。

奇跡的に一瞬晴れた室内のその隙間に、カムカヌカは、僅かに状況を悟る手掛かりを垣間見る事に成功した。

議長席の後ろの扉の向こうから、建物を食い破って、巨大な建造物の先端が存在していた。

（舟、）

議^{サテライト}会衛^{サイユエ}星の宮殿に、巨大な舟が衝突したのだ、。

この、会議室を狙って――――

二十、合流

ゴ、ゴ、ゴ、

もう一度、舟が前進した。

地響きと共に緩やかに食い込む舟は、みるみるうちに会議室の、この宮殿サイユエ かたちの容を削っていった。

天井が崩れ、床はひび割れた。

電燈ラトが割れる音と、議員達が叫ぶ声が風に吞まれてゆく。

倒壊する建築に伴って、再び強風と、砂礫が舞う。

カムカヌカは煙の切れ目に、ひび割れた天井の向こうに広がる、夕暮れの濃紫バンブルの空を見た。

会議が始まったのは、昼過ぎ、もう夕方なのだ――

「ヨル、ネイン、！」

砂利が顔に激しくぶつかる。

カムカヌカは風に煽られ、椅子につまづいて転んだ。

夢中でそれを風除けにすると、カムカヌカは眼を擦り乍ら、必死に二人の姿を探した。

のろのろと前進を続ける舟の起動音が響く。

「墮帝と、レカ嬢を探せ、！！」

突然の声と共に、不特定多数が会議室を駆ける音が聞こえた。

（何が起こっているんだ、！？）

困惑したままのカムカヌカは椅子を盾に、胸を押さえ呼吸を落ち着けようと努めた。

、不意に、背後に気配を感じ、カムカヌカは勢い良く振り向いた。

砂煙の少し先に、音も無く近付いた人影が在る。
僅かな視界の隙間で見て取れるのは、その人物が、紅い、という事
と、カムカヌカに銃口を向けているという事――――！！

撃たれる、！

カムカヌカはぐ、と唇を噛んで、目を細めた。

その刹那、カムカヌカの横を、何かが擦^すり抜けた。
目にも留まらぬ速さで風を縫ったそれは、カムカヌカを庇う様に、
構えられた銃^{ピスタ}の前に躍り出た。

驚いた人影が、一発、乾いた銃声を響かせる。

空を翔^{かけ}る助人は身軽にそれをかわすと、巨大な熱を放った。

炎の光源^{エネルギー}力に、一瞬にして輪^{リング}状状に砂煙^よが避け、視界が澄み渡る。

浅く息をつくカムカヌカがそこに見たのは、静かに燃える白炎^{トウフア}と、
そこに舞う大量の紅い花弁^{はなびら}。
そしてそれを背に微笑む、夜葬^{ユルバ}の蝶^{フレイヤ}の女王・アマカケルオボロノコ
ハクだった。

「カムカヌカ、無事か、？」

「・・・・・・はい、有難う御座います、」

そうか、と、につこり笑ってみせるコハクは、昨日昼間に会った時とは全く別物だった。

白い髪は腰のあたりまでだったが、自らの脚よりも下まで長く伸び、生気に満ちている。

薄く翻る異国の服は浮かび上がり、その華奢な背には、上品に揃えられた蝶の翅が伸びていた。

カムカヌカはあまりの美しさに息を呑んだ。
夜葬の蝶の、真の姿、。

「日が暮れていて命拾いしたな、もっとも、お主一人で天体団を全滅させる事の方が実に容易いのであろうが、」

コハクは金の瞳の真一文字に引かれた瞳孔を眇^{すが}め、座り込んだままのカムカヌカを覗いた。

「あれは、リーベン・ローエ天体団の舟なんですね、」

カムカヌカは徐々に晴れ始めた室内に、鼻先を押し込んだままの舟を指した。

コハクは頷き、カムカヌカの手を取り立たせる。

「大胆な事をする、ド・ラン・リュムゼン第二次月団戦争は免れられぬ、ダ・ルマस्क・ノルエ天球法議会さえ切り捨ててるつもりなのだ、」

冷えたコハクの手が、カムカヌカの不安を煽った。
突然、爆音が鳴り響く。

見通しの良く成った室内に、リーベン・ローエ大勢の天体団が出現した。
突撃第二部隊、といったところだろう。

みな、髪も、瞳も、服も、紅い。

リーベン・ローエ初めて観る天体団の団体に、状況が状況だけに、カムカヌカは恐怖を覚えた。

「行くぞ、」

ぐん、

カムカヌカの身体が、つんのめる。

コハクがカムカヌカの腕を引き、宙を進んで、強制的に走らせた。

瓦礫に埋もれかけた扉の外に間一髪、滑り出ると、先に出て行った
リベン・ローエ天体団がやったのだろ^うか、綺麗に整備された宮殿^{サイユエ}が見る影も無く、破壊されていた。

絵画や彫刻が砂屑^{すなぐず}と化し、蒼に光っていた壁や床は不規則に碎かれ、植物は燃やされ、炭^{すみ}に成っていた。

眉をしかめそれを見つめるしか出来ないカムカヌカの手を強く引き、コハクが迷う事無く廊下を導いた。

時折、遠くで爆音が聞こえ、地面が揺れた。

幾つもの部屋と渡り廊下を越えて、暗い通路をひたすら走る。

誰も、居ない。

「、、、何処へ、向かって、いるの、」

コハクが自分を良い方向へ導いているわけでは無いのではないかと疑心を抱き始めたカムカヌカは、息を切らし乍ら叫んだ。

「港だ、ユイルアロウは舟を出す、乗らねば置いてかれるぞ、！」

なるほど、彼が自分を置いて此処を^た発つ様が、ありありとカムカヌカの^{まぶた}瞼に映し出された。

「わたしも、意地でも乗る、」

コハクが納得の行かない声でそう呟いた。
ネインが怯えるだろうな、カムカヌカは走り過ぎの苦しさで、声を出せずに、頷いた。

二人は議會衛星港、という標識が床に大きく記された廊下を駆け抜けていた。

港へ続く道の最後の庭園を、ちょうど過ぎた其の時だった。

ドン！！！！！！！！！！

唐突に目の前の建物の壁が砕け、飛び散る破片の中から、一人の天体^{リーベン}団^{ロエ}がコハクとカムカヌカの前に姿を現した。

巨体を紅い軍服でかためた大男は、紅い短髪で、いかついその顔面には金に光る仮面を装着していた。

口元までは覆われていない為、笑みを浮かべているのが、すぐに解った。

その仮面の下からヨルと同じ真紅の瞳で真っ直ぐに二人を睨みつけ、男はすら、と、腰の剣を抜いた。

それを見てコハクがカムカ又力を守る様に両腕を広げる。

「貴様、わたしを女王と愚知しての抜刀か、低俗な真似をすれば、末代まで崇祝してやるうぞ、」

コハクの全身から何か神々しい白いもやが、湯気みたいに立ち昇った。激しい威嚇だった。

だがそれをものともせず齒を剥き出して笑う男に、カムカヌカの背筋は凍えた。男は舌なめずりすると、剣を振り上げ、無言でコハクに切りかかった。

コハクは翅をはためかせ、空気に乗って、軽やかにそれを避けた。カムカヌカも、咄嗟にコハクと別れ、壁を背に引き退がる。男の振り下ろした大剣は二人が居た場所へ深々と突き刺さり、それによって砕かれた床だったものが、それぞれの頬を打った。

息つく暇も与えず、コハクは宙空で逆さのまま、男の背後に手を翳し、魔法を放つ。

確実に当たる距離だった。が、巨体を感じさせぬ素早い動作で男はコハクの攻撃をかわすと、床ごと剣を抉り上げ、彼女を狙った。

同時に、男は胸元から短刀を引き抜くと、カムカヌカの中心へ直線で刺し込む――――！！！！

「カムカヌカ、！」

大剣を紙一重で避けたコハクが、白髪を散らして叫んだ。
カムカヌカは迫り来るその切っ先を、怯む事無く、見据えていた。
体内の緑が、まるで熱液の如く熱く滾る。
刺すなら、刺せばよい、。
。

ギイン、！！！！

金属がぶつかる音と同時に、カムカヌカの鼻先に、蒼い長上着ロウフが翻ひるがえった。

「……お前には、このお方の中身フォルタが、解らないのか、？」

大男に発された、哀れむ様な声。

この、お方、??

首を捻^{ひね}るカムカヌカの盾に、短刀を魔方陣^{ウイザ・ルタ}で受け止めたその男は、無駄の無い動きで天体団^{リベン・ローエ}の大男を跳ね飛ばした。

何が起こつたのか、全く理解出来なかった。

光弾^{ブロスル}も、蹴撃^{キレク}も、確認していない。

カムカヌカもコハクも、呆然として、幾本か木をなぎ倒し乍ら庭園の果てまで吹き飛んで行った大男の痕跡を見つめていた。

「お怪我は、ありませんか、」

予想もしていなかった優しさ溢れるその声音に、カムカヌカは飛び上がった。
ヴァルカ
守護してくれた彼は、他の誰でも無い、カムカヌカに向かって話し掛けていた。

「えっ、お、あ、はい、」

カムカヌカは壁に張り付いたまま、素頓狂な声を上げた。
すっとうきよう
この蒼い長上着は、
ロウブ
ダ・ルマスケ・ノルエ
ヘガ・ウイザド
天球法議会・専属魔術師の証。
フウト
頭布を脱いで、
ひざまず
跪き、深く礼をする彼の顔に、カムカヌカは全く見覚えが無かった。

「わたしはサテライト議会衛星ベガ・ウィザド専属魔術師はイチモ壱番陣ルオ中佐、ソ・ウーメイ蘇五明と申す者、
ヴァルカマツご守護仕れ、ヒリシエィア光栄です、ヒリシエィア緑宝、
無事で何より、」

ひびきます跪いたままカムカヌカを見上げる彼は、強くうねる黒髪を闇に透かし、
緑に澄んだ瞳で純粹に安堵の色を映していた。
必死に記憶を手繰るが、彼に逢った事は、無い。
いぶか訝しげに二人の様子を伺う、コハクの眼光が鋭い・・・

「おい、カムカヌカー、！」

その時、聴き慣れた声が頭上から振って来た。
三人を巨大な影が包み込む。

見上げると、そこには、月の舟、。

カムカヌカには初めて、このろくでも無いと吹聴され続けている天
舟が、心底安心出来る助け舟に思えた瞬間だった。

二十一、舵

三人の頭上を、何の起動音エンヂンもさせぬ、月の舟が差し掛かった。

すっかり闇が覆う夜空に、舟の舳先へさきからこちらを見下ろしている人影が幾つか確認出来る。

身を乗り出して手を振るネインの隣で、左眼帯の金の飾りを風に揺らしたヨルは、助けに来てやったぞ、という顔をして、ふんぞり返っていた。

その横で、静かに眼差しを落としていた蒼い長上着ロウフの男が、地上のカムカヌカ達三名に向けて、手を翳かざす。

すると、カムカヌカと、まだ跪ひざまずいたままの五明ウーメイの足下に、蒼白い光が湧き起こった。

光は線と成って二人を囲み、簡単な魔方陣ウィザ・ルタを描く。
舟から魔法を使った男が、その翳かげした片手で空中を掴み上げる仕草をすると、カムカヌカと五明ウーメイの身体がふわり、と宙に浮いた。

そのまま舟に吸い寄せられてゆく二人を追って、コハクも地を蹴っ

た。

「咄嗟の事で、ネインの手しか取れず、悪かった、しかし生還出来るとは強運だね、カムカヌカ、

どちらかと云うと、其れは緑と対峙して無事だった、天体団の台詞だと思っけど、」

甲板にゆっくり着地したカムカヌカに、ヨルは愉快そうに笑った。

ヨルの傍にはネインと、頭布を目深に被った専属魔術師が二人。

一人はその身長からして、少年魔術師、藍煌。

もう一人はたった今、魔法を使ってくれた、恐らく初対面の魔術師だった。

カムカヌカと五明より、数間遅れて甲板に降り立ったコハクを見て、ネインが一步、爪先を退く。

「蟲と仲良くなるとは、やっぱり趣味、悪いね、カムカヌカ、」

「仕舞いに燃すぞ、舟ごとく、」

恐い恐い、と言い乍らネインを大袈裟に庇う体言ジェスチをして見せるヨルに、コハクががなった。

カムカヌカは慌てて声を出す。

「コハクは助けってくれたんだ、来てくれなければ、撃たれていた、。

」

カムカヌカの発言に、コハクは云々《うんうん》と、首を縦に振った。

ヨルは露骨に嫌そうな表情かおをしてみせて、向き直した。

「、。で、そいつは、？」

ヨルの豪えらく冷ややかな瞳孔が、カムカヌカと共に甲板にやって来た

ヘガ・ウイザド ウーメイ
専属魔術師は五明に注がれた。

ヨルは好き嫌いがはっきりしている、カムカヌカにも徐々に解り始めたその態度の片鱗が、今まさに発揮されていた。

「この人も、助けてくれた、」

カムカヌカは位置的に自分側に居る二人を庇^{かば}う様に、気持ち少し両手を広げた。

縁^{へり}に背中を預けたまま、ヨルは片眉を吊り上げて不審がる。

「、何で、」

「、……え………何で、??」

短いヨルの問いに、カムカヌカも五明^{ウーメイ}を振り向き、同じ言葉を口に
した。

その場に居る全員の視線が無表情の五明^{ウーメイ}に集中したその時、

ダ
ア
ア
ア
ア
ン、
！！

近距離で起こる轟音こうおんと共に、舟が右に大きく傾かしいだ。
瞬間、宙に浮いたカムカヌカの身体を五明ごめいが受け止める。
ヨルは同じ様に転がりかけたネインを抱き止めると、素早く藍煌らんぱん達に預け、身を起こした。
空へ避難したコハクが鋭い声を上げる。

「被弾しているぞ、ユイルアロウ!!」

ヨルはその声を聴くか聴かないかの間たいで斜かたむめに傾く縁へりを掴つかみ、舟の側面のそを覗いた。
そのまま光弾プロスルが飛んで来た方向へ視線を滑らせたヨルは、紅い瞳に怒りを灯す。

「議会議衛星サテライトの対戦闘主砲ガン・キヤノワだ、正気か、」

そこかしこで黒い煙を上げる宮殿。^{サイユエ}

その向こうに聳^{そび}える巨大な砲台が隠れもせず、月の舟を狙っていた。直線に蛇睨む重厚な黒筒に、再び光源力^{エネルギア}が集束する。

「もう一撃来るぞ、ボロ舟を廻せ、ユイルアロウ、！！！」

「喧^{やかま}しい、！」

天^{そら}から叫ぶ蝶々に怒号を浴びせつつ、ヨルは宙に素早く魔方阵^{ウィザ・ルタ}を展開させた。
その円は描き終わると同時に、真白^{ペイトウ}に輝く、天舟^{そらふね}の舵^{かじ}に形を変える。
それを握ると、ヨルは乱暴に舵をきった。

間も無く砲撃が放たれた音が、鈍く空気を震わせる。

ズドオオオオオ

凄まじい爆音が、甲板の、カムカヌカ達の頭上を駆け抜けた。

激しい光と熱が行き過ぎるのを見ていたカムカヌカは、同時に甲板を守るべく展開された、青白い三つの光盾^{バルア}を目撃した。

三名の専属魔術師^{ベガ・ウィザード}が瞬時に施してくれたものと理解して、カムカヌ

力は少し、胸を撫で下ろす。

間一髪、舟は二回目の対戦闘主砲を避ける事に成功した。
ガン・キャノワ

舟を越えた砲撃は彼方まで飛び、議会議衛星を宇宙と隔てている透明な壁を、見事に貫いた。
サテライト エウレン ヘだ

爆発音が鳴り響き、炎が鮮やかにうねった。
遙か向こうへぽっかりと開いた穴は、宇宙へと、容赦無く全てを吸い出し始める。
エウレン

やがて風穴はこの舟にも牙を剥くだろう。

ようやく均衡を取り戻した舟は、側面から灰色の煙を上げていた。
舵を手にしたまま肩で息をするヨルの銀の髪を、柔らかな雫が滑り落ちる。

「・・・・・・・・雨、」

静かに降りだした雨が、甲板を湿らせてゆく。

「、オルブ・バルラント天候制御装置が壊れたのでしょう、」

「・・・・・・・・ニコ議会衛星も沈むんだね、ヘレイオ死海惑星のように、」

ネインを優しく包む魔術師に、藍煌が呟いた。
頭布の下でどんな顔をしているのだろう。

五明が親切にもカムカヌカの頭に、長上着を翳してくれた。
軽く会釈を返したカムカヌカの目に、対戦闘主砲を睨むヨルが映った。

脇腹から出血している。

「その怪我で舟を発されるとは、一体いつ、貴方は自殺願望者まで堕ちたのだ、？」

二十二、別離

強い声が甲板に届いた。

ゆっくり点滅を繰り返す舟に、初見の人間が三名、空間を捻じ曲げて降り立った。

臨戦態勢をとる専属魔術師^{ベガ・ウイザド}を挙手で制し、ヨルが前へ進み出る。

真ん中の細身の男が後の二人を従えるように立つ三名の天体団^{リーベン・ローエ}は、先程、五明^{ウイメイ}が吹き飛ばしたような雑魚では無いという事が、カム力ヌカにも直ぐに解った。

何というか、雰囲気^{オウラ}が巨き^{おお}い上に、軍服が、赤ではなく、白だった。

中央の偉そうな男は、切れ長の紅い吊り目を鋭く細め、敵意むき出しでヨルを睨んでいた。

右眼だけにかけられた片鏡スラの金連チエンが小刻みに揺れている。

両の腰袋には数えられない程の大小の銃ピスタが、乱雑に押し込まれていた。

その後ろの一人はカムカヌカと同年とみられる若さの少年だ。

真紅の頭髮は長く、一本に編まれ、若々しい両頬には左右対称に不思議な模様が刻まれていた。

軍服が捲まくられたその腕には、怪我でもしているのだろうか、包帯が巻かれている。

もう一人は女、短い髪は目の下で切り揃えられ、深くかぶられた軍帽で顔はよく見えないが、結ばれた唇が小さく震えているのをカムカヌカは目敏めいこく発見する。

「……ダンテ、自殺願望が在るのは天体団おまえたちだろう、僕はもうずっと、そう諭してきた、」

三名の眼前で、ヨルは溜め息混じりに言った。
ダンテ、と呼ばれた男は、片鏡スラを光らせて笑う。

「貴方の其の考えに、誰も賛同しなかった結果が此れだ、叛乱チャッヂと嘯うそぶ
く、成れの果てが緑狩りだヒリチャンと、崇高な天体団を辞めて、緑喰ビイソ
とは、今でも団内の良い噂話ゴシツですよ、」

ふん、ヨルは鼻で笑って、何時もする、辛そうな自嘲を浮かべた。
仲間だった者からの、攻撃デルダ、その背景が全く不鮮明だが、カムカヌ
力は少しずつ、ヨルを理解し始めていた。

脇腹から濃い血染みを造形するヨルに、ダンテが再び何か言おうと
口を開いた其の時、ヨルの前に小さな影が飛び出した。
彼は頭布フウドを手荒に剥がすと、鋭い口調で言った。

「僕は天球法議会専属魔術師は壹番陣中将・胡藍煌、
如何やら天体団の五大將軍と見受けるが、お前らは我らが議会議衛
星を潰しておいて、何様のつもりか、！」

幼い少年、藍煌が噛み付いた。
（將軍、！？）

カムカヌカの脳が冷える。
形が違うと思ったら、成る程、將軍……！

瑠璃色の瞳を怒りで満たした藍煌の背に、五明と、もう一人が駆け
寄った。

それを見てダンテの後ろに居た三つ編みの少年が、抱えていた書類
を手に口を開いた。

「恐れながら、、、天体団將軍・ラファイド・ハイド、発言しま
す。」

墮帝が未だに宇宙の亡霊である件、並びにレカ嬢を誘拐している
件、過去に天体団を混乱に陥れた件、現在進行形でこれ等を遂行し
ている件、その他諸……解決の為にこれだけの大事に至る事が
必要なのです、我々は決して戦争を望んではいません、ご理解と和
平を、」

「同じだろう、！此れだけの事をすれば、戦争は必然だ、！！」

叫び、取っ組みかろうとする藍煌を、頭布を被ったままの魔術師
が抑え込む。
息を切らす藍煌の瞼を、徐々に激しさを増す雨が打った。

「兎に角、今の所はレカ嬢を差し出してくれたら良いのです、舟の
居場所はまだ把握出来ず、

アランが回復すれば、いずれ、沈めに参ります故、」

ラファイド・ハイド、と名乗った將軍は真っ直ぐヨルを見据えた。
ヨルは少し青い顔で眉根にしわを刻む。

アラン・コリアンスは、健在の様だ。
それまで黙っていたダンテが、再び片鏡スラを光らせた。

「そう云う事だ、墮帝カエラ、速やかすみにレカ嬢を寄越して頂きたい、」

そう言い乍らダンテは腰に備えられている派手な銃ピスタを手にした。
小さく悲鳴を上げるネインの元へ寄ると、カムカヌカはその肩を抱いた。

レカ嬢、ネインの事だ、ネインは、天体団リーベン・ローエなのだ。
堂々と銃ピスタを手先で遊ばせるダンテを、ヨルは余裕そうに嘲笑あざわらった。

「酷く不穩ぢやないか、ダンテ、一寸ちよつとは遠慮と云う物を学べよ、余計に長生きしないぞ、唯ただでさえ馬鹿げた取引カルエが内臓を蝕んでいる、お前も、僕も、」

脇腹を押さえ、足下がふらついてきたヨルを見て、ダンテが吐き捨てる様に言った。

「宇宙^{エサレン}を巻き告ぐ天体団^{リーベン・ローエ}は、代謝が頻繁な方が良い、潔さは必要不可欠、

吐き溜まりの老廃物は消えろ、！！」

ダンテは遊ばせていた銃^{ヒスタ}を構え、発砲した。

ヨルの前に居た専属魔術師三名^{ベガ・ウイザド}が、一斉に青く発光する光盾^{バルア}を展開した。

ダンテは銃弾を連射、全てが激しい光の矢と成って、藍煌^{ランファン}達を貫^{しつぬ}くうと光盾^{バルア}に突き刺さる。

ばちばちと電撃^{ボルト}が競り合う音と、明るい光が、甲板いっぱい^{バルア}に広がった。

見守る他無いカムカヌカとネインは、縮こまって目を細めていた。

刹那、カムカヌカは背後に殺気を感じ、振り向いた。

其処には三つ編みの将軍^{バドルマキヤ}、ラファイド・ハイド^{ヒスタ}が銃を両手に構え、照準を合わせているところだった。

「、、！！！！！」

咄嗟にネインを庇^{かば}ったカムカヌカを更に庇^{かば}って、ひとつの影が滑り込む。

不気味に赤黒く淀^{よど}む血紋陣^{フロ・ルタ}が、回転し乍ら複雑な数式を描いた円を組み、ラファイド・ハイドへ闇を伸ばした。

宙で身を一回転させ、ぎりぎりですれを避^よけたハイドの背後に再び円陣が組まれた。

目を剥くハイドに、容赦無く漆黒が爆発する。

体勢が整っていないがなんとかかわしたハイドの肩に、闇の糸が少し掠^{かす}った。

傷口から真紅の花弁^{はなびら}が舞い散る、。

「ハイド、一体、誰の何処^{カルエ}を取引してきたんだい、生臭いね、腕、」

カムカヌカとネインの目前に降り立ったヨルが、指に付着した自らの血を、舐めた。

爛爛と煌く其の紅い瞳は、此処に居るどの天体団より、澄んだ、純粹な紅だった。

「ユイルアロウ、！！！」

振り向けば、藍煌達を押しやり、ダンテが数十の銃を乱射し乍ら、ヨル目指して爆走して来ていた。
ウーメイが急ぎ、魔法で茨の様な鞭の様なものを放ったが、目前に急に立ちはだかった短髪的女將軍に邪魔されてしまう。

ダンテに気を取られているヨルを背後から撃とうと、既に被弾し、花弁を舞わせているラファイド・ハイドが銃を構えた。
が、頭上から降ってきた何者かの放った炎で、視界が遮られてしまう。

空から勢い良く舞い降りたコハクは、ハイドの脳天に蹴激もお見舞いした。

突進して来るダンテに、ヨルはネインとカムカヌカを後ろに、身構えた。

光の粒が継続的に舟を飛び交い、手負いのヨルを狙う。

狂気に撃ち叫ぶダンテを攻撃するべく、ヨルが脇腹の流血を掬い取

り、大雑把に血紋陣を描きかけた、其の時だった。

「レカ嬢は頂くぞ、」

水の中で発声する様な、ごぼごぼとした不気味な声が響いた。
カムカヌカとネインが姿勢を低くしているその床に、黒い異次元穴
が現れる。

ネインを抱き、退こうとして、カムカヌカは黒い雷に遠く、跳ね飛
ばされた。

鞠の様に床に叩きつけられたカムカヌカは、痛みを堪えて、顔を上
げる。

煮立つ如く湧き上がるその闇から、白く細い手がネインへ伸ばされ
た。

「何、っ！？、」

円陣でダンテと対峙していたヨルが異変に気付き、目を剥いた。
穴は水溜りに広がり、其処から弱々しく差し出された血管の浮き出
た白い手は、今まさにネインの世^セ勉^エの制服の裾^{すそ}を掴みとった、。
。

「きゃあああああ——————っつつつ、——！！！！！！！！」

ネインの絶叫が耳を劈く。^{つぎ}

「ネイン!!!!!!!!!!!!!!」

ヨルは発砲を止めないダンテから身をひるがえ翻し、ネインのもとへ走った。

「させるかああああ……!!」

背後からの弾丸をもろに食らい乍らも、ヨルは必死の形相で失神したネインの首根っこを掴み、穴の淵から引きずり上げた。
瘴気に弾かれ、胸を強打したカムカヌカが、やっとの思いで、ネインのもとへ這い戻った所だった。

「そんなに欲しいなら、くれてやろう、！」

ヨルは背中に無数に食い込んだ弾丸の痛みも忘れて、にやりと邪悪な笑みで眼帯を歪めた。
そして力いっぱい、憎しみを込めて、背後に迫ったダンテの胸座をむなぐら掴んだ。

、
つもりだった。

ダンテだと思って掴んだ其れを、ヨルは乱暴に穴に放り込んだ。

「、え、うわ！」

「、つ、な、カムカヌカ、！？」

「^{ビリジエイア}緑宝、、！！！！」

一部始終を遠くから観ていた五明^{ウメイ}が叫んだ。

ヨルが其れをカムカヌカと認識したのは、時既に遅し、。

白い両手は満足そうにカムカヌカを抱えると、禍々しい漆黒の泥^{デイル}へ、沈んで行った。

穴は、一瞬で閉じられた。

硬直したヨルへ、敵味方関係無く、甲板に居る全ての人物からの白い視線が、爪先から頭頂まで、串刺しに向けられていた。

二十三、出立

雨が激しく本降りをはじめた。

音を立てて甲板を打ち付ける雨に、身じろぐ者はひとつも居ない。
たった今起こった出来事に目を疑い、全員、脚に根が生えたみたい
に佇^{たたず}んでいた。
まるで刻が止まった世界、。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ネインを抱き、ぽかんと口を開いたまま無言で床を見つめていたヨルが、向かいに立ち竦むハイドに瞳を上げた。
目が合ったハイドはびくりと姿勢を正し、構えていた銃を下げつつ、視線を逸らす。

ヨルは次に背面を振り返った。

すぐ後ろで事の全てを見てしまったダンテが、これまた視線を外す。其の遠くに居る専属魔術師達も、示し合わせた様に、順番にヨルからの空虚な視線をかわしていく。

ヨルはもう一度、カムカヌカが吸い込まれて行った床を眺めた。雨が激しく肩を叩き、ヨルの足元へ薄めた血の溜まりを成す。

「ユイルアロウ殿、！」

急に声がして、棒立ちの將軍三名の頭上と足許に、瞬時に青白い円陣が出現した。
それぞれを天と地で挟む様に造形されたそれは、中央の標的に対し、重力を増す。
三名が鈍い悲鳴を上げたのと、ほぼ同時に舟上に降り立ったのは、
ダ・ルマスク・ノルエ・ベガ・ウイザド シャオレン
天球法議會専属魔術師、小蓮だった。

「おそ晩くなり、申し訳ありません、」

ロウフ長上着をはためかせてヨルの隣に現れた小蓮は、相変わらず目許を
シャオレン和ませたまま、軽く頭を垂れた。
小蓮の登場に、硬直していたヨルの意識がはっと、我に戻される。

「・・・不手際だったな、小蓮^{シャオレン}、だから僕は出席を拒絶してやったのに、」

ヨルはネインの身を胸中に、長身の魔術師^{ウイザード}を見やった。

「過ぎてしまった出来事を戻す力が貴方に御有りですか、？
下ばかり気にかける、皇帝^{シエラ}として玉座を手離してしまった、貴方の悪い癖です、」

小蓮^{シャオレン}はにつこり微笑んでみせると、傷だらけのヨルを下がらせた。
遠くに居た藍煌^{ランファン}達が飛び寄り、小蓮^{シャオレン}の傍を固める。

ヨルとネインの盾に立つ、四人の魔術師を見て、円陣が生み出す重力場にもがいていた將軍ダンテが、口端を吊り上げて目を細めた。

「貴様ら、此の儘では済ませぬぞ、緑を携え我等は穢れたこの舟を冥月もろとも石炭袋にて、葬儀を辱めたもつ、！」

ダンテは鋭くそう唸ると、小蓮が展開した円陣の壁を叩き割り、空間の歪みの向こうへ消えて行つた。

ハイドと、女も、同時に姿を晦ましていた。

小蓮の魔方陣が、硝子の様に、床に散らばる。

肩の荷が降りたみたいに、ヨルが深い溜め息を吐いた。

魔術師達もそれに習って緊張を解くと、水を吸って重くなった長上

着を払う。

静寂を取り戻した甲板で、再び雨音が跳ねていた。

黒い煙を上げる宮殿^{サイユエ}を悲しげに見つめる藍煌^{ランフアン}の頭を、頭布^{フウド}を被った
ま^{ウイザド}まの魔術師が優しく撫でる。

気絶しているネインを支え舟の外を見渡していたヨルが、急激な眩^め
暈^{まい}を感じ、体勢を崩した。

青い顔のヨルが地へ雪崩れる前に、小蓮^{シャオレン}が素早くその身体を、受け
止める。

「議^ギ会衛星はもう駄目です、我々をお乗せください、」

小蓮^{シャオレン}がヨルに懇願し、頭を下げた。

ヨルは支えにと回された彼の腕を押し退け、好きにしろ、と呟いた。
銀の髪が水に濡れ、疲労を映すその紅い眼差しを透かして、顎を伝
う水滴が涙の様に甲板を濡らした。

「^{デオン}大将、
」

^{ランファン}藍煌がもう駄目、と言った^{シャオレン}小蓮を見上げた。

何かを訴える切なその瞳に、^{シャオレン}小蓮は無言で首を横に振る。

^{ランファン}藍煌も幼いが、れっきとした^{ベガ・ウインザド}専属魔術師だ、従うべき事柄には、従うしかない。

それを理解している彼は、唇を噛むと、黙って一礼し、背を向けた。

「^{ランゼン}戦争、^{リーベン・ローエ}無能な天体団を潰す良い^{チャンセ}機会だ、後を追うぞ、
」

出血多量のヨルはふらつき乍ら^{ヘリ}縁に？まり立ち上がると、もう一度、

舵を創り出し、せせら笑った。

瞳孔は開き、全身から苛立ちが渦を巻いて立ち昇っていた。

「成りません、」

小蓮^{シャオレン}が、怒気の割りに力無く舵を握る、ヨルを制止した。

「此の儘追えば、一瞬で沈みます、早急な全快が先決でしょう、
さきの戦闘での緑^{ヒリチヤン}による蝕撃^{ダムアイズ}が効いています、遠回りですが、
療^{ア・スエズ}合^{フ・アスタス・エイド}の集中治療室へ舵を取るべきです、」
医^{アリ}

諭す様に宿める小蓮に、ヨルは口を尖らせた。

「おい、黙って乗れないなら、降りろよ、船長は僕だ、追うと云うたら、追う、」

紅い瞳をきつ、と、眇めるヨルの顔色は悪く、去勢であることが明らかに見て取れた。

先頭を向き直り、颯爽と舵を取るヨルを見て、やがて黙っていた小蓮が、溜め息を吐いた。

その彼が深々と頭を垂れているのに気付いたヨルは、その一礼が何を意味するのかに息を呑み、慌てて歩を退く、

・・・が、遅かった。

あっという間にヨルの眼前に移動した小蓮はその手刀を、再びどくどくと血の溢るる彼の脇腹へ、情け容赦無く食い込ませた。

声にならない悶絶を押し殺し、ヨルは床へくずおれた。

「手荒な真似をお許し下さい、せんえつ僭越ながら、この舟の舵はわたしが執らせて戴きます、」

ひゅうひゅう飄飄と微笑む小蓮に、シャオレン藍煌が惜しみ無い拍手を贈った。

「舟の、・・燃料に、ヘオクして、やる・・っ、・・、・・、・・、」

頬を雨で濡れそぼる床に押し付け、あぶらあせ脂汗を滲ませて、ヨルが呻いた。
マルダ聖母の様な優しい笑みを浮かべ、先程の対戦闘主砲によって開けら

れた風穴へ舵を進める小蓮は、ふと、五明があらぬ方向を眺めている事に気が付いた。

「五明、如何しました、」

雨の所為でうねりの更に強くなった髪を強風に無造作に遊ばせた五明は、緑の瞳を巡らせてぽつりと溢す。

「蝶が、いない、」

ヨルと魔術師^{ウイザド}たちは、一瞬考え、目を瞬^{しばた}かせた。
そして軽く小刻みに幾度か頷き合つと、何事も無かつたかのように、
舟の行く先を見据えた。

二十四、夢

ふわり、ふわり、、

眼下に広がる美しい命灯^{ユエ}の青。

何処までも何処までも続く、生命の海。

太古からの深い森かと思えば、それは時たま大きく水の様にうねり、胎動した。

そこから絶える事無く、小さな光の粒が震え乍ら空へ立ち上ってゆく中で、宙を舞う木の葉の様な不安定さで、黒髪の少年が浮いていた。

カムカヌカは完全に脱力した状態で、宙空を少し前進したり、斜め後ろにそり上がった^{かたち}りして、ゆっくりと落ちていた。

容の無い緑の浮遊物は、カムカヌカに触れた側^{そば}から避けずに消えて行く。

寝起き眼とぼんやりの意識に、自分の身体がこの空間ぎりぎりまで膨張しては、消えそうな程に集束する不思議な感覚を覚えていた。

紺色に塗られた空には、狂いそうな量の記憶画像^{ロフト・メア}が投影され、休む事無く再生されていた。

天からはひっきりなしに、幾重にも笑い声や、歌、子供の無邪気にはしゃぐ声等、幸せな音が耳に届いた。

頭から落ちていたカムカヌカは、想像もつかない世界の出来事をただただ見上げていた。

何かとても大切なことを、ものを、遠い場所に置いたまま来てしまったのだが、よく思い出せない、。。。

ふと、カムカヌカは海原に巨き^{おお}な気配を感じて意識を戻した。

身を振^{よじ}って視線を落とすと、少し向こうに一際立派な大樹^{ひときわ}が、神々しく輝いていた。

他とは比べ物にならない、神樹^{リオ}、。

それが時間をかけて、静かに呼吸している事が、カムカヌカにはすぐに判った。

身体の内から一本の芯を通し、神樹とカムカヌカは共通していた。

いや、カムカヌカだけでは無い。

宇宙の全てが、情報網でここに繋がっているのだ、

あの、月の舟でさえも、。

（緑の、産まれる所、）

光に抱かれたカムカヌカが手を伸ばして枝に触れようとした其の時。

神樹に茂っていた、美しい緑が、音も無く一斉に散った。

一瞬で眼前に灰色が爆発する。

幸せな声も失せ、曇った空に記憶画像も観得なく成った。

急に凍えそうな風が吹き荒び、果てしない虚無がこの世界を覆った。

先刻まで神樹だったものが容を変え、巨大な手と成って何かを探し
てのた打ち回る。

同時に地からは細くて長い真つ黒の腕が数え切れない程伸び上がり、
触手の様に不気味に蠢いた。

困惑したまま高度を下げるカムカヌカに、黒い手が届く。

回避は叶わず、無数の腕は、抵抗するカムカヌカの髪を引っ張り、

喰らおうと引き寄せた。

巨大な灰色の手も標的を定めたのか、カムカヌカを向いた。

それからは全く慈悲や手加減といった類たぐいの感情は感じられなかった。
害蟲ハドでも潰すかの勢いで、巨大な手が、カムカヌカに襲いかかる、！

緑喰ヒインに捕らわれ、自分の意思で動けないカムカヌカに、振り下ろされた手が――――――

「うわああああああああ、――！！！！！！」

「カムカヌカ、！」

ばちん、と、眼を覚ましたカムカヌカは、弾かれたように身を起こした。

何間も走った後タイルみたい息が乱れ、肩は上下し、汗をかいていた。すぐ隣には、夜葬ユルバの蝶フレイヤの女王・アマカケルオボロノコハクが寄り添っていて、心配そうな、というより、不審で満ち満ちた視線を送っていた。

彼女の左手が、カムカヌカの髪の毛を掴んでいるのは、今はどうだつて良い、。痛みからして引つ張られていたのは確実だが、彼女なりに起こそうとしてくれたからに違いない。さっきのアレとは、関係ない筈だ。

そんな事を適当に考え乍ら、カムカヌカはまだ震える掌てのひらで額を押さえた。

氷の様に冷え切った、手。それとは裏腹に、体内の緑ヒリチャンが熱く沸騰しているのを感じて、カムカヌカは自身を抱き、身震いした。

「平気か、随分と魔うなされていたが、」

髪の毛を掴んだまま、コハクが囁いた。

「・・・ええ、」

カムカヌカは視線も定まらないまま小さく応えた。
脳裏に浮かぶのは、夢映像ばかりだった。
ドラムデモン

あの場所を、僕は知っている。
いまから、向かわなければ。

二十五、現在地

「何だ、ユイルアロウに刺される再現ディジャでも観たか、」

小刻みに息づくカムカヌカの額の汗を、コハクが薄い拭布ハンケチで優しく撫でた。
覗き込んでくる大きな金の瞳が、少なからず労わりを映している。

「・・・一寸ちよつと、悪い夢を、観ていました、」

カムカヌカは体内の熱を落ち着かせ乍ら、慎重に発言した。

あの世界と自分が共通リンクしている事は、誰もが知っているのだろうが、
緑ビリーチヤンとして呼ばれている事を、誰にも知られたくなかった。

コハクは片眉を吊り上げ、訝いぶかしげに静止したが、やがて、白髪を揺
らして立ち上がった。

その存在サインは点滅せず、実体として確立してはいるが、力が充分で無
いときの背格好に戻っていた。

「、、、、。。。。そうか、兎に角、今は現状の打破が先であろう、」

コハクは溜め息混じりにそう述べると、カムカヌカの手を取って起
立させた。

ぐらぐらと軋む全身を起こし、視線を巡らせる。

今までカムカヌカが気絶していた見知らぬ此の場所は、就寝前の豆パ
電球ラシンの薄明かりに照らされた、倉庫オルケの様な場所だった。

床は綿の入った分厚い素材で、毛布オルケに立っている感じがして、何だ
か申し訳なくなる。

部屋全てを覆う天井まである棚には、実に大雑把に、医療器具が放
置されていた。

医療器具、と、言っても、カムカヌカにそんな知識がある訳でもな
く、そして緑刻ラ・ヴァーで見た事の有るものとはどれも異なっていて、心の
なかで、ようなもの、と、付け足すのを、彼は忘れなかった。

複雑な造形を成す、埃を被^{かぶ}った硝子容器や、太陽を模^{スウ}した陽気な真^{しん}鍮^{ちゆう}の手術刃等々、趣味の悪い雑貨が、数え切れない程、散らばっていた。

コハクがそれらを心底嫌そうな視線で眺めるのを見て、次第にに冷静さを取り戻したカムカヌカの脳裏に、瞬時に、先刻、何が起きたのかが思い起こされた。

^{サテライト}議会衛星で起こった戦闘、月の舟での將軍達^{バドルマギヤ}との接触、そして・

「ヨル・・・・・・・・」

わざとは思わないが、何の躊躇^{ちゆうしゆ}も無しに驚^{わしつか}掴^{つか}まれたうなじを押さえる。

虚空を睨み、引き攣^{ひき}った笑みを浮かべるカムカヌカを宥^{なだ}める様に、コハクが軽く背を叩いた。

「まあ、安心しろ、何度も云うが、お主に太刀打ち出来る者など、
この宇宙^{エウレン}の何処にも存在しない、
戻らなくなった肉体が、お主の魂魄^{こんぱく}を守護^{ヴァルカ}する術^{すべ}を施してくれた、
」

戻らなくなった肉体、、
空気を読まない率直な物言いに、カムカヌカは小さく、肩を落とす
た。

「その身の内に眠れる強大な神^{チテオ}の息吹き、誰もが恐れ、欲する其の、
緑^{ヒリリ}を使用^{リヤン}するが良い、

そうすれば、此の船団を全て無に帰^きす事が容易に出来よう、
」

「、此の、船団、？」

らんらんと薄がりに光るコハクの瞳を見詰め返し、カムカヌカが反応した。

コハクは頷^{うなず}き、細い腕を伸ばして、この空間に唯一の小さな窓を指し示す。

天井近くに申し訳程度に削^くり貫^ぬかれた丸窓に、カムカヌカはちつとも気が付かなかった。

柔らかい蒼の光が差し込むその丸窓へ、カムカヌカは遠慮^{ルケ}がち^オに毛布の床を踏み、そつと移動した。

傍に有った木の踏み台に躊躇^{ためら}う事も無く昇り、丸窓に手を掛けて、静かに外を覗く。

「、う、わ、、、！！、」

カムカヌカは息を呑んだ。

窓の外には月の舟への乗船で見慣れてしまった銀河が当たり前に広がっていた。

勿論、カムカヌカが驚いたのは銀河に対してでは無い。

その広大な銀河に見渡す限り、寄り添い^{ひし}犇めき合って浮かぶ、幾千もの巨大な戦艦が存在していた。

まさに、「船団」、。

触先や頂上に設置された不気味に紅く発光する点滅灯^{てんめつとう}が、不規則にあちらこちらで瞬き合うのには、嘘罪夜^{ランタンチオ}で遭遇した、如何しようも無いおぞましさを懐^{いだ}かざるを得なかった。

目を剥いたまま、外を見詰めるカムカヌカに、コハクが云った。

「我々は、天体団^{リベン・ローエ}の、本陣に居る、」

状況が状況だったのだから、まあ、そうだろうな、とカム力ヌカは肯定しつつ、同時に、ああ、目覚めなければ良かったと、烈^{はげ}しく後悔した。

窓の外の銀河は何処までも、暗く、深く、静かだった。

二十六、緑想

リーベン・ローエ
天体団本船団の、下らない瑕疵かしを伴った傲慢ごうまんな船転ツオル。
あかつき
暁を恐れず万事まことの幸福の追求と謳うたう薄命ミヤウヂヤウの明星。

漆黒を滑る様に前進する彼らは第丁軸ノビトの参百八十式・五零地点を、
ちようど、緑刻ラ・ヴーとは正反对に、その遙か彼方かなたに聳そびえる、天の門、盟ソレ
スト・ソレユ
天塔へ向けて舵を執っていた。
またた おびただ
銀河に瞬く夥しい数の点滅灯てんめつとうが示すその船の数は、おおよそですら
測り知れないものがある。
幾隻まよが纏まとまつての外部からの合流も見られるが、逆に陣からの離脱
等も行われ、時たま、その配列を乱していた。

船団の先頭を運くのは、最も巨大な首領戦艦フエリ・チルド、船名は、天駆神威チエンチヤの
祝福ドロフの君、。

大層な名を持つこの船は、そこいらに浮かぶ多少の惑星なぞ塵ちりにも

等しく思える程に巨きく、そして、神々しかった。

この船は、例えるなら、意思を持った金属演奏器だった。

まるで繊維色紙に優しく包まれた灯を思わせる、内に七色の炎の揺らいでいる様子で、ぼんやりの光が不規則に波紋を広げる船体はさておくとして、

其れ由りも所銀河に剥き出しの美しい金の歯車群が、この宇宙で、不気味に輝いていた。

船の上層部ほぼ全域を覆う精巧で高価値な玩具を皆尺に延ばした其れは、まさに、ひとつの城であった。

きりきりと無数の音を立て軋み乍ら、大小何万の歯車が休まず回転する。

其の度に銀河のずうつと遠くまで、金の光が吸い込まれていった。

歯車の奏でる、悲愴な叫びにも似た旋律とその鈍い光が、天体団の道標として、天駆神威の祝福の君の存在を報せていた。

「団長、将軍が戻りました、月の舟は、現在、医癒合へ舵を廻しています、」

齒車の城、フェリ・チルド首領戦艦の中枢。

窓、と呼ぶにはあまりにも大きな硝子超しに、行く先の闇を見詰め、鎮座している男が居た。

振り向きもしない彼に発言した遙か後方の男は、真紅に磨かれた床にひざまずに跪き、頭を垂れたまま続ける。

「バドルマギヤ將軍は全員軽症程度、ふ臥していたアラン・コリアンスもあわ併せ、間もなく船団をた発つ予定です、」

暗がりの窓側に座して天宙そらの星星を見やる、団長、と、呼ばれた男は、両腕に幾本も繋がる点滴ロキをわずかに揺らして、ほんの少しだけ頬を傾けた。

「…………俺のレネイニアは、如何した、？」

力の無い声に問われた男は、膝をついたままびくり、と、肩を震わせた。

「それが、魔術師^{ウィザード}が失敗を働き、未だ、墮帝^{カエラ}の許^{もと}に、」

瞬間、団長、と、呼ばれた男が、座っている椅子の肘掛を拳で打った。

苛立ちを露にする彼に、報告をするのみの男は縮み上がる。

暗くてよく見えないが、なみなみと薬品の入った点滴が細かく揺れ、吊るし棒に幾本も管が当たり、甲高い音を立てた。

「、、・・・命令だ、ダンテに伝えよ、一刻も惜しむ事無く迅速に月の舟を沈め、必ずあの銀髪を殺せ、そして、レネイニアを、取り戻せ、とな、勿論、無傷でだ、」

団長、と、呼ばれた男の低い怒りを押し殺した声を聞き終わるか否かで、命令を受けた男は立ち上がり、練習したかと思える程のテキパキとした動きで一礼すると、一目散に広過ぎる玉座を後にした。

重々しい扉の閉まる音を聴いてから、彼は背凭れに深く身を預けた。同時に、咽を詰まらせる様な苦しみを覚え、胸を押さえる。

（未だだ、未だあと、もう少し、あと少しだけ、この世界に、・・）

彼は眉をしかめ、自分が座する傍の、小さいが装飾の豪華な小机に置かれた、ぎゅうぎゅうに錠剤が詰め込まれた大瓶から、追いつてられる様に急ぎ、掌で？めるだけ其れを驚？んだ。

指の隙間から零れ落ちるのも気にせず、呼吸をするのと同等の自然さで、錠剤を頬張る。

身体の中心の、淡い緑色の光を、落ち着けなければ、。

脂汗が滲む額を、首筋を、放たれかけた光が収まってゆく。

彼はしばし目を閉じた後、ひとつ、溜め息を吐いて、硝子の向こうの銀河に吸い込まれてゆく、歯車の閃光に目を細めた。

（・・・・・・失敗とやらに由つて、此の天駆神威チニエンチャドロフの祝福の君に、招かれざる孤客こかくが侵入はいり込んでいる、言いように由つては、まあ、こちらが召還してしまつた事に成るが、）

先ほどの団員が其の報告をしなかったのは、自分たちで如何にか出来ると思っ
ているからであらう。
彼は、実に微かに淡く息衝く、己の指先の白緑の鼓動に視線を落とした。

（相手は、^{ビリチャン}緑本体、団の者では先^まず太刀打ち出来ぬ、天体団として^{リーベン・ローエ}
^{バドルマギヤ}の宿命だ、將軍達でさえも、命^{ユエ}灯そのものには触れる事すら敵^{かな}うま
い、）

彼は消え行く灯火を見送り、暗がり意識を溶かしていく。
団長であり続けたいと、願う。願う。驕^{おこ}る。見失う。

（だが、俺は、お前に、触れられる、）

中身、^{フォルタ}心臓、^{ハルト}攻撃、^{デルタ}取引、^{カルエ}。

何もかもが唯一で、何もかもに、触れられる。
数えられない気の遠くなる年月を燃やした、別離を想う。

^{テスト}遺証で夜を渡ったお前は、曇り亡き緑宝でいられるのか、？
^{ユエ}命灯を喰らう卑しい俺に、お前は、隠しもしない純潔な緑を、^{ピリヂェイア}
^{かいな}その腕から、離すのか、？
^{ピリヂヤン}

穏やかな呼吸を胸に、瞳を閉じた彼は、誰にも気付かれず、静かに身体を脱け出した、。

迷い無き船団は、真っ直ぐに^{ソレスト・ソレユ}盟天塔へ向けて、進んでゆく。
燃え尽くす^{カロール}熱量を放つ、灼熱の女神・ソラ・ソレイユを討つ為に、。

二十七、夕餉

「ねえ、一寸、！」

紺色の跳ねた髪少年は興奮して叫んだ。
手にはフォーク、斜めに分けられた前髪を留めるピンに、真鍮の光
が交差する。

「其処のビート鹹煮と味噌椿、あと、小さめの豆檸檬ちようだい、
あ、勿論、乳塩蜜たっぷりかけてね、！」

「**藍煌、**専属魔術師ともあるう者が、みつともありません、さあ、

静かに座って、少し、待ちなさい、」

「あ、五明、ウメイ！ 此方にもウツラギ草の茹麺と、こちら山芋餡を、ピエネやまいもあん」

「、ネイン、一角獣の甘肉は食べられるかい？」

「うん、多分、でも僕、そっちの、真ッ平らの貝が、食べたい、」

「五明、ラグ貝紅酒蒸しと、ソーサー水、其れと、わたしに波布珈琲（はふかりー）の御代りも、頼みますよ、」

好き勝手に飛び交う、和氣藹藹わきあいあいとした会話に漂うのは、偽善でも違和感でも無く、純粹な、良い、香り、。

深い蒼の机を囲む全員が、意識する者しない者含め、穏やか過ぎる空気を生み出していた。

この舟には似つかわしくない、ほのぼの仄仄とした雰囲気を、さも、毒でも喰らったかの如く、しばらくの間、呆然と遠くから傍観していたヨルガ、遂に耐え切れなくなつて声を上げた。

「いい加減に、しろ、！」

此処は月の舟だぞ、
「!!!!!!!!!!!!!!」

真紅の瞳で睨みをきかせたヨルの叫び声に、一瞬、ざわめきが失せた。

「……ラグ貝紅酒蒸^{べにざけ}しと、肉詰め蒟蒻^{じんにゃく}、追加、」

「貴様は特に黙ってろ、！」

空気を読まず、さらりと発言した五明^{ウーメイ}に向け、すかさずヨルが規制する。

五明^{ウーメイ}が気に入らないヨルは、彼に対する態度の遠慮^{えんよ}を已めたらしい。料理を載せた大皿を両腕に抱えた五明^{ウーメイ}は、肩を竦^{すく}めると机に皿を置き、椅子に腰掛けた。

「ユイルアロウ殿、勝手な船内使用、どうかお許し下さい、」

湯気を点^たてる淹^いれたての波布珈琲^{はぶカルファ}を一口飲み、立ち上がった小蓮^{シャオレン}が、深々と一礼して、にこやかに云った。

「皆、空腹を弱^いっています、何時^{いつ}、天体団^{リーベン・ローエ}からの攻撃^{テルダ}を受けるとも知れぬこの状況では、目的地迄、我々が貴方を、身が裂けてもお守り致す他有りません、我ら議會^{サテライト}衛星^{ヘガ・ウィザド}専属魔術師、必ず、御恩をお返ししよう存じます、。

酷^{ダムフェイス}い蝕撃^{イクキ}です、どうか、貴方は、御休息成されて下さいますよう、

「

優しい笑みを浮かべた小蓮は、もう一度、お辞儀してみせた。
其の後ろで藍煌が、そろりそろりと、口に料理を運んでいる。

「・・・、御休息、ね、」

藍煌ランファンに向け、息を吹き掛ける仕草で魔法を放ったヨルは、疲れた様子で口角を吊り上げた。
ヨルの魔法で顔面に豆檸檬まめれもんを炸裂させた藍煌ランファンは眼を押さえ、水場を求めて部屋を駆け出て行く。
其の背中を、皆の哀れむ視線が追いかけた。

「本当にそう思っているのなら、何故、お前らは僕の寢室で晩餐会^{ド・ラフダフ}を催して居るんだ、？」

ヨルは苛立ちを極力押さえ、頬をひくつかせ乍ら、小蓮^{シャオレン}を見据えた。

そう、此処は、ヨルの、寢室だった。

ヨルは寢台で、砲撃に因る痛みを孕んだ脇腹を摩り、真白に点滅する月の舟で、しばし、休憩するつもりだった。

カムカヌカを引っ掴んでからと云うもの、実に色々な事が起こり過ぎて、正直、疲れた。

アリア・スエス^{メエル}医癒合へ着く迄、静かに、思考の海深く沈みたかった。純粹に体調も、悪い、。

其れが、何だ、気が付けば甲板に居た筈の全員が此の部屋に集合し、拳句の果てに、食事までしている、。

「レカ嬢の御希望です、ユイルアロウ殿のお傍でないと、如何しても、厭いやです、と、」

栗色の長い髪でよく見得ないが、ネインは顔を真まつ赤うづもにして俯うつむけていた。

ネインはヨルの事が心配で堪らないのだろう。

其れを此処で云しゃう小蓮オレンを一瞥いちべつし、ヨルは困こった様に誰にも聴きこえな
い溜ためめ息を吐ついた。

そして起こしていた身を寝台に滑らせ、皆に背を向けて横になる。

「、もう、勝手にしろ……、但し、静しずかにやれ、
僕ぼくが少しでも煩うるいと感じたら、即刻、心臓ハルトを喰くってやる、。」

シャオレン
小蓮は全く、という素振そぶりをして、椅子についた。

同時に皆も、料理の並ぶ蒼い机に向かい直す。
ベイトウ

真白にゆつくりの点滅を繰り返す、決して明るいとは言えない、ど
ちらかと云えば不気味なこの舟室での夕餉ゆうげが始まった。

ランファン
やがて藍煌も眼を擦り乍ら、戻ってきた。
こす

サテライト
議会衛星から持ち込まれた簡易食料品の良い香りと、フォークと皿
の接触音が、異端にも月の舟に響き渡る。

ピリシエイア
「緑宝を、案じておいでですか、。」
」

正のオーラに叛く^{そむ}様に背を向けてふて寝しているヨルに、声が掛けられた。

その人物は議會衛星^{サテライト}で頭布^{フウド}を脱ぐ事の無かった、専属魔術師^{ヘガ・ウイザド}。

ヨルより少し大きい位の背格好の彼は、大人しそうな顔立ちに、灰色の瞳をしていた。

端整に刈られた短髪は、白銀の大きな髪飾りで解りにくく成っているが、天体団^{リーベン・ローエ}に似た、薄い赤髪だった。

従順さを窺^{うかが}わせる物静かな彼の問いかけに、ヨルは仰向けに体勢を変え、天井を見詰めて応える。

「、、案じて、は、ない、」

ヨルは額に右腕を乗せ、銀の髪をなぞった。

「本陣に召還されたのならば、其の身を案じてやるべきなのは、^{ベン・ローエ}天
体団の方だろう、^{ライヤン}雷妖？

だが、団長は、別だ、あいつは、^{ヒリチヤン}緑に、触れられる。

カムカヌカは、奴に遭遇するべきで無い、蟲が憑いているから、
予想以上に鼻は利くと思うけど、・・・」

寝台の傍で、陰に座る、^{ライヤン}雷妖、と、呼ばれた^{ヘガ・ウイザド}専属魔術師は、黙った
ままヨルを見詰めた。
それが、また、ヨルには辛く感じられた。

「カムカヌカを喰ったから、僕は飢えずに存在している、承認も得ないままに、舟として、」

僕は、嗚呼、中身とは、フォルタ幾年月経て、怨を燃やしても、ちつとも変わりやしないのだ、」

「・・・貴方が悼む事ばかりでは有りません、彼が望んだから邂逅した、神のお導きです、チテオ

どうぞ、今はお休み下さい、アリア・スエズ医癒合も、労わるばかりではありません、すまい、」

雷妖はそう囁くと、一礼し、ロウブ長上着を翻して、ヨルの傍を離れた。
仰向けのヨルは、そのまま点滅する天井を、ひたすら見詰めた。
ライヤン
のど
咽に競り上がる謝罪の念。

苦しくて、涙が、溢れそうだった。

必ず、連れてゆこう、ほんとうの天上へ、楽園^{レイ}へ、
そんな事でしか、償えない、

僕は、緑^{ヒリチャン}に、なりたかった。

二十八、船団広場

カチャ、、、

ひとつの、扉が、僅かに開いた。

まるで眠っている何かを起こさぬ様に全ての神経を集中させる、慎重に慎重を重ねた、実に大人しい開扉だった。

その細い細い隙間から、何か小さなものが、ひらり、と、姿を現し

た。

それは、一匹の白い蝶だった。
蝶々はひらひらと辺りを漂い、扉前の廊下のその先を少しだけ伺う
と、戸の端に停まって囁いた。

（誰も居らぬ、だいぶ遠くまで生者の^{ラクトル}気配は無い、）

それを聴いて、カムカヌカはゆっくり、扉を開けた。

戸の外は、今居た倉庫内と同じく、就寝前の豆電球の薄暗さで、真
ん前に真っ直ぐに延びた通路の先は、あまりよく見えない。
カムカヌカは、ごくりと、唾を呑んだ。

（幸い、此処に我々が落ちた事は、未だ気付かれてはいないらしい、
まあ今頃、血眼で搜索しているだろうが、）

「・・・やっぱり、此処でじっとしていた方が良いんじゃないです
か。。。。」

脳裏に直接、通話^{トルク}してくるコハクに、カムカヌカは小声で反抗した。
小さな蝶々のコハクは、ひらりとカムカヌカの肩に停まる。

（駄目だ、団長は船の命灯^{ユエ}、いずれ見付かり、精神を奪われよう、）

団長 - - - - -

ここにきて、カムカヌカの中で薄らぼんやりとした存在でしかなかった天体団の現・団長^{リベン・ローエ}という存在が、じわじわと喰い込む毒牙の様に、彼の心を占め始めていた。

いずれ、会わねば、何かは解らないが、何かが、終わらない、、そういう、存在。

ヨルにとっても恐らく、そういう存在、。

それに、と、コハクは続けた。

リーベン・ローエ あほう
（天体団の阿呆な術者のお陰とも言つべきか、驚いて手を離れた
のが運の尽き、
天敵の縁を船内に見失うとは、此程、此処を脅かす状況は無い、
あらゆる機関・星団・帝国・組織に向け、戦争の引き金を引いた
天体団を戒める機会だ、畏怖するよりも、其の、全てを産み出す
命を、翳せ、）

「・・・、。」

カムカヌカは肩に停まる小さな蝶から視線を外し、溜め息をついた。

確かに、コハクの言う通り、真実の片鱗すら知らぬカムカヌカの目
から見ても、天体団の行いには疑問を覚える。

それ以前に、カムカヌカは自分でも知らぬ内に、自分はヨルの味方
であるという、気恥ずかし乍らも、その様な念が、感謝と共に沸沸
と燃えているのを自覚していた。

口を嚙んで押し黙ったカムカヌカに前進を促すかの様に、コハクが
肩から舞い上がる。

ひらひら前方へ向かい飛んでゆくコハクを視界の端で捉えたカムカ
ヌカは、静かに扉を閉め、そろりそろりとその後を追った。

「見付かったら、如何動きますか、」

先の見えない通路をひた歩くカムカヌカが不安そうに囁く。
長く狭い通路の豆電球は、眠りよりも恐怖を誘う。

（如何もしない、その為の衣装だろう、）

「、、、、。」

衣装、と言われてカムカヌカは自分の着ている薄汚れた服を見下ろした。

これは、コハクに言われ、先ほどまで居た倉庫で掘り出した、天体^{リーベン・ロエ}団の作業服らしきものだった。

上着とズボンは繋がっており、しつこいほど幾つも物入れが縫われている。

所々、穴が開いているこの紅い服は、ひとつの寝袋^{シラフ}みたいな、カムカヌカの見た事も着た事も無い容^{かたち}の服だった。

ついでに言っと、カムカヌカはそれとおそろいの帽子をかぶっていた。

更についてに言うと、倉庫から武器になりそうな骨董を幾つか頂戴して来た為、服自体が重く、歩く度に金属音がするので、余計見付かる確率が上がっているみたいで気が気じゃない。

「紅いものを着て、髪の色さえ隠しておけば平気だ、」とコハクが得意げに言うので、これを着てきたわけなのだが、不安でしかない。そんな単純なものだろうか。。。

もう一度溜め息をつきかけたその時、突然、視界が拓けた。

「・・・う、わ・・・、！」

完全に油断していたカムカヌカが身構えるより早く、上げた眼前に広がる世界に、その神経は釘付けに成る。

――二人が出たところは、ほんの小さな広場だった。

敷き詰められた石畳が丸い空間を作り、その中央には鐘を手にした彫刻が建っていた。

広場を囲む高層団地はどれも立派だが、暗く、静かで、窓も閉め切られている。

彫刻の足下の水溜めも、もう何年も使われていないのだろう、ひどく荒れていた。

カムカヌカ達の右手に続く細い道は緩やかな坂を成しているらしく、その上がっていく傾斜沿いにずっと向こうまで、こまかくひしめき合う、数え切れない家々が見て取れる。

同じくらい細くしか見えない天を仰ぐと、吸い込まれそうな美しい銀河が広がっていた。

よく見ると、巨大な窓枠が見て取れる。

絶句するカムカヌカも、ここが船内なのだ、と言う事に、改めて気付く。

広場には今来た一本道と、その坂道しか続いていないようだ。

灰色に色褪せた高層団地を舞い上がって行ったコハクの帰りを待つ間、人氣が無い事に安心したカムカヌカは、中央の錆びた彫刻に、ゆっくりと近付いた。

此の噴水が止まってどれ位経つのだろう。

石段の縁^{へり}に腰掛けて、カムカヌカは彫刻を見上げた。

野ざらしにされたまま手入れのされない彫刻は、雨に依^よって流れた線のせいで、不気味に見える

デネイス
運命に在る。

この彫刻も例外ではない。

鐘を高々と天に掲げた女性は、顔にその筋が幾つも造形を成し、泣いているとかでは無い、とにかく不気味に見えた。

それはこの女性が、下半身が四つ足の、牛^{ホルストル}の様な異様な形^{なり}をしていたせいも間違いないがある。

肌寒い風がカムカヌカの頬を撫で、ぞつとしてカムカヌカは視線を逸らした。

と、足下で風に押され、カサカサと鳴る紙くずが在る。

興味津々、拾い上げたカムカヌカは、すぐさま肩を落とした。

それは新聞紙だったが、その文字はカムカヌカの読み書き出来る文字では無い。

そこに記されていたのは月の舟の中や、コハクに貰った絵の具に書かれていた文字に似ていた。

だが、所詮、見た事が有るというだけで、解読など出来やしない。がっかりを否めないカムカヌカが力なく宙に放り出そうとした時、新聞紙の写絵^{ビュート}に目が止まった。

其処には首や頭、腕にこれでもかと言う程、包帯を巻いた、
- - - 恐らく、ヨルが写っていた。

「、・・・!!!!!!」

カムカヌカは新聞にこびり付いた泥や土を払い落とし、写絵^{ビクト}を覗き込んだ。

恐らく、というのは、仕方の無い表現だ。

それというのも、紙面で大勢の団員に囲まれ、無表情にこちらを睨むヨルは、今、カムカヌカの知る彼の姿とは少し異なっていたからである。

かなり色褪せた紙面では有るが、ヨルの髪が銀では無く、真紅なのがはつきり見てとれた。

真つ赤な王衣^{シヴア}に身を包んでいるが、骨折しているのか左腕は首から吊られ、点滴^{ロキ}が胸元にまで幾本も刺さり、額には雑に包帯が巻かれている。

尋常では無いその不健康さに、カムカヌカは思わず眉根を寄せた。

そして何より、この写絵^{ビクト}のヨルは、眼帯をしていなかった。

右目は・・・健在だ。

両目とも、相変わらず冷たい紅^{あか}を映している。

其処に写っているのは紛れも無く、皇帝ユイルアロウ、その人だった。

その姿を、カムカヌカは食い入る様に見詰めた。
紅一色だった頃の、ヨル、。

過去に一体、何があつたというのか、。
自分もその齒車に望んで乗った者だ、真実が、知りたい――――
――。

と、カムカヌカは記事が裏にも続いている事に気付いた。
新聞を広げてみると、ヨルの写絵ビクトと対を成す様にして、もう一人の人物が写っている。
その人物は、光に透けそうな金色こんじきの髪の毛の、白衣を着た若い男だった。
男も健康そのものというわけでは無い様で、右目に眼帯、手首や喉元には包帯をしていた。

（此の髪の色、。 リーベン・ローエ 天体団では無い、のだろう、か、？）

しかし、右目に眼帯とは、・・・。

何か考えを巡らせようとしたカムカヌカの瞳に、更に写絵ピクトが飛び込んできた。

白衣の男の写絵ピクトの下に小さく掲載されている、少女、・・・。

笑顔を見せるこの巻栗毛の少女には、はっきりと見覚えがあった。

「ネイン……………!？」

「という事は、この白衣は……………」

「リーベン・ローエ天体団現団長・ナヴレカ、だ」

「！！！？！？、っ、」

唐突すぎる背後からの声に心臓^{ハルト}を唸らせたカムカヌカは、前のめりに躓^{つまづ}き、派手に転んだ。

あまりにも奇抜な動きをしたカムカヌカを見下ろし、人型をとったコハクは、金色の瞳を眇^すめ、不機嫌そうに口を結んだ。

もう一度、冷たい風が狭い広場に吹き荒んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4561h/>

月の舟

2011年1月28日11時43分発行